

何かする。其も、芋蟲や、蜥蜴は然もあるべきですが、現に蟬を嫌ふものがある。食物の好嫌も味には寄りません。タンスチウは、恚くいふ拙者もあやまります。日の丘やこがれて熱き牛の舌ね、心持が悪いではありませんか。」

守山は衝と身を起して、赤い鼻緒の上草履で、つか／＼と寄つて、

「藤岡！ 握手。」と言つて左の手を。藤岡も微笑みながら、右の手を上下に三ツ振つた。

「呀！ 羨望、羨望、僕も一つ。」柏崎は、忙しく卓子の眞中へ、掌を縦に、額に當て、衝と藤岡に差向けた。

此方は故とらしく頭を掉つて、

「意氣相投しなければ不可ません。」

三

柏崎は一寸四邊を見て、

「藤岡、外に客も居る、何か君に嫌はれたやうで、甚だ見つとも好くない。お手輕な處で、是非頼む。」

「否、成りません、お手輕などとは益々以て怪しからん。」

「畜生め、賣ッ妓の氣で振りやあがる。癩に障るが、外聞が悪いからよ。」

「北溟の魚大惰氣の體さ。」と守山は座に歸つた。

「覺えてろ／＼、猶以て甚だ、之は、是非、これさ、何の事たい。」

中腰で、卓子に蔽はれかゝつたまゝ、大にまごつく。

記者傍より、

「何ぞ、意氣相投することにしたら可いでせう。好きとか、嫌ひとか言ふもので。こんな又手取り疾い投じやうはありません、一寸御相談をなさい。」

「だから迂遠だと言はれるのだよ、疾くやれ、鳶口。」と子爵も興がつて口を添へた。

「婦人々々、さあ江戸ッ兒は氣が疾い、これなら申分はあるまい、怪我にも嫌ひだと吐して見ろ、何うだ、美人は。」と言つたが、何か氣が差したか、立直つて、柏崎が振返る、背後の方に紅の窓かけの、一際電燈に照り添ふ處、大輪の菊の花瓶を中に、相對して、人品の好き老人、孫か、末の女かと見ゆる、年紀十七八の女の、高島田に、フランシンの濃いお納戸の肩掛をした、姿見よげに、打上つて品の可い、氣高いのと二人居て、睦じげに、且つ樂しげに支度をするがあつたために、フツと口を噤んだが、まじくなひに大硝子杯の飲さしを倒に傾けて、

「ポオイ、大を五個、待て、天下分目になつた、さあ、芋蟲！」と調子高。



聞えたか、別なる卓子に一人、件の令嬢と背中合せに飲んで居た、陸軍の中尉が、思はず振向く満面に笑を湛へて居る。

トタンに三人づれで急ぎ足に入つて来た商人風のが、次の室へ入り際、小耳に挟んで、一寸立停つたのである。

折から硝子杯を持出した、小使も又以前から様子を心得たと見えて、くすり／＼。

柏崎は又一盞大呷りに呷つて、

「さあ、一大事、芋蟲は何うだい、よう、藤岡、芋蟲で一つ折合へよ、後生だからよ。」

藤岡は泰然として敢て動ぜず。

「強ひつけたつて、不可ません、先方が、ヤケに嫌ひなものでなくつちや駄目でせう。」

「蠅は何うだ。」

「否。」

「忌々しく持たせやあがる。」

「何、私は決して己を欺きません、蠅は好ぢやありませんが、何うも守山君の牛と接吻位には参りませんから。」と落着く。

愈々急ぎ込み、

「うはゞみか、些と滑稽だな。蛇か、いけない。蚤か、いけない。蚊か、え、ぼうふら。」

「變化極りなし、うはゞみから、子々になつた。」

「天上すると、龍に化けるよ、」と子爵も口が悪い。

「柏崎、北溟の魚にしないか。」

「無念骨髄に徹するが、先刻何とやらして何とかが好嫌ひが何うとか言つたな。待て、む、

蜥蜴々々！ 蜥蜴で負けてくれ、あ、草臥れた。」

とどつかり腰を掛けて、

「それとも守宮かい。」

藤岡は未だ顔かないのに、却つて守山が腕をさしのべ、

「柏崎、怨は怨だが道は道だ。公明正大、僕は其の守宮で一つ握手をしよう、聞いても身震がする。」

「謝す！」といつて大呼吸をついた。今は早や敵をも頼むばかりと成つたか、手を緊めながら、

慨然として、

「廂合ぢやあるまいし、守宮の道もないものだ。」

一同は哄と笑つた。



子爵はしなやかに手を伸べて、

「私は其の虻で行かう。」

記者が引續き、

「お次手に蚊を握り殺さう。」

四

餘念なげに、愆く睦み合ふ四人を見て、嬉しさうに、然りながら、敢て同意の色を表はさない、藤岡の秀でた眉宇の間を、稍落着いて、柏崎は瞳を定めて、何等か其の意に投すべきものを認めんとしたのである。

「しかし人事ぢやありません、恚う四人とも折合つたものを、藤岡を口説き落せないのは、餘り手が無い。」と記者は眞面目に謂ひ出した。

「だから、北溟の魚が可いな。」

「控へろ。」といひながら、じつと藤岡を瞞めた目に、笑を湛へたが、見る／＼破顔して、又彼の膝に手を置いて、斜に構へ、

「そんなら、藤岡、今日の婿君は何うだ。」

「何、今日の婿。」

「佐賀のお照さんの良人だ。即ち我々が此處に来て、午後九時半の興津行の汽車で、今しがたその新婚旅行を送つた人物よ。」

藤岡は少時黙つたが、

「多田道雄か。」

「氣障な奴だ。」

と答ふる端に、決然として、

「可し。」

「妙だ、是非占めよう。」と記者と一所に手を占めた。

「む、衣服の改良を唱へて、我が國の女子に朝鮮の官妓見たやうなものを着せようとする奴だ。此方からも出掛けよう。」と故々立つて、歩み寄つて、守山も手を取つた。

「小紋縮緬の衣服を着て、朴の木齒の日和下駄を穿いてる男さ。勿論行かう。」と子爵も同一意である。

さて皆顔を見合せた。

柏崎は膝を叩き、



「失戀々々、これがために守山は田舎へ引込まうと言ふし、子爵はラセラスを極めようと言ふ、これは又臺灣へ行かうと言ふか、藤岡なんざ、南亞米利加へ探險に行かうと言つた。いや、はや！」と大欠伸をする。

「お言葉の中ですが、尊公は、」と記者が、膝をついた。

「僕は何、浅間山の神主に成らうと思つた。」

「いや、暢氣なもんです。」

又哄と笑ふ。

「然し、一人として當つて見たものはあるまい。何、柏崎だつて、子爵だつて、憚りながら、此處にある者さ、忍びの緒を切つて出れば可かつたに、いづれも澄すから豎子が手にしてやられた。外聞の悪い。失戀などと言ふな。口説けば必ず用ゐられたさ。」

「何しに以て然るべき。」と柏崎は腕を組んで、

「遠くこれを意中の人に求めんより、近く隣席の御老體に聞いて見ろ。あれなる令嬢を嫁したまふやうなものは一人も居ない。」と先刻は、口にするのも憚つたが、硝子杯の数を重ねたれば、氣焰萬丈。

「たゞし、諸君、其の良人を、あしざまに言つて、徳義に對して恥んでも宜いか。」と藤岡はフト

溜息を吐いた。

柏崎は言下に、

「宜しい、敢て構はん。」

「いや、藤岡の意味は、然うでない。兎も角も其の良人たる多田を罵つて、彼の人に對して濟なくはないかと言ふんだ。」

「勿論、今ぢや、其の幸福を祈るばかりさ。」

と一人がいつた。

「亭主は亭主、美人のためには心から其の結婚を祝するんだ。可からう、お照さんは實に祝すべし、だが、亭主は馬鹿だと言ふ事よ。」

「尤も蜥蜴、守宮のはじめから、ものの道理上から立つた議論ではないのです。」と柏崎は沈着に「理非明白。」

「ぢやあ、奴を占めたかはりに、好悪の感情の、今までは悪の方だつた其の反對に、今度は好い方を行つて、眞心を捧げて佳人の健康を祝し、且つ其の幸福を占めようではないか。」と柏崎がつかと立つ。

祝  
杯  
「贊成。」の聲、口々也。



「お待ちなさい、しかし同一握手の手段を以て爲ては、此際些と情を表するに足りないやうです。」と藤岡が言った。

「諸君、祝杯を上げませう。」と其美しき頭髪、やゝ亂れて、紅顔の公子も陶然たる風情である。

「ぢやあ、杯を改めて、」

「満々と五個の硝子杯を。」と守山が手を鳴した。

やかて、水晶に雪を削つて、橙黄色の眞心を湛へたのが、手に、手に、手に、手に、丁、丁、丁、丁、丁、

丁と合つて、颯とばかり、姿正しく満を引いた。餘の事の見事さに、事の半ばより傍目も觸らず

五人に見惚れて獨笑みした、隣席なる老人の、思はずハタと手を鳴すに連れて、獨酌の士官も又拍手。

波がしら



「おかみさん、今晚は、今晚は、」

と鬼川べりの雲の夕暮、侍町の長い土堀の角なる、小さな荒物屋を、腰障子の外から呼ぶ、三は袖口まで窄めた凍瘡の手に、悄乎と番傘の濡れしよびれたのを傾けながら、暗い軒下にイんで、聲をかくる内も寒さに顫へて、小刻に足駄の齒をがちくちく、

「遣切れないく、お、」と又一ツ體をゆすつて、

「一寸、一寸、おかみさん、今晚は、」

時に升形の戸をかつちり、たばね髪、そ、け鬢の四十餘の古女房、店で呼ばれても不性を極めて、急には炬燵から出なかつた。尻の重い癖に、女中の顔を透かして見ると、口は軽く、

「よう、浮氣者。」

「馬鹿におしな、何時だと思つてるよ、未だ灯も點けないぢやないかね。」

「然れば、人間御飯をさへ戴かないで済むものなら、友白髪まで炬燵から離れたくはないよ、餘

り寒いからね、一ツ切煖つて居た處さ、これから、又蕪ちよきくだ、寒いねえ。」

「本當に寒いッたらないね、何うしようかと思ふ。」

「而してお前さん何處へ行く。」

「何ね、」

「といつて三は袂をかさこそ、

「提灯に灯を一つ借りようと思つて。あ、お湯へお迎え、奥様が行らした。」

「おともぢやないの。」

「否大のお身輕で氣取らない方ですから、湯へ行らつしやるのに、おともが附くやうなんぢやありません。迎にも及ばないとおつしやるんだけれど、此の土堀の間が長いのに、寂しいッたらないんだもの、使はれて居るもの志です。」

「忠臣々々、然うしておあげなさい、悪くは報はない。」

「何も徳を取らうといふ譯ぢやあないんだけれど、あの通りの御容色好しだから、途中でまた間違でもあるとならないからね。」

女房は件の升形の戸に、指の尖だけ擱つたのが見える、煤けた顔で打領き、

「暫くの間だけども、此處ところが恐しく難所だよ。お前さん處の奥様が、あの御様子で、



湯上りか何かで、お前、人通のない處をお歩行でさ、悪く生酔にでもおつかまんなすつて御覽、金時計をぶら提げて、掏摸にぶツつかるやうなものさ、危険至極さ。それに甚麽にお心懸が高等でも、一度褌をお取んなすつた弱身だよ、からかはうといふ奴に出つくはしちや、先方が氣が強いから恐しいやね、其處は馬の骨にでもアイお一杯で、悲しいことにひけ目がおあんなさるといふものさ。でもまあ、旦那様が軍人で被在しやるから、其の御威光が、あるにやああるといふもんだ。

「其ね、旦那様は御留守なの。」

「お留守だつて。」

「つい此間御役所の御用で、名古屋の方へ御出張なすつたんです。」

「然う、そんなら此のまあ寒いのに、尻つ切炬燵へ入つて樂寝をなすつて被在つしやりや可いものを、其處は矢張それ者だね。」

と女房は染々いつて、憮然たるものがあるが如し。

三は傾けて居た番傘をうしろ廻にして、軒を漏る雫を厭ひながら尙ほ窓口に差寄つて、

「大違ひ、唯そればかりぢやあ、飛んだおめかしのやうに聞えるが、榮耀の餅の皮とやらで、此の降るのに、それも三日入らない人ぢやあなし、びしょ／＼湯に行くには當らないつた勘定にな

るけれども、其處がね、本當においとしい處なの。」

「ふう。」

「先に勤をなすつておいでの時分、何うにかして堅氣になつたら、演劇だの、遊山だの、いや奥様、御新造と、奉られて見たいのと、そんな望は些ともない。唯こんな晩にやあ、櫛巻にしてざんぶり一風呂入つて、一人で八疊敷の眞中へ寝て見たかつたんですとさ。」

二

「ふむ。」といつて女房は、大きに思ふ所あるらしかつたが、はたと合點し、

「客商賣は骨が折れるね。何うして／＼並大抵、傍で見るとやうなものぢやあないんだよ。――

こんな晩にやあ湯に入つて、八疊敷で一人寝て見たい――なるほど奥様は苦勞をなすつた。あ、

又御奉公をなさる、お前さんも御苦勞なり、荒物屋に添つて居る、媽々殿も御苦勞なり。

「其處らもくらうなりましたわ、ほ、ほ、ほ。」

「大きにさ、」

三は急に又慌しく、足駄の齒を土間に鳴して、

「笑ひごツちやあない、お、寒い。」



と袖口に絡めながら鎖を引出したぶら提灯、かじかんだ不精から氣味の悪いもののやうに、端を撮んで提げて見せ、

「疾く點けて下さいな。」

「一寸まあ、此方へお入り。」と窓から顔を引込ませて、腰障子をかたりと開けると、吹入る風に染込む冷氣。

二人とも胴顫して、

「おっ！」

「耐らない、此のさき二町ばかりは、田圃から吹曝でお察し申すよ。」

三は傘を土間にばさりと置いて、夜目には鮮かな雲の中の一筋路を、鬼川の流る、瀬の行く方

にすつと見遣り、  
「若いもんです、寒さの方はそんなに驚きはしないけれど、此の長土塀には獺が出るつて謂ふからね、驚いちまふ。つい二日ばかり前にも、内へ来る定どんが驚かされたつていふんですよ。否、眞個ですとさ、小僧に化けるつていふぢやありませんか。」と傘を一つくりと廻して腰障子を屈んで覗く。

と、ちよろ／＼と附木が燃えて、ひらめいて二ツに分れ、眞暗な中へ提灯が一ツ出る、中仕切

の障子が寒さうに顯れて、やがて板の間の黒い上、五寸ばかりの處をふらりと来る、女房の姿は茫然して、鎖を下げた掌が窪んで眞赤。

片手をだらりと提灯の上へ陰に提げて、咽を長くすると、目を白くした。

「三や——」

「あれ。」

「怨めしい。ふん、馬丁に情人がある癖に、何だ、然う怯氣々々して人魂と間違へちや可けないよ。」と渡す。

「いけふざけた、申戯だつて、お、厭だ、本當ですよ。未だ暮れ切つたといふんぢやあないから、湯屋で點けて歸らうと思つた、其さへ此方や我慢が出来ないで寄つたんだものを、」と大眞面目。

「おや、感心に獺が恐い？ あ、忤があらば嫁にする。」

「人、可い氣だねえ。」

「何、小僧にも幽霊にも化りはしない、奥様になるから氣をつけておいで。」

「唯、其の氣で参じませう。」と苦笑、提灯の鎖を乳のあたりへぶら／＼と釣つて持ち、足駄を引するやうにして軒を出しな、引かけた番傘が、逆にかへつて、柄が耳より上になり、三は胸を反して、はツと支へる機、川邊の方へ弓形によろけて、くるりと行手に背を向け、後退をする形で



二足三足。

「お、風立つた。」と高調子、女房が聲をかけたのにも、三は向風に呼吸を飲んで、むうとも言はず、旋てギツクリ、差す方に向直つて、傘を眞圓に備へて、一文字。

一陣颯と荒れた迄、又降りしきるばかりなり。

未だ暮れも果てないのに、荒物屋は腰障子を下すばかり、之れに限らず、閉籠勝の越路の冬、最も場末の侍町、長土堀二町ばかりの間は、獺のたはれ男の浮名に立つて、宵月の夏さへ人通は稀である。

況して、霜月の半頃から夜半に一しきり、黄昏に一しきり、片割月に、入日影に、漆のやうな雲がかゝると、堀の中で狐が鳴く。

三

其の雲が時雨れくくして、終日夜すがら降續くこと二日三日、山蔭に小さな青い月の影を見る曉方、ばら／＼と初霰、さて世が變つたやうに晴上つて、晝になると、寒さが身に染みて、市中五萬軒、後馳の分も、やゝ冬構なし果つる。

旋てとことのはの闇となり、雲は墨の上へ漆を重ね、月も星も包み果てて、時々風が荒立つても

其の一片の動くとも見えず。

恁て天に雪催が調ふと、矢玉の音絶ゆる時なく、丑、寅、辰、巳、刻々に修羅磔を打掛けて、

霰霰、又玉霰。

其のけた、ましき、凄しさも、北海を揺ぶる風の、海鳴のおどろ／＼しいのと一所に、耳について、板屋打つ音にも、窓を破る響にも、敢て耳を傾けず、目を敬てぬ頃を期して、正午の寒威良緩むと思ふと、例年の如く哄と雨、凡そ半時ばかりの間は、五度六度といふもの、恰も盆を傾くるが如き大雨になつて、頃刻止んだ、と思ふと、此日も晩方から、雲交りになつたのであつた。越の冬に恁ばかりのものはあるまい。霜はよし、霰はよし、雪はよし、凍さへ防ぐに楯がある。雲は凡そ世にあらゆる寒さ、冷たさの、水に會へば流に交り、火に會へば雫となり、風に會へば、白筋を立てて、さつと樹立に注ぎ、翻つて雪となるのである。

或はびしゃ／＼と石を嘗め、或は畦土の大根の葉に形を留め、瀬を早め行く泡に化し、袖に觸るれば絲をなやして、恰も館の纏ふやう、拂へども落ちず、打てども響かず、絞れども敢て筆を切らぬ。

然れば傘には柄もりして、つる／＼迂るのを、忘れるばかり確乎と取つて、三は川べりの雲の暗路。長土堀の半ばを辿る。



左手は鬼川を隔てて、遙に目貫の町の、裏手に並ぶ蔵を望むまで、三十年來殖産工業の道の開けざる市は衰へて、次第に畠となつた一面の大根畑の中に、非人小屋が二つ三つ見ゆるのみ、犬も吠えず、川は唯幅五間に過ぎないのであるけれども、晝頃の大雨に濁流渦を巻いて溢るゝばかり、中流波を蜿らし、土塀際の細道は處々弓形に切れ込んで、静にゆつたりとして寄せつ返しつするのが、沈んだ色で光るやうに、目を遮つて、今にも脛を浸すかと、三は足許も定かならず、傍に狐が棲むといふ塀の内の屋敷跡は、陰々滅々として雲が落着くのも手に取るやう、彼は一人に出逢はなかつた。勿論今朝から片手で數へる位は通つたものの、北よりも、南よりも、行逢つたのはなかつたのである。

「おや。」

「……………」

「三かい。あゝ、然うだつた。」

「奥様！」と一生懸命、聲に絶つて、眞俯向に前途を急いだ、顔とともに提灯を上げると、崩れた土塀に茫乎と女の影。

「奥様。」と些と甲走つて、提灯を環形に一振、振返るとすれ違つて、主は背後に立つて居た。爪皮の淺いのに、甲のふツくりした素足、絲織の半纏、襦子の帯、小袖にも襦子の襟、眞黒な艶に

映つて、頰から頬の色の白さ。透通るやうな耳許へ、斜に黄楊の鬢櫛、是が望といつた束ね髪で、提灯のあかりに湯上りの目許ほんのりと、蛇の目の傘の中で、振向いて身を捻つて、

「だらうと思つたよ、御苦勞ね、寒いのに。」

「奥様々々、私はあの。」と、呼吸を切つて未だせいゝ、横幅の廣いのが、すらりとした立姿と、傘の、黒と鼠を組交せに、ざ、ざ、ざ、ざと霏れる中で、擦寄つて身を揺り、

「もうゝもう、お念佛三昧でございました。」

四

「然う、私も此の提灯が便だつたよ。」と爽かに言つたが、三の傘から雫して、ヒヤリとかゝつた足の甲を、踵の見ゆるまで、うしろざまに擡げて蹴出しの裾の夜目にも媚かしいのを搦めながら、左の足の小うらにあてて、拭つて足駄を穿直して、其まゝ。

「急いで歸らうね。」

「あれ、奥様、お提灯はさきへ参りますものでございます。」

「長い丁場に灯は唯た一ツ切だねえ、もうね、お湯を出ると酒屋の前あたりから眞直に是が見え



「あなた。」

「あい。」

「こんな晩に背後を振向いて御覽なされるものぢやございませんよ。」

「何故え。」

「魔がさすものだと申します。」

「然うかい、三が嘘ばつかり。」

「否、眞個でございますよ、唯最うまつとう向うを、一心に念じて、目を瞑つて歩行く心持で居さいすれば、何事もないさうでございます。」

「厭だよ、そんなにして歩行いて川へなんぞ落ちちやあ。あら大變に水が出たこと、御覽、海のやうぢやないか、路が傾いで溢れて來さうだよ、すつと此方へ寄つてお歩きよ。」

と横に身を開いて土塀の際。

「奥様、狐が居りますよ、あなた。」

「こんく様、お稻荷様ぢやないか。」

と石垣に裳を觸れさうに、すくくすくくと見え隠れに影を描いて通つたが、一際明るく、濡土の壁の崩れ、其の姿の映つた時、偶然目に留るものがあつた。

「まあ、大きな相合傘を描いたこと、一寸お待ち、お前一寸其の灯をお見せな。」

「何うなさいますのでございます。」

「誰も居ないから見てやらう、いろくくくくなんだよ。」

「お止し遊ばせ、あなたお湯醒で風邪を引きますよ。」と止むことを得ず立停つたが、大きに縮む。

「然うく、私はほかくくするのに、冷いのがひやくくして、此頃のない體中のあかが抜けたやうで、すつきりして、他愛なく可い心持だけれども、お前は寒からう、行きがけにやあ私も骨が硬ばるかと思つたもの。可いやね、堪忍おし、見かけて見ないと今夜魔される、一寸お手數。其のかはり内へ歸るとお前を炬燵に煖らして、搔卷を着せて煖めて遣つてさ、私が衣服を脱いで板の間に坐つて顫へてあげるから。」

何んなに心地が清々しいか、何事も思はぬ狀で、二十四と云ふ人が、道草の悪足搔。

「何の他愛のないことをおつしやるやら。」と餘のことに三も笑ひながら、すつと寄つて、土塀に提灯をさしつけた、影は消えて、前後十町人なき處、灯を包んだ後姿、はつきりと二ツ立つた。

「何、おせき。」と讀みかけて、ためて見て、差覗き、

「丁寧に釘か何かで刻んで描いたよ、おせきが、厭だ、同一名だよ。」



「あら、彼處はそれぢやあ、旦那様のお名前でございますか。」

「串戲をお言ひな、小兒同志のいたづらだよ。」といひ消したが、ものずきは猶止まず、同一名の相合傘、男の名を見ようとすると、僅の間も降りしきつて、面に、雲がさら／＼、お關はもどかしさうに、手に持った白地の濡手拭をひらりとほぐしてひらく／＼と、土塀に對して雫を拂つた。

「お、三枝。」

三枝と一聲高く讀んで、銀杏齒の足駄をざつくと一足、あとへ退つて、じつと瞳を定めたのである。

五

「もう可いのでございますか。」と呼んで見ても返事がなし。お關は黒目勝な目をばつちりと、傍目も觸らず、土塀を踏めてゐんだが、忘れたやうに提げて居た手拭の端を引上げ、傘の柄を片頬にあて、差俯向いて、一寸背向、激に濡れたる目を拭ひ、

「何のこつた、詰らないものを、お、寒くなつた。」と肩のあたりのぞく／＼する状、するりと襦子の襟を引合せる、又一時哄と風。

川波の逆立つばかり、北から南に吹荒ぶと、土に溜つた水も蜿つて、裳も袖も斜にはらく／＼、びしやりと傘を向う状にすばめると、袖口を巻きあげて、腕白く、両手に確乎と柄を掴んで、「しどいよ。」といふと又一ゆれ、半纏の背は波をはらんで、髪を殺ぐやうに黒髪も颯と靡く。

三の體は一ツ廻つて、番傘は一問引裂かれた、提灯は一ひしぎ、重石でひしやがれたやうに確と消える。

「ほう。」といつて立竦む、三の袂を横合から無手と捕へて、びたりと附着いた、濡鼠の一寸法師。「む、。」といひざま腰に縫つた毬栗天窓の猿眼、きよろりとするのを一目見るや、ぎやツとも言はず、其の取着かれた腰を抜かして、水ツ溜へ貫目のある肥つた臀をどつさり尻餅。

途端に小男は黒犬が立つたやうに、ひよこ／＼と飛離れたが、突然、なよ／＼と風に堪へたるお關の腰に縫着いた。

と殆ど同時に、起きも上らず、肩を揺つて、腹に大波を打たせて、難産といふ體で居た三は、ぬつくと突立つて、

「河童だツ」と喚くと齋しく、彈丸が外れたやうに、湯屋の方へ雲を亂して一目散。

お關も取着かれた體は鳩尾のあたりから消えて失せさうな、冷いものに引抱かれて、舌を釣つて呼吸を引いたが、わな／＼と顫へながら、



「あ、れさ、何をおしだねえ。」と見る間に細りと痩せて、身を竦めた。  
「叔母さん、寒いよう。」  
「まあ。」

「寒いやあ、寒いやあ。」と顫へ〜我を忘れて泣いて居るは、お關が乳の邊までよりない脊だけの、九ツばかりの男の兒、あはれ小雀の霜に凍てた、いたいけな手の赤らんだので、覺えのないまで、半纏の袂を引掴み、腋あけの下の肌のぬくみに、ひつたり顔を押當てた。  
筒袖の布子一枚、襪襪の見える襦衣を着たが、尻端折で、跣足、笠も持たず、唯取着かれたばかりでもお關が小袖二枚を透して膚まで通りさうにづぶ濡である。

と先づ見て落着く端に、心優しい婦人なれば、怪しがる者を振りも放さず、傘前に差傾け、手拭を持つた手を、上から背に載せてそつと叩いて、

「兄さん、何うしたよ。」  
「寒くつて歸られねえや、叔母さん連れてつておくんな。」  
「家は何處。」

「彼處! 彼處!」と言つて掴まつたま、小僧は身悶して、  
「荒物屋の角から曲つて、すつと行くんた、すつと行くと穴水田圃の入口だ。」

お關は然も親身に頷き、

「あ、可うござんすとも、連れて行つて上げませう、何て家なの。」  
「三枝。」

「え。」

「三枝だよ。」

「三枝です!」

小僧の背を抱いた手に、確乎と力が入つた、少し屈むやうにして、

「名は。」

「菊次だ。」

「而して、而して。」とお關は息をはずませながら、

「何は、お父さんのお名、ぢやあない、あ、お父さんはない、ぢやあ兄さんの名は。」  
「菊藏でんだ。」

六

お關は四邊を向した、今の一荒で持つて來たか、降るものの白さが増した。土堀にざら〜と



當る音。

「さあ、何しろまあ、此方へ附着いておくれ、生憎肩掛も何も着て来ない、お前さん傘は何うしたのさ。」

「川へ流れつちやつたの。」

「あらしに取られたんだね。」

「あゝ。」

「お前、まあ何より跣足で冷たからう。可哀さうに、お待ちよ、今此の足駄を脱いで上げるから。」

と、すいと引上げる下前の勝色裏。

「入らねえ、そんなものあ入らねえ、轉んじまあ、駄目なこつた、跣足は馴れてら、足は冷たかないんだよ。」

「然うかい、いいかい、叔母さんは大人だから大丈夫だものを。」

「寒くつて爲様がねえ。」

「何しろ、困つたね、成たけ、さあ恚うやつて、袂をかけて、」

菊次はお關の半纏の中へすつぱりと左右から襟を合せて、顔だけ顯して、目をくるくるとやつ

て呼吸を吐いた。

「歩行けるか知ら、」

「最う歩行けら。歩行くな譯や無えや、叔母さん又あんな風が吹いたら確乎つかまらしてくんねえ。私、川の中へ捲込まれさうだつたから、つかまつたんだ、頼むぜ。」

「あいよ、大丈夫だよ、私が死ねばつたつて、お前に怪我はさせないよ、安心おし。」

「あゝ、酷かつた、酒も何も打ちまけつちやつた、ビールの瓶も形なしだ。」

「お酒を買つて来たの、水溜だ、氣をおつけ。」

「うむ。」

「此のさきの酒屋で、然う、ぢやあ叔母さんも今湯から歸つて来たんだよ、同一路だから彼處で逢ひさうなものだつたねえ。」

「先刻叔母さん湯へ行つた時、私も行つたの、それから魚市へ行つて、鹽鱈を一ツ片買った、其も獺に捕られつちやつた、何にもねえや。」

「飛んだことをおしだねえ、何なの、菊さん、あの兄さんがお酒を飲むの。」

「あゝ、飲むけれど買へねえんだ、今日は鞆様のお祭だから、お神酒に些とばかり買ひに行つた、酒屋の番頭め、出ないよつて言やがつた、それから癪に障つて喧嘩をした、えゝ！ やつつけた



い。それだから歸る時又叔母さんと一所になつたの、びちよ／＼歩行いて來たけれど、暗いから解らなかつたんだぜ、え、叔母さん。」

とぶら下るやうにして、圓い顔を仰向けて言ふのを、じつと見ながら、お關は染々。

「そんなら早くから一所にくれば可かつたもの、何故、そつと歩行いてました。」と情餘つて窘めるが如くに言ふ。

「だつて、可けねえや、私、汚えから、叔母さん厭がるだらうと思つたの、」

「え、！ まあ、お前。」と言切に、お關は少し涙ぐみ、思はず歩を留めたが、

「一寸誰がそんな智慧をつけました、兄さん、」

「否。」

「そんなら可いけれどね、お前、そんな氣を出すものぢやあないよ、困つた時だの、切ないことのある時には、屹度人に相談をするものだよ。ね、兄さんにも然うお言ひ。自分ぢやあ何も知らないけれど、姉さんはもう本當の姉さんのやうに思ふよ。今ね、路でね、私の家を教へるからね、欲しいものがあつたら、然ういつておいで。お待ちよ、兄さんに言つちやあ悪いよ、そして今夜お酒も鹽鱒とかも失くして了つて、叱られやしないか。」

「何叱りやしないや、夜も抱いて寝てくれるもの、だつて何だなあ、あとで御神酒を頂くつて言つてたつて、可哀さうだ、叔母さん、ほんたうに何かくれるんなら、酒え些とばかり買つてやつておくれ、躍らあ。」

「泣かしちや厭。ほんとに兄さん思だよ。」とくびれるばかり小さな手首を確乎と取つたが、

「氷のやうだ。」と内懐へ。

身に染みたか、肩をすぼめ、蛇の目を斜に睨して、

「あの、菊さんは未だ、女房さんは持つまいねえ。」

七

「酒も、然うか、鹽鱒も、むう、然うか、可いや、仕方がねえ。俺もそんなこつたらうと思つた

い、未だまあ、手前が怪我をしなかつたが目ツけものだ。

何うしてお神酒を備へて、お祭所かい、やい菊、俺つひぞ弱い音を吹いたことはねえが、最う耐らねえ、犬の子一疋だつて話對手はなし、年紀も行かねえ、手前を捕へて愚癡を言つたつてはじまらず、俺あ何も言はねえが、餘のこつた、手前びつしよりで寒からうけれど、まあ、一寸見てくんねえ。」

と細工盤を背後に、鐵床を控へながら、敷居の上へ小洋燈の油煙に燻ぼつた、赤黒い灯を置い



て、薄汚れたどんづくに細帯を前下しめ、首筋の綻びたちやん／＼を着て、寒れ果てた壯俊、腕組をして悄然と瞞める背後から、弟の菊次は毬栗頭の、雲の、雫も未だ乾かぬ、霜けて赤らんだ圓顔を出して差覗く。

敷居を三寸餘すまで、充滿の水、壘一壘敷ばかりの土間を、だぶ／＼と浸して居る。

「何うだ菊、まさかと思つたが、過日からの雨で到頭これだ、障子の外は田圃一面宛然湖よ。」と深い溜息。

土間を仕切つた、小窓の雨戸は、疾く嵐に取られて、露出しの破障子二枚、下が羽目になつて、外は空地の一軒家。特に此の裏口は、田圃續で一段地盤が低いために、彼の鬼川を田に引いた用水の、直ぐ間近なのが溢れたのである。

「先刻な、手前を便に出した後で、見ねえ如彼やつて、鞆の神様をかけてよ。」

土間の片隅に鞆を置いて、こゝに爐を切り、下ならしの細工場にした、正面の壁には、一幅の畫像の、古色燦爛たる中に、白衣を纏ひ、黒髪長く、金、銀、紺朱の瓔珞をかけて、波の上に伊み給ふ、御手に一挺の鐵槌を取つた、端麗、微妙の御姿、髻髻として見え給ふ。

其の描いた波と、溢れ浸した水との間に、古びたが一脚の白木の臺。

「お前が歸つたら御神酒を供へよう、それまでに一ツ仕事の間を付けて置かうと、酷工面の彼の

銅板を焙すによ、なけなしの炭火を起して、幾月にもない赫と威勢よく遣つたと思へ！ 根太の朽ちた處から壁を潜つてちよろ／＼と山形に舌を出さあ、引いたり、出たりしてる内に、段々幅が廣くなつて、はじめは拳で引拂つたのが、いや藁だの、繩だの、洗ひざらひ持出したが、役に立たねえ。敷いて居た、莫塵までぶ／＼と浮き上らあ、爐の火は黒い泡を吹くな、見ねえ、」

「然も 鞠祭の晩だ。噫、菊、堪忍しねえ、手前にもお下げを頂かして鹽齋を食はして遣らうと思つたが、其も是も運勢よ、何たる見限られたこつた喃、菊藏ともいつてくれるものあねえ。」と弟を背に掴まらせて、盤石に押さる、やう、力も弛げに垂れて居た、顔を上げて、振向いて、

「今な、蒲團を暖める算段をして遣るから、手前、素裸になつて潜つて先へ寝ねえ、よ、然うづぶ濡ぢやあ體が堪らない、煩ふな、菊、あとで俺が何うともすら……あとで俺は何うともすら、」と思入つた目に涙充滿、餓に迫つても、渴ゑても、恚う氣の弱かつた驗はつひにない、菊藏も今は早や支へ兼ねた風情である。

其ともなく因果を含められた菊次は、聲を揚げて泣くべきに、奴、些ともめけたる體なく、何だ、泣くなんて何だ、お前、大きい兄さんの癖に見つともないや。あるよ、丁とあるよ、構つてくれる人があるんだぜ。今度酒を買つて遣ら、何だ泣くなんて、弱蟲ぢやあないか、姉さん



が見て笑つてゐるぜ。」

「何を。」

「泣いちゃあ姉さんが笑はあな。」

八

菊藏は不審の面色で、

「姉さんッて何だ。」

「餘所の叔母さんだ、整然と今夜姉さんになつたんだよ。長土塀の所で、この、風に吹き飛ばされさうになつたから掴まつて助けて貰ふとね、可愛がつて、半纏の中へ入れて内まで連れて来てくれた。」

門ん處も水がついてら、膝まであるぜ。兄さんは何處に居るッて聞くから、裏の鞆の處だ、細工場に坐つてるッたら、跣足になつて密と溢れてる水ん中を渡つて裏口へ廻つたんだ。言つちやあ不可いッていひつけられたんだけど、泣いて見つともないや、見て居るんだぜ。」

「え、野郎、早く言へ。送つて来て下すつたのか、馬鹿だな、お禮も何にも申しやあしねえ。」と突然菊藏は片膝立てたが、土間は水。

間近だからすいと立つたまゝ、片手を鴨居に掴まると、天井の煤がばツさり、凄じい鼠の音、其ま、身體を橋にして向うさまに右手で障子を一枚、紙がめら〜と破れて、カツたり引開けると雲は歇んで、戸外は薄月。

つら〜とある水の中に、束ね髪の其の姿、ひらりと身を交したが、屹と見て、

「呀！」

「菊さん。」

「お關か。」とぼつたり閉めて、どツかと坐した。

「何うするんだ、何うするんだい。」と弟はおろ〜と聲。

其處を流る、用水の出水に連る響に紛れて、人の氣勢もしなかつた、お關は我を憚る身の、頑是なにもものに打明けられて、退くにも退かれずはら〜とする間に、ひたと菊藏に知られたのである。

障子の外には忍泣、菊藏は色を變へて唇を震はして、暫くはものも言はなかつたが、一聲鋭く、

「お關さん、お前、お前何にも言つちやあ可けねえ、俺も何にも言やしねえ。」

「あいよ。」

「お前、只た一人の目の見えねえ父爺に、苦勞を懸けちやあならねえぞ。」



「……………」  
「歸んな。」

「あい。」といつて、障子の外に傾いた柱に掴まって、顛へたが、衝と身を翻して、水を踏亂して、横ざまに、四五間退き、破れくの羽目の處に、顔を押當ててわつと泣いた。

我を忘れて時も知らず、お關は泣いて泣き盡して、足は水に浸したまゝ、懶げに肩で身を返して、振向けた、頬のあたりも細りと、目じしも殺げた寒れやう。濡れて纏る、後毛は、顛ふ手先で振り退けたが、冷え通つたか、鳩尾をキリリと押し、艶麗に眉を擧めて打仰いだ、雲の絶間に細い月、愛宕の頂に牙え渡つて其影の透いて映る、むら消の煙の如きもの、どんよりと、臙に似た大空の此處彼處に湧くが如く動いて見ゆるは、未だ地に落ちぬ雪催。

お關が纖弱い體壓にも傾きさうな三枝の小家は、黒く一つ月下に沈んで、淡く影も映りさう。嵩増した水の溢れたのが、四面を籠めて、遙に長土塀の唯壁一帯を以て周圍を仕切つた邊から、野ともいはず畠ともいはず、一面に黒み渡り、遮るもののある處、こゝかしこ銀の色を蛇らして、渺として一個小湖の景、風も風ぎ、雨も歇み、夜色沈々として、唯凄じきは二間を措かず、矢を射る用水の響である。

お關は歎歎を白齒で噛み留め、面の色を正して、判然と天の一方にかゝる愛宕の頂を打望み、  
丁と額に手を翳すと、身を縮めて、一心に拜み伏した。

時に小川の浪逆立ち、下流の方より逆に、長さ三丈一條の、白布を蛇らして、忽然として波がしら。

最物凄き月影に、黒頭長身のものこそありけれ、かゝる夜にはまゝある習の、獺にや追はれけむ、二尺ばかりの一尾の鮭。

彼の波がしら縦横に、巴を描き、渦を巻いて、川立騒ぎ、水亂れて、衝と躍つて、お關が間近を、敵を投げて横截つたが、弓形に翻然と跳ね、ぼつと鞆場の障子を脱した、大の魚は、勢餘つて鰭を返すと、鞆の御神の畫像の前なる白木の臺に横はんぬ。

「あれ。」とばかりに思はず知らず、縫り寄つて取着く敷居。

「菊さん、縁起ですよ、嬉しいねえ。」

「やあ。」と突立つて、菊藏は、大手を廣げたが、牲の動かむともせざるを見て、眉を開いて見返した、氣高いばかりの女の顔。

「お關、喜びねえ。」と高胡坐、手を引込めると懷から片膚をすばと脱ぎ、

「菊、しつかりしろい、まんは直つた。」といひざまに、術で鍛へた腕の牙、鐵槌をぐいと取つて、目よりも高く差上げた。



青切符



「お、酷いこと。」

紫の荒い矢絣の羽織を、絞られたやうに身を捻ぢて、よろ／＼と二等の戸を入つた娘がある。「ずつと其方へ、ずつと」と其の後から聲をかけながら、潜り込んだのは、兄か、許嫁か、いゝ中か。それとも供の者か、五ツばかり年紀上の、二十二三と見えたる青年、鼠の中折の鍰廣なのを、躑躅時の快晴に、却つて、一雨浴びたやう、線の柔な三角形に押頂き、黒袖の紋着を、丈長く着て、袴を穿いた、脊が目立つて高い。

青年が、縦に二側にぎツしりの乗客の中に挟まれて立つた時、扉はハタと鎖されて、娘は對の窓へ、トンと肩をあてて、象牙の柄の極めて長い、蝙蝠傘をついて、

「大變な乗客。」と言つた。

然うすると青年が、伸上つて室内を見廻して、娘に向いて、

「未だ／＼可い方。あ、」

顔を深く、胸につけるまで頷いたが、此の仕切を選定したのは、我が過失でないのを諭して、保護の任を空しうせざる由を告げたのらしい。

娘は満足、

「然うね」と軽く、胸を張つて、腰を捻ると、其の窓から横顔を出して車外を覗いた。ふつさりした輪の大きい銀杏がへしを、煽るが如く、衝と手を開いたのは驛長で。

汽車は品川へ向けて、此の時新宿を發したのである。

「出ます。」

「あ、出るわ。」と娘は緋天鵝絨の緒のすがつた、高いぼツくりを二ツばかり床板にコト／＼と鳴したが、立直つて、

「品川に着くのは何時でせうね。」

「直ですなあ。」

「一寸、それでも私時間が惜くつてよ。高輪の叔母さんの許へも寄らなきやならないし、品川にも行かなきやならないし、」

言ひかけて傾いて、眞面目に、眞面目に青年の顔を、

「あの……」

「はあ？」と尻上り。聞き取れなかつたと思つたさうで、前にかゞんで、耳を差出すやうにした。言ふまでもないが、此の室内に饒舌つて居るのは二人ばかりでは無かつた。



「私、困るわ。」

「はあ。」

「麻布の伯父さんの許へ寄らなくっちゃ悪かつたわ。」

「可いでせう、構はんでせう。」

「構はなかつた、あとで怨まれるわ。だつて、たまの日曜なんだもの、さうくは廻り切れなくつてよ。私、困つちまふ。」と殆ど獨言のやうに言つたが、フト黙つて、口を、心ほど開けたまま、目をばつちり。さて、何を見るときもなしに、青年の帽子の鍔の縁から、直角に天井の片隅を見据ゑた。乗合は、殊に此の小さな室に、無慮五十人以上あつたけれども、時に娘の眼中にあるものは無かつたらう。左右の頬の肉動くばかり、大きな前歯と唇を上下に、何か口ずさむ風采、かさねて乗せた蝙蝠傘の柄の上で、小指を一寸々々と弾いたのは譜を算へたもののやう。

此の舉動の一秒時前、娘が中途で言を消したので、青年は一向要領を得ず。

「……ですよ……はあ。」とばかりで、かんだ身を伸してすつくと立つて、屹と腕組をしたが、それでも気がすまぬと見えて、青い切符の端を噛んだ、勿論娘の分と二枚也。ト流るゝやうな、森、畑、畦道の馬だの、雄大な煙突だの、草だの葦だのが、ぱったり、遠目金を外したやうに、赤土の土手にかくれたので、娘は、自然に遠ざかつたやうな顔をして、詩趣ある——此の女に取

つて、——態度を俗了して、また、

「困るわ、何うしませう。」

「……………」

「一寸、何うしませう、皆で来い〜つて言ふのだから、困つちまふことよ。私一寸、何時に着くでせう。」

「ざつと小一時間ですかな。」

「のろいのね。」とたしなめるやう、細い銀鎖の附いた、銀の小形の女時計を出して、パチンと開け、一ツまはして、うつむいて、じつと見た。頬の肉はこれにも動いた。而して後さまに、腕を窓に掛けて、蝦茶の袴を長く踏伸したぼツくりのを、室内に按排したる、彼の吸鼓おとしの器に乗せて、胸をぐつと反したが、恚る姿勢の少女は近頃繪畫界にも流行するので。

一目見ると、青年もいそがはしく、帯の間から時計を出して齊しく視めた、些細なことにも二人の意氣は相投する。

「二時ねえ。」

「え、五分ばかり進んで居ます。」

「眞個に私、時間が惜しくつてならないことよ。」



「同感ですなあ。」

「ねえ、一寸、」

「はあ、」

「お、暑い。」と娘は急に顔を背向けて、頬へさす眞赤なのを手で遮つたが蔽ひ果さず、向直つても猶まともに照すので、項をおさへて、うつむけになると、埃が白く見ゆるまで黒髪に日があたる。

これにも堪へないかして、思はず振あをむくと、光線が又齒へ染み込むばかりだから、顔をふつて、首をふつて、

「お、暑い。堪らないこと。」とした、かに眉を擧めた。

青年はあたふたして、二三度及腰に、切符を銜へて、手を出したけれども、身動もならない充滿の乗客に、手は窓の戸に届きはせぬ。

「お閉めなさい、く。」

「だって堅くツてよ、堅くツてよ。」と身震ひをしながら、兩袖に觸るばかりの、左右の客を見まはしたけれども、席を譲つて立つものはなかつた。娘の容子は、はじめから、聊かも可憐でなかつたから。

あはれ、うまれつきではない。渠は此の頃の試験に、一番で及第した所爲である。



やどり木



「怪しいのは確に今の其の猫萬、……然やう、渾名です、姓は何といひますか存じませんが、萬五とか言ふ鐵道の掃除夫で。けれども從姉を殺したのは、其の者だとは申しませんが、其は眞個の猫でございませうから。」

紳士は卷蓆に火を點じた、寒さに密閉した汽車は夜更けて、三島沼津間。

「最う五年になります。」

「は、然やうでございますか。」と差向ひに夫人一人、其附添と見ゆる女中は、少し下つた椅子に居睡りして、二等の此の一室に乘客は三人のみ。

手練の技師が、函嶺の嶮を出でて、刻下、砥の如き線路を颯と行る、車輪の音は、野中の孤屋、山寺の厨にばかり轟々と遙に響いて、車中は却つて物靜に。

「矢張こんな寒い晩で、一月の半ばのことです。」

御覽の通り、今でも何といふことはありませんが、私が學生の頃で、正月のお小遣が少々出来

ましたもんですから、函嶺から熱海、三島越をして、三島へ出て、それから静岡へ歸りまして、又東京へ出がけに、久能へまはつて清水港から江尻へ出て、緩り終汽車に乗つたのです。」

紳士は室内を見まはしたが、

「此の邊で日が暮れた筈でした。」

新橋へ着く、十時四十五分がいつでもおくれて、彼は十二時近うなる上りですから、それから貴女。大學の近所まで參つて、さきが下宿屋では一寸考へものなんですけれども、はじめから、横濱の其の從姉の處へ寄りますつもり、尤も宅から言づけなどもありませんね。」

夫人、

「貴下も、其の方も、」

「然うです。静岡です。其處で從姉といふのが、名はお話し申しませんが、野毛の二丁目に女一人住居といふので、お恥かしいわけなただけでも、」

微笑みながら、

「同一静岡の或豪商に圍はれて居るんです、其の時分。尤も然ういふ境遇なんですから、始終懇意にして、居たのではないので、横濱に居るといふことも、實は歸省して始めて聞いた位。」

しばらく上方の方へ往つて居なすつた、あ、姉さんが、然う、それは、都合、縦令職人で



も、日傭取でも、女房といはれるに越したことはありません、しかし、兎も角も身が定まつてお芽出たい、丁ど東京へ歸り路、久しぶりで逢つて行きませう。兩親が是非、其の女の母親、叔母さんです、其も斷つてといふし、自分も懐しい人でした。

未だ平沼といふ停車場は出来ない時分、横濱へ着くと、十時些と廻つて居ます。

豫て、餘り遠くないやうに聞いて居たもんですから、傳も命じず、杉田へ行つた時に、あれから本牧のはなを船に乗らうといふので一度、それから見送る人があつて西京丸へ一度、海岸の方は其でも薄々知つて居ましたけれども、山の手は皆しき不案内。

路を聞きながら、あの川べりを傳つて大概此處等といふ橋を一ツ、停車場の方から渡りました。暗い晩で、彼處等は片側立ち、仕舞屋が多いと見えまして、未だ十一時には間があるのに、ぴつたり戸を閉めた門ばかり。中に一軒、山城屋と筆太に書いた看板が、それも最う消えさうになつて、半分だけおもての雨戸をあけた、車の帳場がありましたから其處で番地を聞くと、些と數が多過ぎる、野毛の二丁目は新開で、番地が皆若いのですが、お宅は何といふつて聞くのです。で姓だけ言ひました。」

「一寸心當はありませんが、何をなすつて在らつしやる。まさか開ツ放して、實際をいふわけにも参りませず、商賣は知らないが、女世帯の一人住居だといひますとね。」

お少いのかねツて、些と調子が上ずつて居ましたつけ、何の氣も付かないで、少いのだよと、申しますと、知らねえ、と打ツ棄つたやうな返事。心付いて極が悪うございました。」

「車夫なぞと申しますものは、人が悪うございますよ。」  
紳士は頷き、

「やツかまれようといふ柄でもありませんのに、氣を廻したがるものと見えます。」

家は分らず、さあ然うなると何だか氣が咎めて、かけ構ひなしに何家でも門口から尋ねるわけにも参りません。

着換の一枚も、親元から仕入れて来て、些とばかり荷物もございますなり、旅革靴の小さいのを持つてる手も、凍えるやうに寒さは寒し、次第に夜も更けさうな様子。

うろく路地へ入りましてね、何でも新開だといふから、家並も新しからうと思つて、見て歩行く内が、皆寂寞して居るのだから、自分ながら、何か怪しいものが寢息を伺つてでも歩行いてるやうで、氣咎めはするし、始末が悪い、すると又一軒ほんの棟割長屋のやうでしたが、戸の合



せ目から、灯影がさした處がありましたから、慍う、立つて様子を見ると、五六人も人の寄つて居るらしい氣勢です。

御免なさい、何うして先方は、何かしら氣が入つて、一聲呼んだ位ぢや耳に留めさうもないやうに思はれましたので、御免なさい、失禮ですが、失禮ですがと、折入つて言をかけました。

急に、ばた／＼と鼎が沸くやうに動搖を造ると忘れたやうに又ひッそり、(はい)ツて婦人の聲で、妙に改まつてこたへました。

あとで考へますと、氣の毒です。」

「何うしたのでございませう。」

「勝負事をして居たものと見えます、聞くと、彼處等は、凡てそんな風な處ですつて、しかし氣が付いて冷汗を流したのですが、従姉の家は知れました。

二日前まで、従姉は其家に住んで居たんださうで、像て望みだつた二階家の恰好なのが見つかつて、新世帯なり、わけもなく引越したといふことです。

(番地もよ頃は、承りませんでした。このさきの荒物屋の横町を入ると、二軒立、おなじ二階家で、外は平家ばかり、直きにわかるといふお話し、否、知れにくい處ですから、嘸お困り)と言ひ／＼、出て来て、兩戸をあけて深切にいつてくれたのは、粹な女房だつたので。

禮をいつて其路地を出ますと、荒物屋が分りました、通の角に瓦斯燈が一本、暗い横町。

入つてしばらくすると、道の幅が廣くなつたはい、が、突當りのやうで、見付からないものですから、はて、知れないと難儀此の上もなしたと、少々慌てまして、ぐる／＼あるきながら見廻しますと、又た板戸から灯がさして、其處ぢや嬰兒の泣く聲がいたしました。

おなじやうなことを申して、くどいやうですが順でございませうから。

嘸迷惑だらうと存じながら、其處でまた従姉の姓をいつて聞きますと、隣の格子戸がそれだといひます。

喜んで、退つて見上げると、なるほど二階家、暗いからまるで平家のやうに見えたので。

いかにも二軒立。

戸をがた／＼と遣ると閉つて居るので、然も其の路地の突當の廣くなつた丸い地所の中へ、十文字を入れた角家ですから、ついて勝手の方があいてやしないか知らと、まはつて見たのです。」

三

木りどや

「矢張、しまつて居るので、寢たのか、然うすると寢入端だから一寸は起きまい、留守だと此の寒いのにと思ひまして辟易して、引返して參つて貴女。」



大戸を密と、がた／＼遣つて見るといふ、先刻から、凡そ氣の利かな過ぎる役廻りで、定めしお聞きなさるにも張合がございますまい、お待ちなさいよ、と灰を落して、二ツばかり、葉巻を振つたのを持直した。

「しかし追つて先づ長火鉢で、差向ひになるといふ寸法なんですから。

其處でまた格子戸のあたりに寄つて、(隣家は留守なんでございませうか、)

女房らしい物越で、

(ツイ今しがたまで、話聲かして居りましたよ、)

(度々お邪魔を)と早々軒づたひに従姉の戸口を、

(姉さん、姉さん)ツて呼んで見たのです。

(長さん、長さんかい、)

(然うです、)

(今あけますよ)と直ぐに出て、カッチリ錠をはつすと寢衣の態。

(眞暗ぢやありませんか、)

(あかりを引込ましてあるんですよ)ツていそ／＼して、土間から取着的の三疊の間に吊した、洋燈の心を、扱帯を巻いた後姿で、ぼつと繰上げますとね、疊に引いた裾の處で、長煙管、茶盆が

顯れる、長火鉢がてら／＼して、傍に茶棚が見えようといふ體裁で。

(何うも寒いッたら、／＼)

私は飛上るやうにして、障子の隅へ、突然革鞆を抛り出して胸の鎖を引切るばかり急いで外套を脱ぐ始末。

(今暖にしてあげるわ)ツて入かはつて、貴女、あとの障子を閉めて、はらくと、向う正面、茶棚のわきへ膝を丸くついて、すツしり重量のある鐵瓶をすらして、其の手で襟を掻合せて、帯をぐるりとまはしながら、片手は炭を繼ぐといふ働ぶり。

(よくねえ、ほんたうによく來たのねえ、今しがたがあつといったあの汽車でお着きなの、久しぶりッちやあないよ)とこと／＼しく久しぶりの顔を見ないのが、一層馴染がひで隔がないぢやありませんか。

(恐しく早寝だね、)

(もうそちこち十時半でせう、いゝえ、それにしても未だ寢るのぢやないの、一人ね、寄席へ行つてるのがあつて、未だそれも歸つて來ないんですから、唯床へ入つて居たばかり、)

(これかい)と親指を見せました。

棚から今爛徳利を取らうとして居たのが、此の時始めて顔を見て、わけもなく、



(う、む、なあに、泊りに来て貰つてる男の人)

どうこへトンと入る、猪口を出したと思ふと、小皿に布巾をかけながら、

(さあ、樂に在らつしやい、何うしたの、何か見えませんか)

私は紙入がないのであわてて居たので。

(長さん、大丈夫よ、江戸なれたものが、横濱で落したり、掬られたりして、可いものですか、

屹と其處等にありますよ、落着いておいでなさい、何うしてもなけりや、あなたのお小遣ぐらゐる立てかへて置くわ)と澄して海苔をあぶります。

(ぢや、其の氣さ)

(さあ息つきに一ツ、お茶のかはり、まだぬるいでせう、其の内お湯が沸るとはうじたのを入れておまんまを上げます。)

(大船で辨當を食つたから、腹はいゝが、それから此方震へが留まらない、寒いね)

(おかさねなさい、まあ、おまんまは。それぢや即席御料理早吸物といふのをお目にかけてませう、お香のものは出しませんよ。)

(澤山)

(一寸、まぶが来たやうな晩だねえ)と従姉は自分も一口、と飲む眞似、口輕うはないが、話

上手な紳士であつた。

四

「(飛んだ晩だね)と年上だつて憎いから謂つて遣つたのです。さうすると莞爾と笑ひましたつ

け。  
(長さん、飛んだ晩といや、此間盜賊に入られてね)

飛んだ話ぢやありませんか。

(へえ?)

(何も目を圓くしなくツても可い、私は無事さ)

(別に盗られたものはないのか)

(些とやられたの)

(餘り無事なことないぢやないか。何うしたんです)ツてうつかり猪口を下に置きました。

(ですがね、私は怪我も何にもしなくツて宜かつたんですよ、丁度湯に行つて居たの)

(留守なしで)

(はあ、それから今寄席へ行つて居るてつたね、其の萬といふ男に泊つて貰ふことにしたん



だわ。——」

語りかけつゝ、紳士は後なる方、次の室と隔の扉の方を、稍伸上るが如くにして振向いたが、靜に夫人に向直つて、

「貴女、」

といつて髪かみの黒くろい、若わかやかな額ひたひを差さ寄せた。

「其そのの萬まんといふのが一件いっけんです。」

「それでは其そのの者ものがあつた、掃除人そうじにんでございますか。」

「全く。……それから、従姉いとこが一葛籠ひとつら、帯おびを三本さんぼん、衣きもの、羽織はおり五枚まい、紋着もんつきも交まじつて居ゐたさうで、外ほかに抛なり出して置おいた不ふ斷着だんぎをそつくり、櫛くしだの笄かぼうだのを入いれた桐きりの手箱てぼこを一ひとつ、幸さいひ、鏡臺きやうだいの上うへに抜ぬいて出でた、珊瑚さんごの佳い方は取とられなかつたつて、さしてゐるのを抜ぬいて見みせたりなんかして、雲丹うんたんと海苔のりで先觸さきざれのあつた早吸物はやすひものなどが出来でて、あとの氣味きみの惡わるかつたことや、巡査じゆんさの深しん切せつなこと、肩かたを出だしたと、それから、土地馴とちなれないで見みくびられるが口惜くちやくしいから、桂庵けいあんに口くちをかけないこと、豫かねて約束やくそくしてある女中ぢやうちゆうが郷里きやうりの靜岡しやうがわから舊ふるの正月しやうがつが濟すむと出でて來こること。

旦那だんなは濱はまに取引とりひきがあつて便宜上べんぎじやう、自分じぶんを爰こゝへ引越ひっこさした様子やうす、其時そのときは矢張やはり商業しやうぎやで京都きやうとの方ほうへ行いつてることだの、其そのが年寄としよりで肥よつた人ひとで、いろ／＼ものも思おもつたけれど、あきらめて堅かたくして居ゐ

るの、年寄としよりは愚癡ぐぢだの、別わかれる時泣ないたの。茶ちやが好きだの、扱は萬まんといふのは、もと靜岡しやうがわの湯屋ゆやに三助奉公さんすけほうこうをして居ゐたもので、隣家りんかのうどん屋うどんやの雇女こひめを何なんうとかで、其そので何なんとかして首くびを縊くめようとしたのを、自分じぶんの主人しゆじんが助たすけて、鐵道てつどうの掃除夫そうじふに世話せわをして、横濱よこはまに居ゐるから、淋しみしければ泊とまらして置おけといはれたこと、乃至乃至其そのの男おとこが大だいの色男いろをとこがりで、勿論もちろん些ちと甘あまくつて、おばこが夕暮ゆふぐれにながめ見渡みわたすといふ踊おどで、汚きたいな大おほきな足をひよいとあげて、身振みぶりするの、しかし小力こぢからはあるの。何なんのつて、やがて勉強べんきやうをおしなさいよ、あなたも女おんななんぞにと些ちとまはつた處ところへ寄席よせから。

(萬まんさんか、)

(はあい)と生なぬるい返事へんじです。

従姉いとこは、さん、と様さまづけにして呼よんで居ゐましたけれども、然さういふ關係くわんけいなのですから、遠慮えんりよはしないと見みえて、萬まんが、私わたしの傍そばへ坐すわつて、顔かほをじろ／＼見みながら、兩提りやうていの煙草入たばこいれを捻ひねくるのを、

(もう、お寝ねなさいよ)とうちやるやうにいひますので。

(一ひとつ何なにうです)と私わたしは愛想振あいさぶにさしましたけれども、受取うけとりもしないで、黙だまつて、辭儀じぎをして、

(私わたしや、眠ねむうないで)と舌したッ足たらずにものをいひます。

いやな奴やつだとは思おもひましたが、又また氣きの毒どくな、不ふ便べんなやうな氣きがして、其その晩ばんは些ちとも恐おそしいの凄さまいといふ、心持こころもちはしなかつたんですが、イヤ、」



驛夫が、

「原——原——」

此處で三分。

五

「十日経つて、二度目に今度は東京から参つた夜……萬の顔といふものは、實に私は男子だけでも身ぶるひをして慄氣としたのです。」

唯今貴女が御覽なすつた通りです。」

夫人ははづして膝に置いたフラスチンの肩掛に包んだ手を、帯のあたりに出して、柔かに指を組み反して、

「私はまた國府津で乗合の方が、ばら／＼、皆降りてお了ひなすつて、急にさみしくなりますのに、これももう他愛なく眠がりますし、」

供の女中は、うつゝのありさま也。」

「其のうち又貴下が、うと／＼遊ばすもんですから、急に電燈も暗くなりましたやうに思はれまして、陰氣で、寂しくつて仕やうがなかつたのでございませう、然うします内、確か御殿場を越し

てからでございしました。」

彼の掃除人夫が、むかうの、

齊しく其方に眼を注いで、

「なるほど、」

「ね、貴方、あの扉をあけて出ましたが、眞直に立つまでもなしに、直ぐ這ふばかりに俯向いて、丁寧にお辨當の殻、蜜柑の皮、早附木の燃さし、灰落しの上まで綺麗に掃いて参りまして、帯をね、貴下の御足の處へ當てましたッけ。」

フトお顔を見ると、ずつと立つて、

一寸指し、

「あすこまで後飛びに退つて、外套の頭巾の中から、じつと見て居ましたが、つか／＼と此方の扉をあけて、又振返つたと思ふと出て行きました。」

逢つては悪いお方なんだらうと、存じましたばかり、貴下には何でもない人らしいございまして、たので、まあ、其時は、然まで氣にも留めなかつたのでございませう。はあ、先刻、未だお言葉も交しませんでした貴下を、見ず知らずの私がお起し申しましたまでは、

「何うも、慥う汽車の中で、ふら／＼居眠なんかしたことはありませんのに、何うしたことせ



う、私は故郷の静岡から新橋、其の距離より長い汽車に乗つたことはございませんから、大して退屈なことも覺えないで、眞個です、眠るなんといふことはなかつたのに、魔がさしたのかも知れません。ぢやあ彼奴が、私の肩を掴まうといたしたのは、函嶺の中でございますね。」

「否、その前にも、一度然うやつて貴下に目をつけてからと申しますものは、此の室を燕が通るやうに、何なんですよ、電燈の下を切つちやあ、行き抜けましたが、

然うです、丁度函嶺で、アノ恐しい轟々といふ中に、靴の音を沈めてじり／＼と寄つて參つて、貴下の背後へ一杯に立ちはだかりましたから、私は其まで、女中と並んで、彼處に居て、其の掃除夫には氣も付かないやうなふりをして居ましたのですが、變だと思ひましたから、故と顔を見てやりました。

然うすると、氣がさしたやうすで、私の方を見ましたつけ、睨みつけました、何うも其のいなことツたら。

其までは、スリでもあるかと疑ひましたのが、餘りいやな人相なんで、大變に取つて、私は、貴下の敵で、これは！お殺されなさるんぢやないかと思ひましたもの。」

「何のおかゝりあひのないお方が見て其だもの、まともにやられた從姉は無理もありません。」と人知れず歎息した。

「それで、まあ、何うなすつたのでございます。」

「話があとさきになりましたが。」

却説、其の二度目に從姉の許に參りましたのは、先刻も申しました通り、十日過ぎて後で。

前の時、矢張、何うもお恥しいにも何にも全く何處へか紙入を失くなして居たのですから、差當り困ります。

申戲を事實にして、小遣を借りて歸りました、それを返しかた／＼、學校が濟んで、彼是して出かけました時間ですから、日の短い時分のこと、横濱へ着きますと又夜分です。」

## 六

「從姉は長火鉢の向うに貸本を讀んで居りましたつけ、火鉢は場所をかへて、次の六疊に置いてあつたのです。」

其の六疊は、前夜私どもが床を三ツならべて寝た處でございました。」

紳士は思ひ出したやうに、

「然う／＼、未だ申しませんでした、前晩は未だ他に小兒が二人來て泊つて居たのです、あとで聞くと、矢張從姉の世話をした主人が遠縁で、おなじ鐵道に運送係を勤めて居るもの小兒だ



さうで、五ツになるのと九ツになるのと。

小な方は女の兒で、これは盗人に入られて、萬を頼まないさき、横濱に世帯を持つた當初から、夜は淋しいツて從姉が抱いて寝たんですな。

すると私が飛込んだ晩は、小兒たちの内にも不意の泊客があつたとかいふことで、九ツになる坊やがあぶれて泊りに來たのだといふことでした。

(萬さん、小兒を踏んぢや厭よ)と寄席がへりが、やうく寝に行く時に、從姉が氣をつけたので、私もはじめに氣がついた、スーとも言はないで、よく靜に寝て居たものです。襖一重で分りません位、其癖ね、兄坊の方は、をばさん盗賊が入ると突くよかなんかで、小刀を捻りながら寝たんですとさ。

(そりや大變だ、新世帯に三組泊客ぢや、夜具にありつけさうもない、姉さん許で風をひいや、先祖のお位牌に濟まない)と一杯機嫌で勇氣がついたから、迷惑を察して、遅いが旅籠屋へでも行く氣だつたんです。

從姉が、

(私は冷性だから行火を二ツ抱く、夜のもは其のつもりで一番さきに用意がしてあるから、氣遣なざるにや及ばない、私は小兒二人と一所に寝るから、)

(其の方へ私が入らう)

(お前さんを子持にするのは未だ惜しい、い、から任かしてお置きなさい。)ツて、並べて床を取つてくれました。

小兒の寢所と此方が二ツ、裾合せにして、萬が寢たのです。

内には二階が一室、も一ツ臺所の傍に三疊、盜賊は其處から入つたといひます、それだけありましたが、二階は建具を入れたが骨ばかりで、未だ障子が貼つてなかつたんで、萬を次の室へ、下げて寝かしては、襖を隔てる、縦令從姉弟同士でも、若いものが二人、といふ遠慮があつたらしい、殊に掃除夫は、大分主人に恩を被て居る男だもんですから。

(ぢやあすぐお寢みなさい)と私はさきへころげ込みました。手足をのばした工合はよし、くたびれては居るし、酔つちや居りましたし、枕に就くと、もううとく。

柔な裾で、枕頭を二度ばかり、するくと硝子杯、煙草盆などをくれましたやうな氣がして、あとは分らなくなりました。

然うすると何か身體に觸つたから、フト目が覺めますと、從姉が一所に寝て居たんです。

やましき處なかりけむ、紳士は事もなげに語つたのである。  
「裾の方で、」



(あゝ、寝られぬ、寝られぬ、)と萬が獨言をいふのでさ。  
(もう、起きたら可いでせう、)と從姉が澄していつた時、私の方へ肩を見せて、身をねぢりました。

(六時打つたよ、)

(どりや、起きようかねや、)

と萬が大欠伸をして、しばらくもぢくして居ました、衣ものを引ツかけたと見えて、のそりと襖をあけて、それから三疊に出て、釜の下を焚きつける役だつたんです。

それが早いか、從姉はするりと、起上りさまに、抜け出したあとの夜具の襟を、私の胸におさへつけましたが、

七

「一ツ飛びにトンと萬の寝た食の殻へ、音をさしてすぶりと入つて、

(おゝ、暖い、萬さん、お前さん火の性たと見えてほかくするねえ、あゝ、可い心持だ、)とあだな聲で。

私は胸がどきくしたから、夜具を引被つてしまひました。ぱちく聞えたのは、萬がやがて、

釜の下を焚くんです。

雀の聲がすると、小兒が目を覺し、訝えた聲で饒舌り出したのを、聞きく、又ぐつすり一寢入。

目を覺すと、私の寢床一ツ残して、あとは綺麗に片づいて居ました。

帯を取つてくれる、書生羽織を着せてくれる、紺足袋も裏を揃へて、行火に暖めてある、顔を洗ひに行くと、シヤボン、齒磨、櫛、鏡も揃つて、井には豆腐、眞白な葱まで買つてある。

萬が、親類のお客様に御馳走をしておあげなさいと、それはく小まめに立働いて、雑巾も二度かけて、朝疾く勤めに行つたといひます。

小兒も最う歸つて居ました。

從姉は別に變つた様子もなし、私も何とも思ひませんでした、妙に胸の底に得もいはれないやうな心持がしたのです。十一時の汽車で、本郷の下宿に歸りました、それから十日経つて其の二度目に参りました時まで、此の思は絶えなかつたので。

すると貸本を讀んで居た、一心に見入つて、明い洋燈も霞んだやうに、うつとりして顔を上げましたが、

(おゝ、長さん、)とぼつたり疊に伏せたのです、元氣よく聲をかけて、快くいそく迎へてくれ



ましたけれども、何となく寝れて、あひかはらず申戯をいふ内に、取つてつけたやうに、一寸々々眞面目になつて、何か考へ事をするらしい。

従姉は、小取まはしに、座を立たないで、二ツ三ツ一寸食へられるものをならべて、酒を出すのが不斷から大の自慢で。蓋物を出しながら、又考へて居りましたが、

(あゝ、萬さん)

(へい)と例の舌ツたるく、臺所のわきの三疊の襖を中からあけて、ぼつとして間のぬけた、然も目も眉も口つきも、せゝツこましい顔を出したのは掃除夫です。

(あのね、長さんは今夜泊るんですからね。)

(はい)

(そしてね、お身體の都合で、しばらく同居をしますから)

私に目配せをして、

(お前さん、最う可いんですよ)

睨めるやうにして又私の顔を見たんです、口を出すなといふのでせう。

(はあ、然うかね、そして私これから官舎の溜へ去つて寝るかね。)

(何うともさ)

(はあ)といつたツ切、びじやりと襖を閉めたんです。

内設で、極低聲でひそ〜いふことがあるだらうと、私は耳を差寄せましたけれども、従姉は膝にブリツキの海苔の罐をついたまゝ、うつむいて、呼吸を殺すやうに。

しばらくしてはツと溜息、いやしりましたこと夥しい。

トがさ〜して居た襖を又開けますと新しい手拭を腰にはさんで、手織のどんつく、こて〜と綿の厚いのを、はや座敷から尻端折。

棒縞の汚れたツボン下を太く穿いて、例の汚い、大な足で、のさり〜と私のうしろを通る、片手に風呂敷つつみ、片手に何と行火をむき出しに引提げてませう。

(おや〜大變なお荷物)

(もう、むかうぢや火もねえだ)といひましたが、土間見たやうな處へ寝るんですつてね。

(荷物はあしたでも取りにおいでな)

(へゝゝゝへゝ)と不意に笑ひましたぜ。

「而して其の時、あの凄い目で、二人をじろりと見ましたが、



(今度くりや、そんな用ぢやござりません。)ツて。

「從姊を蒼くなりました、そんな氣の弱い人ぢやないのでしたが、しかし、」

紳士はあらたまつて、

「貴女も唯今御覽なすつた時、あいつの睨むのを見て、私が殺されでもする、大切な事のやうにお思ひなすつたとおツしやいました。」

誰が見ても何ともいはれない獯惡な目つきなんでございますね。

で、ひどい泥濘だつたもんですから、其のなりでのさ／＼出て行つたあとで、しばらくして從

姊が、

(長さん、濟まないが、今夜は歸つて下さい、御出世前の身體だから何につけても御大切だ、)ツていふのです。

何事かはじまるのだらうと思ひますと、

(屹と萬が殺しに来るよ、)といひました。

而して染々、

(前世の因縁といふのでせう、私は境涯で、心にもない罪も造つて居るし、好きなこと、勝手なこと、随分我ま、をして、長さんとも一所に寝たから、もう思ひ殘すことはない、)といつて顔を

見て莞爾する。

一度は私も吃驚したけれど、これを聞いて、馬鹿々々しくなつて安心をしたのです。

けれども、申戲は申戲、誰も他に人がないから、其には寄らず終汽車で引返しました、別に心には留めなかつたんですが、何となく別れぎはが悪かつたも、道理、從姊はもう亡くなりました。

話の様子でお分りになりましたでせう、勿論殺されて。

しかし、咽喉だの背だの、七八ヶ所噛み散らかしてあつた齒のあとが、當時のしらべでは、何うも獸の牙だといふことで、未だに警察の疑問になつて居ります。

私は公儀のことについて、何とも口を出しません、唯心靜に亡き人を弔ふばかりであります

が、こゝで萬に逢うとは思ひませんでした。

萬は何うしたか七年越うはさも聞かないのでしたが、ぢやあ、矢張掃除夫をして居るのでせう。決して、萬の仕業だとは思ひません、從姊を殺したのはあいつではありますまいが、しかし、貴女が氣をつけて下さいませんか、私もフト噛まれたかも知れないのです。

何と、あの顔は一種の猫に肖ては居ませんでしたか、左の目のふちから頬へかけた、赤痣は、斑のやうに見えませんでしたか。

ついては、同一形の斑猫が一疋此の所に絡んで居ます、腕白盛に、亡くなつた從姊がお轉婆で、



いやもう近所を荒して歩いた名高いのを、二人で殺して、見届けて、裏の大藪へ棄てたことがありました。

くだらないことですから、貴女には、一切其事に就いては申しませぬ。

お棄てなさらないで、お聞きだといふなら、なほ悪い、夜更だし、それにあやかしがついて居ますから、お氣味が悪うございませう。

二十五の厄年の男とは、同行もしないものと申します。

殊に猫萬が此の汽車に居て、既に私の身のまはりへ出沒します上は、なほ更のこと、貴女にまた御迷惑でもかゝつてはなりませんから、室を別にいたしませう、これで、

夫人は濱松に歸つてから、然る寂しい、物凄いや汽車に乗つたことをつひぞ覚えぬ、で、寧ろ同車して事件に携はるより、跡に取残されて女ばかりになる方がなほ堪へられないと、言つて切に引留めたが、静岡で別れて何の事もなかつた。しかし心を寒うしたのは、興津の停車場で、他の愛のなかつた女中が、恐しく魔された時であつたと、親しい友に物語つて、

「其の掃除夫は、私が見ても猫そっくり。」

### お留守さま



今戸邊で出来るのだといつて、友達がくれた姉さんの人形が一個、小形の、細長い桐の箱に入つて居るのを、はじめは墨かと思つた。學生、生駒讚平。

小石川柳町の、玄關とも二間といふ長屋の侘住居、南向の庭を前に、縁側に向けて据ゑた昔の寺小屋もので、引出が三個づゝ、兩方についた机の上に、其の人形を。

唯頼杖をついて、傍なる大湯呑に煎茶を入れたのに片手をかけながらつくづく……見るから媚めかしい、衣服は薄お納戸の彩色、帯の處を墨で染めて、しめたといふより、巻きつけたやうな引かけ結び。弱腰は、消えて見えないほど、すらりと裳に搦んで、片足を真直に、衣服の上から透いて見えるやうに、線を柔かに描いて、左の脚を折曲げて、其の伸した右の太ら脛の處で組違へた、稍々じだらくな後姿。はらばひの人形で、根上りの品の可い圓鬚、生際のぼかし手際よく、鼻筋が通つて黒目勝、優しい眉、これに兩手を頼杖した、其の手の腕のあたりから、下ぶくれの、うつとりした顔へかけて、胡粉の色の白々とある美しさ。但し唇を紅で描かず、墨でしたためか、

何となく曇を帯びて、愁を含み、歌麿の艶な處へ、北齋の凄味を帯びた、凡そ二寸ばかりの、所謂のあるらしい、何となく深い秘密な意味のありさうなのが、土で拵へたものだけに、水の垂るといふ艶はないが、恰も柳の蔭で白魚を見るが如き婦人である。

此の手の前に、同一、其の箱の中に一冊、櫻の花片位な、小さな本が備へてあるが、なり形、顔の氣組から推して試れば、經典、詩歌の書ではあるまい。

出来は新しいのであるけれども、見る處、髪結びやう、衣のつくり、當時の妻妾の風俗ではない、古くからある形を、あらためて作つたものらしいのである。

讚平は右瞻左瞻ながら、不圖桐の箱の蓋の裏に、色紙形の紅唐紙をはつて、  
おるすさん

と記してあるのに心付いた。然矣、何者か、良人の留守を意匠として直ちに婦人の名としたものやうに思はれた。

讚平は、思はず湯呑を推遣つた手で、膝を打つて、打微笑み、  
「乳母や、をかしいぢや無いか、一寸御覽。」

其の姉さんを掌にのせて、背後を振向いて言ふ。  
爰に針箱を据ゑて縫物——寧ろ縫物をして居るのは、此の孤兒のために一身を捧げて十七の年



紀から守育て、今、一室に水入らず、乳母のお松といふのである。

「何うだ、よく出来て居るぢやあないか。」

乳母は針の手を留めて、少し顔を出すやうにして、

「まあ、上手に拵へましたねえ讚様、お薬師様の縁日ですか。」

「可哀相に、お前見たつて違ふよ。縁日ものにこんなのがあつて堪りますか、御覽、能く。」

「成るほど、綺麗だよ。私は又昨夜買つておいでなすつたかと思つて。」

「昨夜買つて来たものを今更感心することがあるもんか。」

「でも坊ちやんだと言はれるのが口惜くつて隠しておいでなすつたのかと思ひましたの。」

二

「何ういたして、坊ちやんのおもぢやにしては、こりや色氣があり過ぎら。杉山が朝ツから飛込んで、何だか仰々しく、歸つてから出して見る、感心するッて置いて行つたんだが、お前にや然う見えないか、何處かこりや、あの、深川の姉さんに肖てるやうだ。」

「御新造さん。」

「むい。」

「拜見。」といつて請取つて、眩いばかり障子越に秋の日の射し入るのを、片手、人形の上に翳して掌を少し影にしてためつすがめつ。

「本當ですなえ。」

讚平は頷いて、

「何うだ、そつくりだらう。」

「肖て居りますこと、まあ。」と上へ上げて又見直す。

「まだ驚くことがあるんだ、此の人形の名をお留守さんにつけてある。」

「へい、おるす……何でございますか、名なんでございますか。」

「あ、名さ。」

「妙なお名前でございますね。」

「いゝえ。」とおさへて、讚平はまた微笑みながら、

「洒落なんだよ、そら其の旦那か、御亭主か、おかみさんが留守をして居る處さ。」

「なるほど解りました。」と乳母合點をする。

「今つからお前然う早く感心をしまつちやあ不可い、まだこれからなんです。」

ねえ深川のにそつくりだらう、處が彼の人のことを皆がおるすさんと慥う申します。



「御新造さんでございますか。」

「うむお婦美さんのこつた、お貸し。」といつて、讚平は乳母の手から人形を請取つて舊の机の上に置き、座を斜に彼方此方お松の顔と、お留守の顔。

「即ち、取も直さずだ、取も直さん此の人のことさ。」

「何故然ういふことを申しませう。」

「其がね、死んで居ないものを、彼の人は御亭主が留守のつもりで居る。」

「御亭主だなんてをかしようございます、あなたの從兄さまぢやありませんか。」

「僕の從兄だつて多之助はお前、お婦美にやあ亭主だらう。」

お婦美は感心にや感心だがね、多之助が死んで居ないなんと謂はうものなら、顔色をかへて腹を立つよ。

僕が行つたからつて、突然顔を見ると、

(姉さん今日は、從兄さんは)とお極りなんだ。然うするとね、お婦美が、

(あの今留守なの)と何時でもいふことになつてるがね、極が悪いが、氣の毒さうに莞爾するよ、可哀相だな、乳母。」

「はい。」

「お、不可い、お前年紀を取つたか、此頃は、すぐ泣くね、厭だぜ、僕は。」

「其でも御新造様の話が出ますと、御親類中、何誰もほろりとなさらないものはございませぬ。

否、お婦美様のことがわかりぢやあないのでございます、一所に若旦那様のことも思出しますからでございます、あの、其でお留守さんといひますのでございますかい。」

「女中にも然うだツさ、だから皆で、」

「誰がそんなことを申します。」

「先づ僕、」と讚平は低聲なり。

「お人の悪い！ あなたは！」

三

「蔭口といつちやあ濟まないけれども、何それ位なことは本人も心得てます、だつて、お前泣いてばかり居られやしないや。」

まさ留守お  
「そんなら可うございますけれども、また其れにしました處で、面と向つて怪我にもお留守さんなんておつしやつては不可ませんよ、本當にお可哀相だと思つてお上げなさいまし、此の間も蠟鼓町の旦那様に、あなたのことを大層お譽めなさいましたつて、而して鉦の光る學校の服を召



して、胡坐して、姉さんツて言つて下さる、最う何も思ひませんことさ。御新造さんも未だ三十には間がおあんなさるし、貴方もお若うございませうから本當ならば一寸々別荘の方へ被行つしやいますのは宜くございませんと申しますのですが、あゝやつて二十の年紀から佛様に操を立通して在らつしやる、御新造様のお心を察しますれば、そんなに懐しがつておいでなさいませう、貴方も何も世間體を分隔をつけませうでもございませぬ。まあ却つて御不便に思つてお上げなさいませう、お勧め申します位でございませうが、しかし讚様」と少し更まつていふ。

「何だ。」

「當家の親御様が世に被入つしやいますれば、屹とお留めなさいませうよ。其は實のお兄さままでございませうと却つて思過しをなすつて、不安心に思召しませう。私には御主人でございませう、家來が見ましてお主を確だと思つたのに間違はございませぬ、其は最うお婦美さまとお床を並べてお寝みなさいませう、乳母やは安心をして居ります、自慢のお兒様なでございませうもの、私は不色でも本當に鼻が高いのでございませうよ。」

「だから精出して勉強をなさいだらう、大分評判が可い。」

「ほゝゝ、あんなことを。もう其に越したことはないの。」

「處が實は一寸出懸けたいのです。」

「おや、どちらへか。」

「お言葉に甘えるやうで濟まないけれども。」

「深川へ行らつしやるの。」

「お留守め、此の間も僕にぜんまい仕かけの臍脇の玩弄品をやらうかつていつた。おまけにお前、靴を肩からぶら下げの、半洋袴にして長い靴足袋を穿くと似合ふのと、人を小兒にして居ら、丁ど可いから此の人形を持つて行つて一番驚かしてくれようと思ふ。」

「其は行らつしやいますのは可うございませうけれども、あの餘りおいでなさいませぬ方が可うございませう。」

「何だか譯が解らないね。」

「否、別荘の方へはいろんな藝人などが出入をしますさうですから、また。」

「なあに、お婦美がもう飽いたと見えて俳優や義太夫語なんざ此頃ぢやあまるで來ない、内中ひツそりして奥の方で長唄のやうな謡を遣つてます」といひながら早や人形を懷中へ、つい手の届く床の間の隅にある蝦蟆口と巻煙草を一所に擱んで、無造作に袂の中、不斷着を其のまゝ飛白の書生羽織の紐を結び直すのを見て、

「洋服ですとお喜びなさいませうよ。」



讚平は打笑ひ、

「然う旨くゆくもんですか。」

「そんなことをおつしやつて、貴方また憎まれ口をお利きなさいますなよ。」

「そりや、さきへ行つた上で、御馳走のあり無しに因るさ。」

四

「御馳走、解りましたよ、入らつしやり早々、晩のお茶の御穿鑿なんかなさるもんぢやありませんわ。婦人の顔を見たら髪の出來ぐらのお賞め遊ばすもんですよ。」と中の間の口でいふ小間使の初は、島田に美しく結つて居たが、自ら讚せる如く出來たてのやうで、衣服も餘所行の派手な絲織。日向を通つて些と暑かつたといふ風、衣紋が亂れて圓顔の逆氣鹽梅、つい今出先から歸つたらしい。讚平が汐入町の別荘の木戸に入る時、宿車が三臺、洲濱形に梶棒を置いて、一人金時の文身であらう、脇腹の邊ほのかに鉞の柄の見える胸の汗を拭うて居た。

「何だ、髪の出來、よせ、椎茸なら汁のだし位にやあなるけれども、汝の島田なんかおかめの雜物とおなじことだ。」

「あら覺えて在らつしやい！」

「何といふ大きな聲です。」と此の時銀杏返の年増が次の室からひよつくり出たが、何故か眉を擡めて居た。

「お仲お前も一所か、」

「おや入らつしやいまし。」

「何處へ行つた。」

「はい、」と二人が前後もなく、殆ど同時に言はうとするのを、讚平遮つて莞爾して、

「待て當てて見せよう。」

「當てて御覽なさい。」と甲走つたり、そはついたり、叱られたり、悄げたりしたお初は絲織を大事さうに膝を浮して坐る。

「いきなり口へ浮んだのが干瓢ね、初の天窓が島田湯婆と。」

「お仲さんあんなことをおつしやるんだものを、」と仲働の顔を見て怨めしさう。

「黙つて聞かないか、ものには前兆といふのがある。こゝで考へるに築地へお墓參だらう。」

「當りました！」

といひながらお仲が束々と出て、斜に半身を土間に乗出すと、開閉の荒ツぽい、腕白がよくは閉めないで入つた戸口から、顔を出して縹子の帯の引掛結びの背を振り、



「長吉さん、」

「お、」と大聲を引張つて、返事をしたのは件の文身の兄哥なり。

「お茶をお飲んなさいな、壯俊さん、御苦勞様。」

「へい、難有う存じます、といふのが聞える。」

「さあ、奥へおいでなさいまし、讚様、臺所の方を氣に遊ばすものぢやありませんわ、何うせ湯婆でございます、ほ、ほ。」

「生意氣なことをいふな、どれ、お婦美の奴を口説いてやらう、何方だ、庭の方か、池の方か。」

「お仲さん、御新造様は。」

「あ、池の方のお座敷ですがね。」と又忙しさに取つて返し、歩き、

「讚様、讚様、讚様、」といひ、以前の次の室に入つて、

「一寸々々何うぞ、」とものありげに低聲で呼んだ。

「うむ、」

立話でお仲はひそめき、

「賢客、よく入らつしやいましたのね、本當に可い處、實は其のお墓參に參つたんですが。まあ行らつしたんです。」

「感心。」

「はじめの内は、歸途に新富座を見せようよ、なんて仰有つて大層御機嫌が良かったんですが、向うへ參りますと、お側まではお連れなさいません、お一人でお墓へお参りなさいましたつけ、卵塔場を出ておいで遊ばしたお顔を見ますと、私どもは何うなさいましたと、駈出して參りましたわ、生駒さん、御新造様は宛然ねえ、去年瘡をお煩ひの時のやうなお色なんです。」

吃驚して、お初さんと兩方からお顔を見て居りますと、心持が悪い、歸る、とおつしやつて、丁ど梅吉の姿も見えましたから、直に。母衣をおろせとおつしやつたツ切、今しがた、まあ、無事にお歸りなさいました、が御帶をお解きなされると、其儘あなたね、枕を寄越せつて、横におなんなさるぢやありませんか。

お初さんは少いから、そんなぢやおあんなさらないと暢氣でせう、私は心配でなりませんから、お醫者様を呼びますやうに申しましたけれども、病氣ではない、とおつしやるんでせう。其でもと押返していひましたら、煩い！とね、散々な御機嫌です。何うしようかと、うろくして居りますのに、お初さんが暢氣らしい、わあ、いふのが又逆らつちや悪いと思つて、參つて見ましたら、あなたが在らつしやつたんですよ。

眞個に助かりますわ、何うぞ一番様子を見て下さいましな、可い工合にねえ、後生なんです。」



讚平は頷いて聞きつゝ、少時考へたが、

「何か我儘だらう、其とも、お前たちが謀計に乗つて新富座をごまかされたんぢやあないか。」

「御串戯ばかり、何うぞ。」

「可し、池の方だな」と立つて二人は二ツに分れて、生駒はつか／＼と行き懸けたが、振向いて調子高く、

「お茶菓子早く、あの又最中を紙に乘せて出すと、撲るよ。」

五

「呀、なるほど御不例のやうだ」と生駒は奥座敷の入口で聲高に言つた。

勝色うら郡内の小搔卷の襟を深く引懸けて、お仲は横になつて居るといつたけれども、しかし杖を其の搔卷の裾の處に轉がして、六疊の片隅に差置いた小机に恚懸つて、根上りに結つた年紀には肖ない内端な髻、其さへ重たげに、眉の隠るゝばかり俯向いて手で支へ、壁に對して念ずるが如く、煩へるが如く、惱めるが如き風情なるがお婦美である。

見るから最も惱ましげな姿であるのに、生駒は遠慮些とも無く、つか／＼と座に通つて、汐入の池に臨んで欄干のついた板縁に腰を懸けて、斜めに見るお婦美の後姿は、艶かに冷たさうに、

鬢の毛の透いて映るばかり、眞白な耳朶から頬のあたり、頤をさし入れて二枚合の衣紋、やゝ寛かに、解棄てたまゝの錦の帯は、紫紺の地に處々白金黄金の光さして、搔卷の裾にかくれ、疊の上にはあらはれて、恰も恚る麗姫の棲める仙境の細道に異ならず。

されば此時、池の面に一點の雲の淀みなく、空は淡く澄んで水かと思え、いらかを迂り、廂を傳ひ、別荘の奥深く弱々とさし入る日は、晝の月の色を見るやう、掛花活の芙蓉の影を、てらてらとある小机の面に宿して、朱の小さき硯が一個、一册觀世流の謡の本。生駒は身を反して、欄干に背を凭らせ腰かけた足を組違へながら、お婦美の容子を眺めたが、繼穂ないのを事とも思はず、座に人ありとも思はぬ狀で、

「おや／＼相變らず唸つてます。……如何に頼光御心地は何とござ候ぞ、と軍歌のやうに、一寸節を附けて言つて見たが、無邪氣に呵々と笑つて、

「何、そりや姉さん。」

「これですか、」

と衝と見返りざま、右手をしなやかに差出すと、手首にかけたは一聯の珊瑚の數珠、爾時搔卷の袖は迂り脱けて、お納戸の紋着に、色こそ違へしどけない桃色の扱き帯、姿も、ふりも、此處に……と思はず讚平は胸を抱いたが、フと恚る人と、恚る境遇を天が戯にこしらへて見たのだと



感じて、あはれに思つた。

親子  
そば  
三人客



「はい、」とあでやかに振返る。  
 「一合正宗をつけておくれ。」  
 「お君や、熱くしてお上げ申しな。」  
 「はい、はい、」

花まきを一つ、と誂へて、縞の羽織の片手を懐に、右手で焼落しの、最う灰になつた大火鉢をぐい、と引寄せながら、帳場格子を後にして整然と坐つた、角帯に金鎖を見せた客があつた。彼は十二時に近い頃、雨上りの春寒い晩である。  
 「まきを一」と媚かしい聲で通したが、やがて十能に眞赤なのを堆く、紅の袴がけ、圓く白い二の腕あたり惜氣もなう、效々しく、土間を蓮葉にカラ／＼と突かけ下駄で持つて来て、鐵火箸を柄長に取つて火鉢にざっくり。  
 面長で色白な、些と柄は大いが、六か七と見えてあどけない風、結綿の鬘がよく似合ひ、あらい紺の前垂して、立働きに繕はず、衣紋の亂れたのも初々しい。嬌態もなく眞直に立つて、火を入れるのを見て、  
 「お、難有う、」と忙しく両手を翳した、客は此の節一寸々々来て見知越なので、帳場に坐つて居た、女房が愛想をいふ。

「飛んだお寒うございますねえ。」  
 「寒いッて何うも、」  
 「妙なお天氣でございます。」  
 「然やうさ、」といひかけて、火鉢の縁に頬杖した、客はフト心付いたやうに、自分と斜向に、其は入口の、一間破れた障子を背、上框に腰をかけた、左足を土間一杯に踏伸し、銅色の艶々と、然も瘠せた片足を前はだけにぐいと折つて、踵で臍を壓するばかり、斜に肩を落して、前のめり、坐睡すると見ゆるやう、左利の拇指と、人指を割つたのに、薄手の猪口を挟んで、肘を錠形にしやちこばらせ、貧乏搖ぎといふ、總身をゆすぶつては俯向いたま、猪口を鼻の頭で押つけるやうにして酒を嗅いで居る親仁があつた。これを見て、目を返して、いま引返さうとする娘が、襟脚の雪のやうに鬢の浮いた、撫肩の、雙子もしなよく、すらりとした後姿を、  
 「あ、姉さん、」



母親と客へ二ツ返事で、お君といふ娘、向をかへると手を上へ、一寸爪立つたが、眞暗な棚の、貼札を正面にならんでゐる、蟻の中から一本抜いて、直ぐ下の板の間へ、無造作に十能を差置いて、小刻に、やがて、煤けた柱で劃つたやう、磨硝子を嵌めたる如き、湯氣のむら／＼として、洋燈の朦朧とある中へ見えなくなる。

彼處に父親が居て、其のかゝりて、

「かけ一上、」と口早也。

「あいよ、」

直ぐに娘は盆を据ゑて、片手を振りながら、臺所の曇つたやうな中仕切の敷居を跨いで、結締に結んだ手柄の色、鮮麗に露れたが、此の註文は別に一人。

入口に極近く、障子に肩の觸れるばかり、悄れた状して、羽織も着ないで、頬被をして居たらしい、なえた手拭を項に絡いて、身を窄めて居た壯俊で、顔を灯に背けたから、年紀の頃よく分らず。

「お待遠様、」

と出したのを、黙つて請取つて、腰のあたりへ引着けたま、茫乎。

「おや／＼おや！」

帳場から、

「父上！」

「何うしたの、」と娘もぼた／＼、何につけても忙しい、壹岐殿坂下のおやこ蕎麥と看板に記して、夫婦と娘ばかり、男も使はず、近所の出前は親仁が受持つて、留守の内は板前を母親が預る、娘が給仕の共稼ぎ。

店も座敷も八疊の上り口の此の間一ツ、積んだ蒸籠を床飾にして、客は五人だときツしり立込む程、内端な商賣、勿論こゝが親子三人の関にもなる。

二

けれども加減をよく食べさせて、種ものの種を惜まず、トンと腕を鳴した、打方の緊の好さ。かい撫のもりかけ屋に澤山類がないと、土方、日雇取、大工、仕事師、造兵のお職人などが味ひ覺えて、透の無い繁昌に、めツきり仕出し、未だ出来上りはしないが、つい月はじめから、金方なしに二階の普請にかゝつた位。

亭主が懸聲の大きに、女房も帳場を立つた。

「何の、今お燗を上げようとする、蟻がお前、ボカと斜ツかけに破つたらうぢやないか。雫も



残らず、釜の中へ打ちまけよ。ほら、芬々して居ら、湯の中で暢氣なものだ、人の氣も知らねえ奴さ。」

「希有だねえ。」

「父上、ひッが入ッてたんでせう。」

「それにしても湯は恠う温いんだからな。」

「まあ、何しろかはりをおつけよ、早くおしよ。」といつておいて、女房は帳場に直つた。

「相済みません。」

「御一所でなくッて不可ませんが、何うぞ召上りまし、お待遠様でございました。」と娘が、詔を

土間から其へ。

火鉢を一寸押遣ッて、

「可いとも。」

「おう、娘さん、」と此の時、又嘗の猪口をひッたり盆に置いたが、糊で附着けたやうに未練らしく指も放さず、杉の丸箸が松葉に散ッて、井の蓋は桐一葉、親仁は苦々しい眉の顰んだ、然もトロンコの顔を上げて呼びかけた。

「お銚子？」と派手な聲、既に四本ばかり並んだり。

「いんや、澤山だ。」と強く首を掉ッて、ガツくりとうつむき、斜に股のあたりへついた手を、膝頭へのめらせて、一ツ肩を揺つた。

「待ちねえ、待ッてくんねえ。」

一調子トス聲を高らかに、

「待ッてくんねえよ、」と内懐へ手を入れたが、ふッ／＼と向うさまに息を吹いて、しばらくして、「え、と、恠うだに因ッて、」と、よろけ縞の唐棧の羽織の両方の袖口を引いて、左右に二つ三つ扱くと、襟を返して、うしろへ脱ぎ、腋の下を潛らして、中央を擱んでずりりと前へ引いて暖をした。

「おう、何だぜ、」といひさま細い赤大名の雙子の、寝皺は寄つたが、未だ新しい、艶のある衾に、三尺をしめた姿で、土間へツイと立上つて、

「都合があるからね、おい、これを預けて行かあ、ねえ、おい、」と二足三足。

親仁が寄せて来るので、娘は鈴のやうな目を睜つて襷掛けの其のあらはな手で、前垂の端を取

つたま、思はず退る。

「都合があるからね、済みませんがね。」

「あ、もうし、」女房は帳場の中で片膝立てた。



「眞個に濟まねえ、ウイ、濟みませんでござえす、ござえすが濟みませんでござえすが、ござえすがね。」

ほつと呼吸して、

「私あね、三崎町だ、三崎町のね、おい、藤助ツてもんです。此の何だ、町内の頭に聞いて見ねえ、知ツてら、懇意です、直に何すら、ねえ、おい。」

「お次手でよろしう、」と夫婦ほとんど一所に聲をかけたが、亭主姿は見えず、女房は一寸面を背けた。

娘はじつと見て居るのである。

「お次手でよろしう、何、お次手で、」と藤助ぐつたりと尻を下し、

「可かあねえ、よくねえです。憚ながら、濟むもんかい。そんなことをして濟むと思ひますか。え、濟むめえ、相濟むめえが、ヤイ、何うだ、姉や、」

突か、りさうな劍幕に、帳場から、

「何の貴客……お君や、」

此方へ、と目くばせする、母親の顔を見て微笑んで、

「可いわねえ、母様。」

三

「可かありませんでござえす、フム、」と打棄つたやう、海鼠に首があらば此の形さ。

容は其の容子とイんだ娘の顔を上下に打視め、

「突然だが、お前さん、お金子なら何うかしようぢやあないか、何も御縁さ、」

帳場に捻向いて、早や手を懐中へ、

「おかみさん、私が立かへて置ませう。」

「まあ、旦那、」

「滅相な、」と調子はづれに、向うから爛の出来た一罎を、亭主は不作法に引摺んでのツこり出て

来た。布子に、これも襷がけ。半股引を穿いた、およそ五段目の定九郎が、山賊頭巾で、揚幕を

出た頃の蕎麥屋の風と見て可也矣。

繕ふ處更になく、

「へい、」と客の前へ突出して置いて、娘に並んで、藤助の傍に寄り、手はかけぬが、肩の上へ、

掌を開いて腰を屈め、

「え、もし、心持を悪くなさらねえで、一ツ勘定を踏んでおくんなさるわけにやあ行くめえか



ね。  
「何を、」

「いゝえさ、腹をお立てなさらねえで、何うでございませう。御都合はまゝあることなり潔白に然うやつて形を置いて行つて遣らうとおつしやる、其のお心は讀めました、讀めました相談でさ、唯た今ソレ罎が破れて酒がこぼれたでがす、内の奴も希有なこつたといひまさ。

此處で私も心持が悪くツてなりません、吉左右だとは誰が考へても思へますまい、いや、詰らないことでもあると氣になりますわ。

處を一ツ勘定を踏んで下さりや、は、あ、今夜これだけの損のゆゑ、其の前兆であつたにして、さて、さらりと事済み、何うでございませう。え、もし、」

「馬鹿に、馬鹿にしゃがんだ、誰だと思ふ、誰だと思ふ藤助だ。慥う、藤助を誰だと思ふ、深く慣つた風もないが、だらしもなう纏れかゝる。

ト白けて皆が黙りの折から、ぞろろりと高い音、此の時まで伸して居た、件の影のやうな壯俊が、思ひ出したやうに咬つたのである。

「御主人、ともかくもまあ、其の事は氣にしないが可い、壊れた分は私が買った分にして、代を拂ひませう、別に。で、私が買ったものとすりや、お前さんが心持を悪くするにも當るまい。何

うです。」

「飛んだことをおつしやる、勿體ない。」

「そして何しようぢやあないか、一つ其の方のも立かへて上げようぢやあないか。」  
たちまち大音聲、  
忽ち大音聲、

「誰だと思ふ、藤助だ、鏝なしの藤じるし、と半から極低聲、と聞くと急に開き直つて、細い目を見据ゑながら、

「慥う、内の亭も、餘所の旦那も、可い加減にしろい。勘定を踏んでくれの、立かへると好きなことをいはあ。藤助だ、さあ。藤助だ。慥うなりや、さあ、手前ン處の太打が鼻緒に化けても踏まねえよ。情婦が富圖に當つてもかけらだつて達引かせねえ。天が二杯よ、一、二、三、四い、銚子が五本だ。取つといてくんねえ、斷つて預かつてくれ、え、おい、斷つてのこつた、」

「でもさ、」  
「眞個にお次手で可うござんす。」

「かみさん、おかみさん、おい、かみさんや、女の癖に無勘定なことをいふない。慥う、聞きねえ。女房は家のかためなりけりさ、聞きねえ、女房は家のめツかちよ、なあ。お前さんは兩眼明かだ、しかも佳い年増だ、佳い年増で居て、見ず知らずの野郎を達引いて濟むかい。」



は、あ、さては、お前密男をしてやあがるな。」

「ほ、ほ、」

先刻から他愛なく、莞爾々々して酔どれの状を見ながら、餘念もなう、其の管を聞いて居た、お君は兩親が、今のあまりの雑言に齊しく色を變へたにもかゝはらず、およそ堪らないと言つたやうに、

「まあ、松助にそっくりだよ。嬉しいねえ、と擦寄つたが、いきなり唐棧の羽織を請け取つて、手にのせると、肱のあたりがヒヤリとした。

「お、冷い、雨にあつたの、母様預つて置きませう。」

「へい、お値段を此處で、といつて、件の壯俊はフィと立つてがらりと戸をあけた。立てかけてあつた、番傘がはすみで、ばツさり。見向きもしないで、影が消えたやうにボンと出た。

「誰だ、おねだんを此處へなんて言ふなあ、誰だい、へん、己が名は藤助でえ。」

「藤助、」

「や、」

「本名皮剥の庄兵衛、」

「御用だ！」

「ウム、」

「神妙にしろ、」

「お、先刻蕎麥屋で背後に居た、」

「夜中に羽織を取りに行つて、戸をあけさせて押込まうと、強盗品玉の材は上ツたぞ、覺悟しろ、唯だ一人だが、鐵三郎だ。」

「旦那、まあ、御覽なせえ、とビクともせず、内懐から、取出して、片手業で紙包、開いて掌に据ゑたのを、眞砂町の原の角あたりから、一筋の赤い虹の如く、暗を貫く瓦斯燈の灯に、唯見れば美しい半襟であつた。」

「馬鹿といや、まア馬鹿でござえすがね、あんまり娘の罪の無さ。短刀で威したら、蟲がかぶらう、俳優だと思つて嬉しがるか、どツちにしても仕事は出来ねえと、狙つた的をフィにして、土産を持つて、寝ねえうちに、これからね、羽織を取りに引返す處でさ。」

旦那、たゞ此のまんまぢやあ不可え、私も庄兵衛だ、唯今一立廻やツつけやせず、天命なら仕方かねえ、お前さんの手柄になせえ。」



しかし旦那、お職掌だから御無理はねえがね、考えて御覽じろ、私が痛めつけたって、たかが金子だ、働きや譯なしさ。も一人居た野郎なぞア、いやに見せびらかしやあがつて、あいら、娘を狙ひまさ、疵ものにされた日にや、取返しがつくものぢやねえ。

可哀相に私のやうな悪黨せえ、涙が出るやうな可愛らしいものを、慰まうといふ善人が世の中にや澤山あります、そいつらにも些と氣を配つて、庇つて遣つておくんねえ。

はて、何處へ、持つてく土産だらう、と水を飲んだより一層醒めた、酒の名も知らぬらしい、苦み走つて引しまった、頬のあたりに微笑を含んで、其の半襟を帯のあたりへ突込む、と思ふと、鐵三郎は颯と退いた。

冷龍一躍、三寸ばかり閃いて、疾く手にかゝつた捕繩は、端短にブツリと切れた。

「お前さんは未だ少いや。」

トタンに衝と寄る、背後へ飛んで、下富坂の暗の底へ、淵に隠れるやうに下りた。行人が知れず、上野の鐘。

## 起 誓 文



お客分 松蟲 銀色赫奕 納涼臺 二十六夜 住居之段

朝戸出 田舎唄 蟹の怪 岩井靜馬 若木の橘 火焰

山 神童

お客分

一

「おや、お歸りでございますか。」

停車場前の新開地、古顔の犬も居らず、蝙蝠の棲む穴も出来ない、未だ新しい軒並び、海水浴旅館の案内所。鮑の粕漬、水雲の賣店、一寸一杯お晝食、お休み處などある中に、客が駕籠で来た時分から、一軒老舗の角の茶屋。

こゝに名物の女夫饅頭と云ふのを商ふ。釜の上で冷えたらしい蒸籠を重ねた店の、油煙で燻つた眞赤な灯、薄暗い釣洋燈の蔭から、三十近だが縁付かぬ、お縫といつて評判なのが、店さきへ通りかゝつた男女連を見懸けて呼ぶと、

「あい、唯今。」

と婦人が先へ、あと齒の下駄の音からりとさせ、素足の爪尖ちらくと、摺れ逢ふばかり内端



な歩み、片袂きり、と引上げた、裳を溢る、水色縮緬、露にしつとりと重たさう。  
 鼠地に紺で市松形に、三番と置いた組合の揃の浴衣に、黒縹子の帯を引かけ結び、小造だけれど襟脚の長い脊は高いくらる。洗ひ髪をさらりと無造作に亂したが、上手に肩で捌いたれば、丈に餘るのも目に立たず。眉細長く、鼻筋の通つた、目の涼しい、細面、口許が引緊つて、頬の肉の薄いのは、愛嬌に缺けたが品の可い處あり、年紀の頃二十か一。  
 眞白な胸を衣紋寛やかに、裾を短う、ふツくりした腕あらはに、竹の柄を軽く取つて、提灯を提げた、帯にも袂にも蹴出しにも、媚かしい夜の隈、浴衣の袖のひだが揺れて、店頭へ来て、嬌態好くイむ。

お縫は蒸籠の後へツイと立ち、干菓子子の箱の硝子蓋、龜裂を稻妻形に貼つた上へ、軽く手を置いて半身を乗出して、

「まあ、お掛けなさいまし、御緩りでございましたこと。」

婦人は忘れたやうに其の提灯を地摺にぶらり、眞直に手を下し、まともに受けた洋燈の灯が眩しいといった目を、一ツぱつちりと瞬いた。

「あゝ、難有う、大分手間が取れたでせう。」

「しばらくでございましたよ。先刻お寄りなさいましたのは、未だ灯の點くか點かない時分でこ

ございましたもの、ねえ、母様。」

背後を見返ると、停車場に面した向うの隅の大火鉢に膝を支いて、前に腰を掛けた車夫、魚屋など草鞋連の相手をしながら、言を途切らして、海手の方の軒に立つた、此の婀娜者に見惚れて居たのが、

「然うとも、お前。」と仔細のないことを仰山に答へたが、心付いて車夫に向ひ、

「だとね、うむ、然うかい。」と可い加減なことを云つて、煙管を見ると吸殻が消えて居るので、

一ツ扱いて、トーンと叩く。

寂寞する。

婀娜なのは立つたまゝ、白脛を外に捻ぢて、下駄を溝石にカラリと當てた。

「姐さん、最う何時です。」

「未だ下りの終汽車が着きません、まあ、お休みなさいましな。」

「然うね。」いひながら、打傾くが如くにして、

「あなた。」と振向く。

背中合せに間を置いて、人通のない路中に、秋草山の空を仰いで、星の美しいのを視めて居た、つれの少いのが、



「一寸、お掛けな。」

二

紺緋の單物、鼠縮緬の兵兒帶して、此は草履穿。麥藁の海浴帽を、眞白な紐で結んで大きやかに肩にかけた、年紀は同一くらの歟、人摺れのしない内端らしい質であるから、或は五か六かも知れぬ。

休んで行かうといつたので、提灯を下に置き、直に傍なる内の者の納涼臺兼帯の床几の上に、棲も下さず、

「あゝ」と、片手を背後へ反して、可愛い足を素直に、下駄の齒の見ゆるまで、罪もなく投げ出して、草臥れたあどけない風、ほつれ毛を一寸拂ふ。

娘は干菓子ひきわしの箱はこに頬杖ほつづえして、一舉一動いっしょいちどうに目を注ぎ、惚々とする顔色、蔭では熱心に其の假色かりいろを使ふと知るべし。

「あなた、これから月ヶ岡まで、随分お大抵ぢやございません。」

「否、つれがありますから。」と、何の氣もつかずに云つた。

「まあ、お楽しみ！」

と目を圓くする、お縫の呆れた顔の前へ、ツイと出たのは連の男で、背にかついだ麥藁帽が洋燈のあかりを遮る蔭に、婦人は耳許をほんのりと、口に差し寄せて提灯を一吹、フツ。目を反して、星を見て、澄したものである。

青年は頓着せず、

「姐さん、此の梨はおいしいだらうか。」

「唯、否、其よりか其方の筈はずのが、好うございますよ。」

「どれ、此かね。」

「其は若旦那様、泡雪あわゆきと申しまして、口へ入れると皆解けて終ひます。飛んだおいしいのでございますよ。」

「いや、何うですか、姐さんの口の方が餘程旨しさうでございますね。」

「あら、あんなお人の悪い、御新姐様お聞きなさいまし。」

打微笑むのみ、

「……………」何にも不言。

「これ、お客なんだよ。」

「若旦那。」



「何だ。」

「月ヶ岡の若旦那、お客分といふのでござんせう。」と母親が又向うから伸上つて煙管を杖。

「ひろめをしたら祝つておくれよ。」

「そりや、もう。」

「一ツ御馳走にならうかね。」と、取つて床几に憩つたが、婦人とは斜向の背中合せで、恰も懇意な獨りもの同士、壁隣に住つたといふ趣である。

「梨を食るんですか。」

「あゝ。」

「庖丁を貸して下さいな。」

少し調子高にいつて、投げて居た足を引いて、床几から立たうとする。

「其處に在らつしやいましよ、唯今上げます。」

「何うぞ。」

「それから、煙草の火を。」

「光や、お茶をお上げなさい。さあ、睡つてちや、不可いぢやないか。」

「はあ。」と云ふと、するりと土間へ、はだけた膝をつきさうにしたが、危く貽して身を橋に、睡

がりの雇女、ばた／＼と希代に泳ぐ。

「おツと、どツこい。」

「呀！ 相かはらず。」

「お天氣が變るのかい。」と草鞋連が哄と笑ふ。

松 蟲

三

洗ひ髮の意氣なのは、胸を伏せて、俯向きながら、手尖の働に器用を見せた、皮は溝の上に長く垂れて、梨は半ば掌に雪を捧げたやうである。

切れものの刃を見詰めながら、

「おいしさうですなえ。」

「そりや貴方、其に何でございます、つい晩方馬に附けて持つて参りましたばかりですもの。」

「あの、先刻行きがけに此處に繋いであつた馬は、これを積んで來たんですか。」

「然やうでございます。」



「然う、大きな顔だわねえ。」と呟いて眞面目で居る。

黙つて煙草を飲んだのが、

「大きな馬？」

と聞答めた、妙なことをいふと思つたらしい。

娘は堪らず笑ひ出して、

「東京の馬は小さいんでございますか。」

「何をだらしないことを言ふんです。」

庖丁の手を留め、眉にはら／＼と亂る、髪を、横に軽く拂ひながら、

「嫌ぢやないんですが、恐らしいから、馬車の中でも、荷車の中でも、成たけ遠くへ退いて歩行くんですから、あんなに近い處で見たのは珍しい位なの。」

「だつて、お内へ行らつしやいます路では、澤山、馬士が曳いて行くのにお逢ひなさるんでございませう。」

「其の時は、連の方の背後にかくれて、目を瞑るの。」と目を瞑る。

「へい、なるほど。」と是非に不及、感じ入つた體でお縫は頷く。

「先刻のは其處の柱に、緊乎と、結へてあつたからよく見ました。而して顔の長いッたら、……

「こんな。」と庖丁を持つたまゝ、腕を白う、自分の顔の前へ衝と伸した。

「それぢやまるで、狐のやうだ。」

「人！ 憚様ですよ。」

二人が交へた咄嗟の此の言、お縫には聞取れなかつた。はて、間は抜けたとは思つたが、轡頭を引繞らし、話を棒鼻から取つて返して、

「然う／＼、あの時、お通りなすつたんでございますね、眞實に何をして在らつしやいました、今時分まで。」

「些と、お轉婆をして居たんです。」といひかけて、フト梨を剥く手を留め、掌をかへして、兩方、瞳を動かし熟と見たが、

「おや。」庖丁を置くや否や、まさに剥き終らうとしたのをぱったり取落した、小さな雪丸げは、露を持つた夜の地へ星の宿りさうにころりと轉がる。

お縫が驚いて、

「何うなさいました。あれ！」

「まあ、私。」と細い指を宙にばら／＼と筆を拂つて、うつかりした其の風情。

願みて、



「何うした？」

「お切りなさりはしませんか。」

「否」といつて手を袂へ、白の絹ハンケチを取出して、掌を合せて拭き、

「はじめッから綺麗にして、それから取れば可かつたのに、今お轉婆で思ひ出したら、手が汚れて居たんですわ。ねえ、松蟲を捕まへようッて騒いだでせう。」

四

「何て處、此のさきの、海へ出ようとする些と手前の砂原に蒼白い異人館がありませう。橋があつて、片一方が芋畠になつてますね。路傍に三味線草だの何か、入ると乳ぎり伸びて居るでせう、彼處に澤山鳴いて居るの。松蟲ッたら、まるで草續きに一軒々々、世帯を持つて棲つて居るやうですわ。しばらく立つて聞いて居ると、欲しくなつて仕様がないます、ですけれどもねえ、灯もなし、お星様は出て居ても宵暗でせう、何うすることも出来なくッて、私口惜くッて、堪らなかつた處へ、向う横町の八百屋さんが、異人館へ急に納めるものがあつて、其の歸りがけなんだつて。

提灯を持つて居て、蟲を取るんなら貸しませう、然ういつてくれたもんですから、それから方草中を暴れたんでせう。草は深しき、お前さん、あかりが茫乎して、じれッたいから、蠟燭を引張り出して、裸火を振つて潛つて歩きました。

「其ですもの。」と唇に指を觸れて、眉を蹙め、

「私、つい氣が付かなかつたの、おかに此の手ぢや上げられやしないんです。姐さん、憚り様、一ツかはりを剥いて上げて下さいな。はい、庖丁、」

振仰いで差出したのを、青年は無言のまゝ、菓子箱の彼方へ取次がうとする時、梨を引摺むと、お縫は肥つた身を小取廻、急いで下駄を引かけて、

「其處へ參ります、參ります、可うございます。何も其の位なら汚れて在らつしやりやしませんわ。」

「何うして亂暴なんですから。」

「だつて、あなた、草中は夜露がひどいばかりぢやありませんか。」

「其でも汚いんですよ、馬の草鞋が打棄つてあつたし、女のね、駒下駄の緒の切れたのが片足さ、草ツたら蒼い水晶のやうで、露が透通る中に、チロリン、何うも葉さきが揺れるやうに鳴いてるから、夢中になつて櫛を落ッとしたのも知らないで探したんですわ、晝間見たら、それこそ汚らしくッて大變だらうと思ふの、ねえ。」と薄ら寒さうに肩を窄め、兩手でしツかりと乳を



抱く。雪の頸を軽く撫でて、そよ／＼と風が出た。

溝石の外に棄てられた一瓿の雪は砂にも塗れず、早や初秋の氣の所爲か、それさへ倅に立つ位。五六軒筋向うの、町家に交つた茅屋の軒に、淡く残つて居た蚊遣の煙が名残なく消えると、髪に染み、袖に宿つた磯の香が、ほの／＼としたのがはじまり。

界限の灯が一ツ消え、二ツ消え、やがて間近な腰障子に人の影法師が大きく映つて、屋根暗く、銀河つら／＼と低く下りた。

一點の雲もなく、星は一ツ一ツあらん限りの光を放つて、ものの凝つたやうに輝く間、空の色は漆の如き、其の影を敷いた初夜過ぎの町に、折から、犬も鳴かず、ばつたり人の往來途絶えて、石ころも無い路傍に、唯一つまみの黒き砂あり。其の砂、見る／＼うちに堅まつて、石となり、驟然と動いて木の葉に變じ、忽ち足が生え、爪が出来、むく／＼と躍り出でて、暗い隅から灯の射す中へ、さら／＼と來て、體を据ゑ、斜に構へたるは、先づ……何物ぞ。

五

即是兩眼在天、一甲不着地、大足二足、小足八足、右行左行而渡世者、蟹也。

甲を斜に溝石へ反を打つて、蹴出の媚かしくこぼれた端を、引袂まむばかり間近く、今しも男

の手から煙管を受けて、伏目に一吸した地を這ふ煙を貫き、ガツキと爪を上げたのを、見るとも無しに一目見るや、

「あゝ、」と呼吸を引いてついと立ち、身を翻して慌しく、青年と傍に立つた娘の中を、羽色の青い、あはれな鳥の、けたましく搔潛つて、突然土間へ飛込むと、烈しく下駄の齒を踏鳴らして、

「厭よ！ 厭よ！」と身を揉んで、煙管を簪に袖を上げた。

恰も其の時、洋燈にも蛾の大きなのが、ばつさりと、白い粉を撒いたので、停車場の灯は届かず、驛長室の窓の明が、薄黄色に見えるばかり。此が消えたら、界限に灯は無くならう。一國を暗にする蟲の羽音の凄じさに、飲むものは飲み、饒舌るは饒舌り、草臥れたのは草臥れて、壁を天窓で小突いて一人、敷居にはらんばひになつて一人、蟬蛻といふ身で顔を膝に挟んで最う一人。母親は火鉢の縁に頬杖して血の道の廣告に出ようといふ顔、猫及び雇女は蚊の鳴く中に座睡して、陰々滅々、穴居時代の風情であつたが、婦人の叫聲に齊しく驚き、吁々といふ、一時に魂が、ひよいと入ると、思ひ／＼の立働さ、起返るやら、突立つやら、膝を立てる、猫が歩行く。停車場ではがらく／＼と鈴が鳴つた。

「何です。」

「何うなすつた。」



と逸疾く、納涼臺に立ちかゝつたのは、大肌脱の車夫と、向顔卷の魚屋さん。時に海手から俵が二臺、停車場をさして、矢の如く駆け抜ける、響きに應じて、怪物の足が消えた。

木の葉となり、石となり、見る間に黒き砂に紛れて、横ざまに見えなくなる。娘は前後を呟しながら、

「何でございますね、梨の白いのが落つこちたもんですから、蟹が握飯だとも思つたんでせう、そんなにお嫌ひでございますか。」

「何ね、恐しくはないんですけれど、吃驚したんですもの。」と極が悪さうに莞爾する。

「悪戯が過ぎるからです。」

「だつて……」とうつむいて口の裡、仔細ありげに言ひかはしたが、驚破鎌倉に駆け着けた、御馬前の兩名聊かも耳に留めず。

「はゝゝゝ、蟹ですかい。」

「私あ、また可い心持にうとくしながら、荷の中の鯉が泳ぎ出した……と。」

銀色赫奕

六

魚屋の彦次は、若くつて、威勢の可い、毛だらけな、腋の下の汗を拭いて、

「現と云ふんだらうか、それとも幻か、私ア何も眠つたとも思はねえけれど、ふらりと往來へ泳ぎ出すから大變だと思つた處だつたから、尙のこと驚きたい、えゝ、姐え。」

「(笑ふ)ほゝゝほゝ」

「まあ、氣の毒だつたわねえ。」

車夫の筑松 傍より、

「何もお嬢様、氣の毒がんなさることはねえんです。何、鯉が泳ぐ夢なんか見るもんですか、今ね、口を開いて寝て居やあがつたから、鳶に攫はれた處を見ただすよ。」

「馬鹿をいへ、へむ、彦次の魚は生きてるぜ、影がさしや鳶を取らあな。」と大力味で腕を張り、足を踏んで、灸のあとがある背中ではやがみ、天秤は草鞋の下つた柱に立てかけ、此のあたりに使ふ魚籠を二ツ宛かさねたのを一荷、土間に引入れてあつた、蓋を向うへ撥ねると、銀色赫奕として鯉あり。

彦次は魚頭に片手を翳し、



「これだもの、夢に泳ぎ出さあ、そら未だ、くりく〜と目が動く。」

「嘘をつくぜ。」

「洗髪のは肩越に差覗いて、

「サウダですか。」

「へい、さうだ鯉のいかいんです。」

「活がい、ねえ。」といふ口ぶり、引かけの帯、裾端折、浴衣の染も質素なので、馬の顔が長いと言つた人に似ず、花道を出た世話女房といふ風がある。一ツは氣の毒らしい今の騒ぎのまじくなひに、鯉の活を賞められて、彦次は大得意。

但し背に近い美人の胸に、力瘤のでこぼこした肌腕の身を、もちく〜、

「何うだ、御新姐様の目が曇らぬ鏡よ。」

「云つてらあ、私だつて、お客を乗せりや、鳶くらるにや一のしに飛ぶ男だ。」

「此の鳶野郎、鯉を攫はれちや大變だい。」

「呵々と笑つたが、

「物騒々々。」と呟いて、彦次はやがて蓋をしようとした。

「あなた。」

「一寸買つて行きませうか。此間から鱒ツか持つて来ないんだもの。」

床几に掛けたのが、又星を見たま、振向きもしないで頷く。

「魚屋さん、幾干なの。」

そりやこそお聲がかりに、彦次はしかつて居た蓋を、今度は威勢よくボンと撥ね上げ、

「え、安うがす、安くして置きますぜ。御覽なさる通り唯もう一尾ですからね、先刻の地引で上つたのを、此處へ持つて来るまでに、其處らのお別荘へ羽が生えて飛んだでがす。魚はもう此の通りだ。」

「お前さん效能書は分りましたよ。」

彦次は目を返して、

「黙つて居ねえ、お、お前、其の梨は何うだ。諏訪法相の兜といふ形で捧げ奉て居るぢやねえか。」と近ごろ玉之丞といふ俳優が、明神の境内で小屋がけ芝居をした、其の十種香の段で、見覚えの警句を吐く。

「おや、おや〜。」とばかりお縫さん大テレで、手に据ゑたのを廻しながら庖丁を取りにかゝる。澤山、其のま、持つて歸るから可い。もう二つばかりおくれ、次手に袂へ入れて行く。」と銀煙



管を、御殿持の筒へさして、膝について居たのを持直して、其手を袖口に入れたまゝ、床几を放れて衝と立つた、袂は帯に、ひたりとつく、瘡形な人に一そよぎ、星きらりと風涼し、月ヶ岡さして歸り支度。

### 納涼臺

七

「彦、やい、恚う唯は返さねえぜ。鯉を一本可い値で商ひをした上に、御祝儀を二貫とせしめて、別嬪を歸しやがつた、畜生め。」と車夫は納涼臺に居所をかへた。

「何さ、ありや二十五銭なら大した高い値ぢやあないがね。」母親も店の方へ出かけて来て、

「しかし、兄哥や。お前一寸々々商ひに行くだらう、内も恚うやつて、海へ行らつしやる行歸りに御最辰になることなり、彼の方達は何にも御存じない、お坊ちやんとお嬢さま、阿漕なことをして儲けちや濟まないよ。」

彦次は田舎の氣樂さ、溝石の上に立ち、肌腕の身を露出で、

「おツかあ、心配しなさんな、そりや無え、憚りながら彦次だ、いや又儲けようとした處で、今

の一件だ、何うしてうつかりして居ようものなら、飛んだ背負投げを喰つて酷い目に逢ふ。」

「今の一件ツて何なの、御祝儀の出た一件、彦さん、お前が、何かいつてへ、へ、へ、ツて希代な顔をおしたと、おや、然うお前さんだツたのかい、御免なさいよツて、恚う縹子の帯の間へ手が入ると、銀貨が一ツ、アイヨさ。そして何うも極りの悪いやうな彼の笑顔ツたら、何うもく無いんだよ。」と自分が大きに笑顔になつて、お縫は半面を團扇でかくす。

「さあ、大變、何うも早や、此間ツから様子が變だ、何かといふと、妙に別嬪の假色を使つたり、身振をしなざるがね、不可やせん、肥つてるもの。何それも肥つたのと瘡せたのだから、大した相違はねえやうなもんだけれど、唯、何だね、女の名を濁つて讀むだけさ、一寸先づ、前方の風が玄治店のお富だと、お前さんは、」

「何だい。」

「然うさ、田舎茶屋のおどみさ。」

「畜生！」

「だがね、唯だ今アイヨと帯の間へ手をお入れなすつた風は、そつくりでしたぜ、何なら銀貨を一ツお驕んなさい。然うすりや、尙の事お富さんだ。」

「可い加減におしよ。」



「おツと打たねえで、何うぞ其の團扇を貸しておくんなさい。身に染みるやうだが、何うも蚊が居て不可え。」

彦次も毛脛を高く摺り合せ、

「ほんたうに酷い蚊だ、よく彼の方達はじつとして、身悶もしないで居なすつた。」

「其筈さ、お前達のやうに酒をのんで裸ぢやあないものを。」といひながら、母親も土間へ下りた。

納涼臺は夏中いつも此の時分から、内の者が領するのである。

「筑松。」

と呼んだ娘の語氣が極めて烈しい、母親といふ味方を今身近に引寄せたから、こゝで焼酎の貸を枷に大に仕返をされることと、車夫は思はず恐入ッて、

「へい。」と弱い音。

「申戲はよして、彼の方は、お富さんといふの。」

「何、そりや出たらめさ。眞實は何てえんだか、尤もあの方がはじめて停車場へ着いて、此の店へ休んで、それから月ヶ岡まで行らつしやらうといふ時、おともをしたのは私でさ。そら、姐さんも知つてませう、先月の末だ、ねえ、阿母。」

「然うさ、晩方だッけ。」

「小形の革靴が一ツ、ハンケチに薬瓶を包んだのを持つて、其の手で涼傘をさして、慥うだによつて、」

娘は團扇を頬にあてたが、

「質素な鼠の縞明石の單衣を、あの素裸に着て、水淺葱に白で撫子を抜いた細と、茶の無地の細とを打合せた帯を、しんの無いお太鼓に薄く結んで、下じめが鶯茶に海松ふさを抜いた縮緬さ、一寸、よく知ッて居るだらう。」

八

文誓起

「何うも其の可かつたこと。そして上品に白足袋を穿いて、其の時は引詰めの銀杏返、根を短かうして飾ッ氣がなくなつて、矢張水色縮緬の蹴出だつたでせう。紅ッ氣ツたらこれツばかりも無いんだもの。停車場からぞろ／＼と出て来る、人ごみの中を抜けて、向うから内へおいでなすつた時は、一寸三十ぐらるに見えたらうぢやありませんか、ねえ、おツかさん。小造な品の良い高等な年増に見えたねえ。今夜なんざ、草双紙の繪に描いてある、此處らの船頭の姐御といふ風だけれど、何うして其の時は、どんな立派な處の令夫人かと思つた。」

「矢張御縁だよ、つい停車場前に四五軒も新店の茶店が出来て居りますに、まあ、よくおいで下



さいましたと云ふと、大勢人が居ますから、此方へお邪魔をしたんですツて、小さな聲で言ひなすつた。呼吸が切れて、どんな長旅をなすつたらうと思ふくらゐ、旅の疲か、それとも御病氣か、口紅だけは薄くさして在らつしやつた、其の色も白つちやけた面糞れ、目ぶちなんざ眞蒼で、晝間見てさへ宛然幽霊。

月ヶ岡まで直ぐに俵を世話して下さいとおつしやるから、はてな、此春から歸省つて在らつしやる新家の若旦那、數夫様は好男、久しく東京へ行つていらつしやつたから、こりや仔細あつて生靈でも來たのではあるまいか。影も薄し、第一、活きた身體で唯た一人、此處等まで來られさうもない御容子なり、また、お前、傍で見ても口をお利きなざるのを聞くと、漸々と二十そこいらだ。お嬢様、あなたお一人入らつしやいましたの、まあ眞個に、と呆れたよ。

それから、未だ日は高いが、延明寺からさきの五丁畷で、山の裾が暗くならう。停車場前の帳場に居る若い衆に、間違の無いことは知つて居るが、中でも、白地の手拭の結目が、顔より大い向う顛巻で、親仁のさき曳をして居た時分から氣心の知れて居る、お前を名ざして、呼びに遣つたといふものさ。

「そりや、阿母、私あ、何のお客様だつて、粗略にや思はねえけれど、いつも不愛想なお前さんが、わざ／＼此處ン處まで出て來て、氣をつけて上げてくれツて云ふし、向うの鎮守様の森を出

の手へ折曲る處で、見ると、未だ立つて見送つて居るだらう、こりや、昔阿母が浮氣をした時分のお主筋か、それともお茶代がうんと出たか、

「まさか。」

「筑どん、内ぢやお茶代でね、人様のお扱を違へるやうなことはしませんよ。」

彦次は唐突に、

「しかし借のあるものは違ひます。此の通り、人が棒立ちに立つて居ても、お掛けなさいともいつちやあくれねえ。」

お縫は一寸容子を極まつて、このところ假色で、

「勝手に其處へお掛けなねえ。」

「よう！ 正のもの、難有え。」と額をびツしやり。

「旨いだらう。」

「まあ、聞きねえ。何でもこりや大切なお方だと思ふから、乗せた私の氣の揉めること一通りおやねえ。大分病氣のやうだから、急いぢやあ、ぐらついて、身體に障るだらうと思つたし、然るかといつて西日が酷い。阿母、あの日は又恐しく暑かつたからね。よたく／＼曳きながら、何さ、此の入目を背にしちやあ堪るまいと、母衣はかけて置いたけれど、私あ、ハラ／＼してあぶら汗



が出た、さつきのやうな元氣に、よくまあ、おんななすつたと思ふ。」

母親は頷いて、

「大抵の方は白いのが日にやけるが、あの方は蒼ざめたのが白くなつたよ。矢張潮風が利くんだね。」

「阿母さん、他に利くものがあるんでさあね。」と娘は悟を開いたやうに言ふのであつた。

## 二十六夜

### 九

「いや、見通した、姐さん目が高い、私も薬の利目には驚いた。然も路傍の地藏様の前で、效能立處にあらはれましたからね。何の事はない、停車場前の、廣告にや、婦人一切の御薬として、月ヶ岡の若旦那の肖顔を出したいくらいなるもんだ。」

聞きねえ。

それからだ。いふ通りお大事なものに乗せて、よた曳きをや曳いてたけれど、餘り我ながら意氣地はねえ、延命寺手前の小橋なんぞ、些と合せ目がござつてゐるから、靜に曳くよりか一呼吸

に飛び越す方が無難だらう。

もし、些と急ぎませうか、おからだに障りやしませんかつて、聞くとね。何うぞ後生だから急いで下さい、知らない土地だから遠慮をして居たんですが、じれつたくつてくと、恚うぢやないか。

え、おい、何のこつた、これ、海軍役所の旦那が自轉車と、駈つこをするなあ、己ばかりと

いふ私だ。」

「自慢はよしてよ、ふむ、其處で薬は利いたのか。」

「聞きねえ、お縫さん、聞きねえ、阿母も聞きねえよ。」

「こんなに出張つて聞いているぢやないか。あの方たちの話だから、眠がりの私も目をこんなにして居るんだよ。お縫坊は素より夢中なり、御覽な、最う停車場の戸は閉まつたし、近所でも大概灯を曳いて、店を片附けたよ。」

「まツたくだ、いやに寂として風立つて居ら。氣は心で、これでも向うの氷店に、軒提灯の數でも殖しや、未だ夏の盛だに、唯さへ不景氣な處を、恚う又皆滅入つちやあ、土地の衰微だね。お客は何てつて来るんです。避暑だとか、海水浴だとかいふんぢやないか、尤も此處いら、田圃にや月中から赤蜻蛉が飛んでるからね、せめて停車場界限でも赫と陽氣にして居ないと、お客たち



は汽車の窓から顔を出して、覗く拍子に嘘をします。尤も八月の末にや末だがね、何の彼のつてこれで来月の半ばまでは、東京から入つて来ようといふのに、仕様がねえ、今夜はまた其の中でも、宵から寂しいや。串戯ぢやねえ、床屋なんぞ宵張の癖に、恐しく早寝をした。おや、いつも納涼臺で寝て居る洋燈屋の元親仁も、今夜に限つて出て居ねえ。」

「これ、聞えるよ、お前、今夜はね、二十六夜なのさ。九ツ時から早起をして、山だの、海だのへお拜りに行かうといふつもりで、早寝をしたのが大分あらあね。今年になつてはじめてだ、背戸まで秋が来たやうだけれど、まだなか／＼此様なこつちやありやしない。」

「お前方知らねえか、今夜二十六夜待てな、月ヶ岡の八幡様に、村の若い衆が催しの改良剣舞ちうがはだかるだ。そも／＼熊ヶ谷直實はアだの、杯手に持イ見渡せばアだの、はあ、種々ある中にも、新田の勝公と、西畠の源坊が、掛合の曾我兄弟討入といふが、コレ、芝居がかりだあ。」とのそ／＼と出て来たのは、框に寝そべつて居た、これは月ヶ岡あたりの作男にて候。大欠伸をして身體をかき／＼、

「先刻此處等さ使に來た次手に、穴市(賭博の名、風俗を亂すを以て細説は此處に省く)で、些とせしめてこましたで、焼酎をあふると、うと／＼したが、幸だあ、何の道、これ、夜明したと思ふで、今の中寝てこまそと、横になつたけれど、主たちが、別嬪の風説するで、現心に何のこと

はない、辨天様が夢枕に立たつしやるやうで、寝つかねえでの、ちつとんべい、其の血の道の藥ちうのを貰はうと思つて出て來ただ。さあ、語らつしやいまし、私も聞くべい。」と、口三枚あたりに又御新客お一人様。

十

「五丁噺を飛ぶが如しだ。瓦を焼く取着一軒家から、二軒三軒づゝ、ちらほら百姓家が見え出して、それから、それ、若い衆、お前達が、月ヶ岡の村へ入らあ。」

「然うだよ／＼。」

「路傍に地藏様があるだらう、路傍つたつて野中の濡佛ぢやないや、一體月ヶ岡邊にや一杯に咲いてるが、螢草がむら／＼と咲いた中に、四本柱に小さな屋根を葺いて据ゑてあるね。」

「はあ、ございやするて。」

「其處だよ、效能立處に顯れたといふのは。一二町手前から見えたがね、田舎にや珍しい、容子の可い書生さんが彼處に立つてると思つたつけ。」

其の筈だ、月ヶ岡の若旦那だと、私が目よりさきにお前、俥の上で別嬪、何今阿母のいつた、其ん時は生靈だ、敷夫さん!と云つたらうではないか。蹴込を踏みなすつたわけでもないが、何



だか恐しく氣合が入つて、上から押伏せられるやうだ、私あ釘づけに楯棒を留めたのさね、然うすると書生さんも、つかくと寄つて来て、何とも謂へない顔をして、お縫さん其の顔が薬になる、そして、お、お前ツて、其處で名を呼んだんだけれど、私は茫乎して居たから、つい聞損なつたんだ。村方の若い衆、お前居まはりだから聞いて知つちや居ねえのか、あの新家に来て居なさる別嬪よ、それ今、お前の夢枕に立つたんだ。」

「知らねえでよ。」

「何ていふの。」とお縫は發奮む。

彦次は片頬笑をして、

「お縫さん同一名だらう。」

「黙つておいでよ。」

「おしづ、さんだあ。」

「何。」

「お静さんちうだあよ。」

「張合がねえこと夥しい、お静さんちや普通の名だ。そして此の人のいふんちや、お静さん忠太夫と聞える。」と彦次め、又笑ふ。

「これ、駄目いふもんでねえ。何も別嬪だつて、何んだつて、今時の名によ、小野小町とも、ハア衣通姫ともつけられねえぢやあんめえかね。それとも威勢がなうて、悪かんべいなら、勝公と源坊が改良劍舞で名告るやうに、ひやあ、遠からむものア竹法螺の音にも聞かう、近からば根際い寄つて、墓の目にも見さい。曾我の十郎祐成、同じく弟五郎時致、藤原鎌足朝臣お静の方とでもいつて聞かせるだつてか、喃。」

「澤山よ。」

「は、は、そりや然うと、お縫坊も身を入れて聞いて居るが、お前、話といふのは其だけかね。」  
「ぢや、何だ唯、其のお静さんと若旦那が路傍で出逢したといふだけの事だい、べらぼうめ、前置が豪いから、何事がはじまるかと思つたら、何の事だい、宛然徳利の底をゆすいで飲むやうな氣もない話だ。恚う、それよりか、私が方にや、新家のお静さん大世話場といふ、」

「待ちねえ、まあ、黙つて聞きねえ、筑松だつて其の位な事は知つてらひ。枝のない田圃道だ、唯出ツくはした位なら、何にもお座料は頂きません、私なんざ出くはしつけてら、時々おふくろの口から、親仁の遺言に出ツくはさうといふお兄い様だ、話はこれからだ。」

尤も日が経つたから、些と間は伸びたがね、其の時直ぐに引返して、御注進と駈けつけて見ねえ、停車場の木戸を打つて、賣切れ申し候といふ、札を出す處だつた。生靈を乗せた所爲か、何



も、あゝ、凄（こ）いほど美しいと思（おも）つて悚然（ぞつ）としたから病（や）みついたのでもあるまいけれど、日が暮（く）れて、其（そ）の時（とき）月（つき）ヶ岡（おか）から歸（か）り路（みち）、寒（さむ）気がしたのがぶりつきで、つひぞない瘧（おた）で居（ゐ）たもんだから、今夜（こんや）はじめてお目（め）にかゝるやうなわけだけれど、月（つき）ヶ岡（おか）の老（としより）人（ひとり）二人（ふたり）ね、海（かい）軍（ぐん）役（やく）所（じよ）の旦（だん）的（てき）、其（そ）の奥（おく）さんね、これへ今（いま）の兩（りやう）名（めい）で、一（ひと）幕（まく）御（ご）覽（らん）に入（い）れますだ、チヨン〜、と筑（ちく）松（まつ）口（くち）拍（ひやう）子（し）。

### 住居之段

#### 十一

「東西（とうざい）！東西（とうざい）！えゝ、秋（あき）草（くさ）山（やま）の月（つき）ヶ岡（おか）住（す）居（ぎ）之（の）段（だん）、役（やく）者（じや）役（やく）割（わり）、東（とう）西（さい）！村（むら）の若（わか）い衆（しゆ）、彼（あそこ）處（こ）の内（うち）は姓（せい）は何（なに）といふね。」

「月（つき）ヶ岡（おか）の草（くさ）分（わけ）だあから、矢（や）張（はり）、其（そ）の月（つき）ヶ岡（おか）だあよ。」

「おつと可（よ）しか、一（ひと）つ、若（わか）旦（だん）那（な）、月（つき）ヶ岡（おか）數（かず）夫（ふ）、一（ひと）つ、お嬢（ぢやう）様（さま）お靜（しづ）を、かしのな、娘（むすめ）も變（へん）だ、一（いつ）體（たい）私（わし）は素（す）人（ひと）ぢやあるまいと思（おも）ふが、何（なに）も褌（つま）を取（と）つて居（ゐ）るわけぢやない、女（によう）房（ぼう）お靜（しづ）も些（ち）と色（いろ）氣（け）がねえ、慍（か）うと、まゝよ、立（た）女（によう）形（かた）として置（お）け、東（とう）西（さい）！」

一、若（わか）旦（だん）那（な） 月（つき）ヶ岡（おか）數（かず）夫（ふ）

一、いゝをんな お靜（しづ）

一、數（かず）夫（ふ）の父（ちち） 正（しやう）左（さ）衛（ゑい）門（もん）

一、おなじく 數（かず）夫（ふ）の母（はは）

一、海（かい）軍（ぐん）役（やく）人（にん） 駒（こま）田（だ）保（ぼ）

これが敵（かたき）役（やく）で、あとがお待（まち）かねの勇（いさ）みだ。

一、停（てい）車（しや）場（ば）車（しや）夫（ふ） 筑（ちく）松（まつ）

最（も）う一枚（まい）女（によう）形（かた）が入（い）用（よう）だけれど、名（な）が分（わか）らない。駒（こま）田（だ）さん（の）彼（あ）の派（は）手（て）造（ぞう）の奥（おく）さんだ。」といひかけ

て筑（ちく）松（まつ）は調（てう）子（し）を張（は）り、

「相（あ）勤（きん）めまするは竹（たけ）本（もと）筑（ちく）松（まつ）。」

「筑（ちく）松（まつ）さん、役（やく）者（じや）に竹（たけ）本（もと）はをかしいねえ。」

「ぢやあ澤（さは）村（むら）筑（ちく）松（まつ）。」

「ひやあ！こつれ、遠（とほ）からん者（もの）は竹（たけ）法（は）螺（ら）の音（ね）にも聞（き）け、近（ちか）からば寄（よ）つて墓（ふき）の目（め）にも見（み）さい、曾（そ）我（が）の十（じゆ）郎（らう）澤（さは）村（むら）の筑（ちく）松（まつ）だあよ、はあ、おもしれえ〜。」と作（さく）男（をとこ）は上（じやう）機（げん）嫌（けん）。

「さて、幕（まく）が明（あ）くと、今（いま）いつた名（な）のり合（あ）ひ、別（べつ）嬪（びん）はすぐに車（くるま）から飛（と）り下（くだ）りたり、まあ！とばかりで  
お前（まへ）。



私アね、こりや二人で抱きつくだらうときよツとした。何其處は綺麗なもんさ。しばらく、といふと向うでも、しばらく、ツたツ切。

しばらく、顔を見合せて、しばらく黙で、しばらくよ。

薬は何も、茶碗について、頂いて飲むとは限らねえと見えて、然うやつてる内に、ぱツと慥う、血の色がさして、活返つたやうに元氣づいたがね。

數夫さん、内は何處なのツて、尋ねると、直其處だ、といつて、直ぐに彼のだらくのぼりの小高い處に別荘造りの新しいのと、茅葺の古い家と二軒、日あたりの稻田を前にして、背後へ秋草山の蔭を背負つたのが見えます。

其をね、慥う指をしながら、お坊ちゃん、何處かで道草をした歸途と見えて、萩の枝を二三本、右方の手に持つて、居なすつた。可い姿だつたけれど、暮方の所爲か、又あの邊は此處等町方より十日ばかり秋が疾いから、何だか、もの寂しさうな風が、私の目にも見えた位さ。

姐さんは、涼傘を杖にせい／＼呼吸を切りながら、自分の事は言はねえで、何かなすつたのツて、また尋ねるとね。

内は大變なんだ、私は困つちまふツて、若旦那大ふさぎ。

は、あ、世間が許さぬといふわけで、親御達の手前、慥うやつて、遙々尋ねて來た者を内へ入

れる次第にや行かないと言ふ事だらう。いや、こりや何うも然うありさうな事だと、一からのみ込んだが、大違ひ。

それ、今いつた別荘づくりの新家と最う一軒の母家の方ね、彼處を、ほら、自轉車の且的だ、海軍役所へ通ふ駒田さんが借りてるだらう。相勤めするは矢張私だけれど、こりや敵役だ。

奥さんと女中を一人使つて、たしか三人ぐらしだつたね、おう、若衆。

「はあ、然うでがす。華族様に親類があるとやらで、えら、頭の高え奥様だあ。其の癖、おしやらくのウ見るやうに、白粉をべつたりの、びらしやらと赤い禪よう引するだアね。」

筑松は膝を打つて、

「む、其よ、相勤めする役者、矢張澤村筑松だ。」

## 十二

「話の様子では、何でも其の、白粉の花見たやうな、奥さんが、新家の數夫さんに氣があるんだね。何、こりや其の時、數夫さんが自分の口から言つたこつちやないけれど、何でも行がかりが其に違ひねえ。」

「違えねえ、違えねえよ。私は彼處へも商に行くが、腰つきから、物のいつぶり、第一あの、色



白で油づいて、額のてらくとする處が合點しねえ、不義をする人相だ。怪しからんことさ。又無理もねえよ、彼の、髯むくぢやらとお坊ちやんを、隣同士に見較べた日にや、一方はお月様の中で、杵を持つて立つて居ようといふ姿だし、一人は牛部屋と合借家で、魚の腸を搔き廻さうといふ風だ。近い處がお縫さんの目が曇らぬ鏡よ。ねえ、姐え、お前さんだッて不義をするだらう。牛を馬に乗り換へるといふが、豚と兎を取かへる一件だが、何うだね。」

「些と母様の前では御挨拶をいたしかねます。」とお縫は澄ます。

さすがに母親が、

「馬鹿なことおひでない。」

「待ちねえ、申戯ぢやあねえ、なるほどお前、それぢや鯉が泳ぎ出す夢を見兼ねねえ。恐しく氣が疾いな、誰もくツついたとも何とも言やあしない、唯氣があるんだといふだけのことさ。」

其處でソレ隣だから、何の彼のと世話をや、且的が又勤人で、一日留守にするといふもんだから、奥方は其の緋縮緬をお引きずりで、庭づたひに、數夫さん、數夫さんとやる一件だ。

机に向つて縁側へ、くの字なりの厭味たつぷり、手風琴で、アイ、ラブ、ユウさ。此方が其の氣更になしで、オーライと來ねえもんだから、先づ年よりを手なづける氣で、お惣菜が出來ましたからと、それね、あぶらの浮いた鴨焼などを御持參で、駒田が留守で寂しいんですから、此

方で御一所に、なぞといふ寸法。

其の晩も、些とお飯には疾いが、お爺さん、お婆さん、こんなものを拵へましたから、御一所に食べたうございますね、お年よりが胡瓜揉なんぞ毒ですよ、此の鶏卵焼を、

「筑さん、大層委しいぢやないか。」

「まあさ、其處らだらうてことさ、鶏卵焼なんぞ拵へさうな對手だからよ。」

「うむ、拵へる、鶏卵焼もな、恠う捻パンの形にして、菜ツ葉と肉をこま切に交ぜた奴よ、屹と拵へる、私なんぞ魚を持つて行くと、フライにする、フライにするツてな、あくる日は屹と、昨日の魚はフライにしたが、不味かつた〜と恠うよ。恠う旨いも不味いもあつたもんぢやねえ。

フライ、と言ふのはな、體の可い天麩羅だぜ。申戯ぢやねえ、得てフライがる奴に魚の味の分るのは少いぜ、フライ〜フライ！水變じて墨となる、十錢銀貨焼棄の掛聲が呆れらあ、此間、些とごみに酔つた、溜の鮎を持つて行つた、安いもの好の新しいものすき、鮎はお前、其こそ活きてるから、御臺所御機嫌斜ならず、フライにするつさ。あくる日行つて如何でございましたッて聞くと、新しいから旨いつてよ。今度一番、鱈をお目にかけて、其の時は後學のために、お手許拜見とやつて御馳走になつて見ようと思ふ、鱈の天麩羅さ。」

「如何なこつても、ほゝ、ほゝ。」



「は、は、は、まあそんなものよ。處で、」  
「何うしたの。」

「ト先づ取入つて、年寄たちと取膳で、晩の御飯を食へてる處へ、旦那様お歸だ。處かね、御自慢の自轉車だから、横づけにしても音がしまい。」

髻の方ぢや、いくらか氣振を覺つて、其の下心があつたものか、戸外から様子を見て、突然躍込んだと言ふ寸法らしいや。數夫さんの話も、そんな風だし、私が聞いても然う思つた。」

十三

「夏のことなり開放し、逃げるも引くもあらばこそ、お茶をかけて持つてた處を、突然引摺倒しでもしたさうで、茶碗が一つ引くりかへつて、數夫さんが見なすつた時は、其處等お飯だらけ、此方はソレ數夫さん數夫さんが堪らないから、向うの池子山へ上つて、ぶらくして、晩方内へ歸つて來なると、恐しい高聲。」

隣家の主人の聲だから、見えないやうにして、密と出格子から覗いたんだとさ。

先方は血眼だ、腕まくりで真中に打すわりの、ヤイふんぞりめ、おのれ、主人の歸る時分時も構はないで、此の狀は何だ、其分に置く奴でない、覺悟しろッさ。

奥方は俯向になつて、ゆすり泣をして居ると、年寄は平あやまり、お婆さんなんぞ、おろ／＼立場を失つて居るといふ始末。これはと思つて飛込まうとしなざる時、姦婦！ さあ數夫の青一才は何處へ逃げた、出せ。二人ともふん縛つて煙硝の匂を嗅がせて遣ると、泡をふいてら、

「亂暴だ。」

「ひやあ、これ那樣騒があつたかね、えれいこつた。」

「まあ、聞きねえ、だもんだから、何、まさか面と向つちや、男と男、いくら暴れたツて指一本さしはしまいと、思ひなすつたさうだけれど、事が面倒だから入るには入られず、然うかと言つて立迷つて居るのを先方が見附ければ跋が悪し、引返して、其の地藏様の前の處まで來なすつたんださうさ。外聞が悪くツて近所の百姓家へ中裁も頼まれず、年寄に氣を揉ませるのも不孝なりと、弱つて居なすつた處だ、——とかいつまんで、お話だ。……」

成程それか、大聲が聞えらあ。いや、一通りならず吼り立つて居たと見える。

でね、丁度可い處へ來てくれた。お前一ツ工夫はないか、私も實は弱つたツて、意氣地がねえと云やそれまでだけれど、内氣な方だ、お氣の毒な、大に打てて居なさらあ。

姐さんがね。

(あの、其の御夫婦は、いつも仲が悪いですか)と落着いて聞く奴さ。



且的はアノ柄で月琴を弾くとね、時々手風琴と合せるさうだが、眞實か。」  
「やるでがす、はあ旨いもんだ、此の節ぢや、村ではやる改良劍舞の、滑稽唄を覚えて、コラサノサ、ドッコイサなあんてね、聞かせるでがすよ。」  
「其だ。」

數夫さんが、いつも合奏ものなんぞをして、仲が可いんだと、話すとね。

(大方然うでせう、お髻さんが、ヤツかんで、心にもないことをいつて怒るんでせうから、人の見る前で打つたツて叩いたツて、引摺つてでも内さへ歸つて行きや、何でもないんです、打棄つてお置きなさい、靜まるまで此處で一服しようぢやありませんか、若い衆さん、あの、早附木を持つちや居ませんか。)

「怨う私にいふんできさ。」

數夫さんがね、

(飛んでもない、然う悠々して居られるもんか、頼むから、老人の身にもなつて御覽、)と、型なした。(然うねえ、お爺さんやお婆さんが氣をお揉みなすつちやお可哀相だ、眞個にあなたはこんな事にかけると仕様がなないよ。  
私も先のやうぢやないんです、餘所の人と口を利くと、最う打倒れさうに頭痛がするんだだけ

ど、何うにかして上げませう、)ツて。

全く、それ、日向を私が危険がつた位に寝れて居るんだからね、これで何うしてと思ふのに、些とも騒がないで、つむりが重さう。涼傘をつきながら、片手に藥瓶を持つたま、徐々さきへ立つて、彼處をたらくと上つて行くと、數夫さんが其のうしろへ。——私は見たさも見たし、俵を曳寄せて置いて、革靴を持つて、おともさね。」

十四

「そこで新家の門口だ。お婆さんは跣足で土間に立つて、曲つた腰も据らねえで、お前、手を上げて宙を拜むやうにして抑へて居るとね。

(退け! 蹴飛ばすぞ、こら、己の妻を己が連れて歸るに、何を留める、其とも何か、不義でも汝が兒が可愛いんで、惚れた此奴まで可愛いなら、待て、今、處置をしたあとの、體だけ返して遣る。)ツて、隊長、奥方の手を鷲掴みにして、土間へしよ引き出さうとして居る處よ。奥方は、身體半分脊脱の上へ宙に釣られて、大圓鬚の根が、引摺めえられた手の肩も抜けさうな腕の處へ、がツくり怨う潰れてな、眞蒼になつて顔をしかめてよ、取亂した體で、疊のへりを、足でばたばたとやつて、柱にしがみついて居た處だ。何の事はねえ其の白粉の花を、根こぎにして引摺つた



といふ形。

お爺さんは火鉢の處に投首をして、蹲まつて居なすつたツけが、見兼ねてよろ／＼と出て、(まあ、旦那様)と、皺だらけな手をぶる／＼震はしながら、袖へ縫んなすつたのを、ものをもいはねえで、向うへ突飛ばしたから、尻餅だ。(駒田さん亂暴です)ツて、數夫さんがすつと土間へ入ると、(何を)……と睨みつけた。

髯の顔色、拳を握んだ、あの手で胸板を突かれた日にや、一たまりもあるめえと、此處で何よ、澤村筑松本役よ。

「何うした、若旦那の加勢をして、髯の足へでも喰ひついたか。」

「いんえ。」

「目潰しの泥でもハア打かけたんべい。」

「いんえ。」

「筑さん何うしたの。」

「私あサソクだ、倒れて怪我をなさると悪いと思つたからね、土間を入つた右ツ手に、一寸下駄でも入れて置かうといふ、半間の物置があるがね、其のお前、開戸の立てつけが悪いと見えて、澤庵石が壁へに置いてあつたから、突然片手で引摺んで、ボンと木戸の外へ抛り出した。」

「成程本役だ。」

筑松も打笑ひ、

「其處へ姐さんが入んなすつた。」

(何をなさるのよ)ツて、其ン時、掴み付きさうだつた髯の前へ、數夫さんを背後へ庇つて、靜に立つたと思ひねえ。

あまり目覺しい美しさに、且的はきよとんとし、しばらく黙つて居たツけがね。何だ、き様ツて云ひながら、大の字形にはだかつて居たのが、棒立になつて了つたあ。

(まあ、お放しなさいよ、酷いわねえ)と、澄まして、奴が奥方を引摺んだ手を持添へて、拵放すと、……へむ、放します。

(お初に、私は彼の數夫さんの女房でございます)といひながら、藥瓶の包を落すやうに疊に置いて、ぱつたり上框へ腰を落して、こゝで切なさうに呼吸をつくくと、また顔の色が悪くなつた。

それでも、ひらりと茶の間へ上つて、(お父さんお危うございますよ)ツて、お爺さんの傍へ坐つたと思ひねえよ。

奥方は放されて身體を横に、其のまゝべた／＼と摺り退いて、鬘をがツくりと遣つたまゝ、くひしばつて、しく／＼泣。



お婆さんは二人が入つたのを見ると、身をかはして戶外へ出て、木戸につかまつて呆れ顔を  
して、内の様子を覗いて居なさら。

其の背後境の垣根越に、駒田の下婢どんが、うろくして居るといふ次第だ。

姐さんがね、袖を返して袂中から、紅い小さな珠で留めて、細打の紐にわがねて持つてた手  
拭を出して、立つて框から、突立つた髻に身を寄せながら、

(アイ、お母さんのお御足を。)といふと、敷夫さんが受取つて、砂を拂つてあげる奴さ。

私もぐつと氣を利かして、へい、お穿きなさいで以つて、今脱いだ姐さんの簾表の後齒といふ  
のを、敷居際でお婆さんの足許へ揃へましたね。

彦次、やい、手前なんぞ、氣が付くめえ、不斷心がけがあると違つたもんだ、阿母、私あ此の  
通り孝行だぜ。」

十五

「さて、一同舞臺正面を横に見て、姐さんを輪形に取巻いた、こゝで髻の口からいざいざの澤山、  
いや、いふも可煩え、不義一件の混雑だ。

姐さんがお前、呼吸苦しうに笑つてな。

(もし、敷夫さんにや、こんな佳い女房があるんですから、人様のものなんか、意地汚なはいた  
しません、御心配遊ばすことはないんです。)サ、何うだ、聞えた理窟だらう。

此方あ虎髻をむすくさして、(き様、女房だ、女房だといふが、些と亭主に氣を注げる、見て  
居ない留守の事が分るもんか。)と遣るとね。

(三年一所に居ないたつて、大丈夫、浮氣をするかしないか見極めない位なら、はじめから良人  
にはしません。)ツさ。

此奴、耳が痛からうぢやねえか。

(其も私が見ても氣が揉めるやうな方なら知らず、よく良人の氣を知つて居ますが、此の奥さん  
のやうな柄の方は、嫌なんです。第一あなた、御自分の持ちものだから、人が取らうかなんて自  
惚れて在らつしやるけれど、掏摸が見たつても、欲しがるほどの玉ぢやないわ。)ツて然う云つて  
ね、仰向いて目を瞑つて罌の口から薬を一口。

此時は且よりか、奥方の、じろりと見た目が、恐しく凄かつた。

すツくり立つと、踏みしだいて、前へのめらうとした裾を蹴て、ばらくと土間へ下りて、(私  
はもう、)と金切聲。

(こら！ 何うするか汝、何處へ行くかツ。)といふのを機かけに、髻もどかくと出て、追ひか



「はてな。」  
彦次はしばらく考へ、  
作男も眞面目になる。

「はあ、何にもそんなえな氣ぶりはねえね、混雑は藪ん中へ伏せたと見えて、誰も村の者は知んねえですが、大方何だんべい、仲なほりが出来たんべい。昨日も一昨日も相かはらず、隣同士行交をして居なさるだ、先の中よりか、却つて何よ、旦那の方が役所から歸ると、月ヶ岡の内へ遊びに行くやうだがね、雨降つて地イ固るだ。ものの、字が分りさうな人は彼ん達二人だ、仲好くしなざるが可いですが。」

て、私も蔭ながら嬉しいや。

しかし誰も自分が悪いと思ふものは無えから、長い間の事だ、駒田の徒に怨まれなさらねえけりや可いが、役人風を吹かして、町から村へ一杯の肩幅だからね、些と面倒よ。若い衆さん、何ぞ、いざごさのあるやうな様子はねえか。」

「はあ、何にもそんなえな氣ぶりはねえね、混雑は藪ん中へ伏せたと見えて、誰も村の者は知んねえですが、大方何だんべい、仲なほりが出来たんべい。昨日も一昨日も相かはらず、隣同士行交をして居なさるだ、先の中よりか、却つて何よ、旦那の方が役所から歸ると、月ヶ岡の内へ遊びに行くやうだがね、雨降つて地イ固るだ。ものの、字が分りさうな人は彼ん達二人だ、仲好くしなざるが可いですが。」

「さては振られたな。」

「若い衆、お前の情郎ぢやねえか、それだと黙つちや居られねえ處だ。」

「なにハア、可い氣味でがさ。」

「おや〜氣の毒な。」  
わつと喚いて泣く處を、馬鹿ツてえと、髯が、やり場を失つた握拳で突飛ばしたもんだから、いや可哀相に、どツしりと轉つた。」

けたがね、沼田の沼へでも駈け出すかと思ふと、自分の内へ飛込んだんぞ。詰らないのは垣根に立つて居た下婢どんで、(畜生、何を見て居やがるんだい。)ツて、奥方が痾癩紛れ、駈出しざまに平手で一ツ、びツしやりと啖はしたらう。



「些と、しかし考へもんだぜ、今の話の様子だと、なかで第一詰らないのは駒田の奥さん、其の白粉の花だ。」

數夫さんには振つけられる、痛い思ひはする、其の上道ならねえこつてもお前、惚れた男の前で、小酷く恥を搔かされちや、條違ひでも怨まずには居られまい。

男と男は薩張して、解ける時は解けるものの、女同士ぢや然うは行かねえ。

道理こそ、駒田の奥さんは、新家の姐さんに變な素振をすらあ。」

「どんな風だ、お前見たか。」

「見た、其が何だ、先刻彼の御祝儀が出た一件の時よ。」

一昨々日の晩だつけな、今年はよく降るが、夏へ入つても一番といふ大雨だつたのは。然うか、然うすると一昨日の朝だ。あの、恐しい雨は、お前、降つて降つて降り抜いて、あけ方三時頃にはからりと星空になつた。風は好し、一地引、上つたのが、丸鯨よ。澤山はなかつたが、ざつ

と濱近を廻つて、直ぐに月ヶ岡まで伸したもんだ。

大降でお前、皆な洗ひ浚ひ泥を流したもんだから、何時も泣かせられる五丁巖なんぞ、ヒヤヒヤ可い心持で一ツ飛。

新家へ行くと、若い人達が閉め忘れたと見えて、木戸は八文字に内の方へ開いて居ら。

格子戸は錠が下りて居た、まだ、疾いんだからな、靄が一面、庭にや朝顔がしつとりと咲いて居た。竹垣の圍内だけは新しく地ならしをしたと見えて、其の瑠璃色の花ばかり、草一ツ葉生えちや居ねえけれど、ぐるりと取まはして山の名だけに秋草が一面だ、綺麗ツたらないぜ。

魚屋でございと、二聲ばかり呼んだが返事がねえや。其處で何の氣なしに、雨戸の隙間から覗いて見た。」

「馬鹿、覗いたか。」と筑松穩ならぬ顔をする。

「可いぢやあねえか、生物を商ふだ、何時までも立つちや居られねえ、と先づ汝を極めつけて置いてよ。」

實は心配でならなかつた、それ、此の町は龍宮へ降り埋められるかと思ふほどの雨だつたらう。此方人等さへ戸外へ出て、星を見た時は嬉しかった、路で濡佛の顔を拜んでも、いや、御無事でと言ひたかつたわ。



隣はあるたつて、一軒家同様。殊にな、夏場海水浴のお客を目あてに、そら強盗ものが横行するだ、ちらく／＼方々で物騒な話を聞いている矢先だから。  
と片目をつぶると中が見えたが、戸外は靄で、座敷は未だ眞ッ暗だ。  
すると蚊帳が二張。

しをらしいぢやねえか、ちらく／＼と未だ光が残つて、蚊帳の裾だの鴨居の邊りに見えたのは螢だ、どしや降を凌ぎかねて立てこんだもんだらう。

けれども、其の時はそれも気がかりだ、構はずドン／＼と叩くとな、はいと返事をしたのが別嬪だ。

威勢よく、魚屋でございと呼ぶと、今明けますよつて、しばらくして、蚊帳をからんで、ト膝をついて、それから茶の間を通つて、土間へ下りて、急いで戸を開けて出なすつたがね。

腫ぼつたい目で、お早うツさ、銀杏返がばさ／＼して、お前、何だらうぢやねえか、寝亂れ姿と言ふんだらうぢやないか。」

筑松は娘を見返り、

「姐さん、餘り身を入れて聞きツこなし。」

「大丈夫、繻子の帯をキチンとしめて居ましたぜ。」

お縫が、

「當前さ。」

十七

彦次はかぶりを振つて、

「處がお隣のは然うでねえ。丁度、其のトタンに木戸の處を通つたがね、縁側の戸が一枚開いて居たから、すつと朝晴れに一運動といふ氣取だらう、白粉よれのした、襟のくねつた、寝衣の浴衣に桃色の扱帯をだらりと結んで、大髻の束髪だ。」

「彦さん、束髪に大髻はをかしいねえ。」

母親も口を入れ、

「それぢや毛の薄い私のなんざ、チョン鬘の鬘と言はなけりやならないなう。」

「大きに、いや、それでは大づかみの束髪か、何うも娼妓のやうな其の風ツたら無かつたぜ、然もお前、大儀さうに棲さを蹴つて歩行だ。」

お早うツて、別嬪が如才なく聲をかけたがね、黙つて居ら。

再度、もし、奥さんお早うございませすツさ。



なるほど表向仲直りはしたらうよ、腹藏のねえ挨拶振だア、其を何と、あいとも云はず、振向  
きもしねえで、しよた〜、兩戸の中へお引込み。

およしなさい、お早うも何もあつたもんぢやねえツて、私はね、姐さんに低聲で然ういつた。  
胸氣ぢやあねえか、何ぼ、頭が高いたツて、何さ、彼の奥さんのは頭が高いいぢやねえ、鬻が大  
いんだい、處置ぶりが氣にくはねえ。

先刻のは此時の話だ、鯨はいくらだと聞きなされる。

阿母の前だがね、私は人を見て掛値なんざ云ひません。

「分つたよ〜。」

「十で十五錢頂きますツたら、高いツてよ、さあ、此處で一ツ假色だ、頼むよ。」

「遣るべいかね、ひやあ、これ！ 遠からんものは竹法螺の音にも聞け、近からば寄つて墓の  
目にも見さい。」

「曾我のぢやねえ、鯨の値をつける處だ、お縫さん一ツやんねえな。」

娘は袂先を括枕のやうな兩膝に挟んで、蹲んだま、團扇を半面にかざして、仰向く姿勢で、

「些とお負けなねえ。」

喝采々々。

「此の子は。」と母親苦笑ひ。

「何しろ十五ばかりおくんな、といふから、蓋を引くりかへして一、一、一、一、一、其奴を持つてい  
そいそ臺所へ入んなすつたツけ。

火鉢の引出をがた〜とね、蓋と一所に持つて出て、アイお代。

見るとそら小銀貨が一ツだらう。十で十五錢、可しかね、掛値のねえ處をお前、十五で、十  
錢は酷からう。

もし、是は、と云ふと、(可いよ、おまけな。)とおいでなすつた、こりや酷い、といふ内に、す  
ツたすツた入つちまひなされるから、嬢さん、不可ませんと、私も土間まで入ると、遁げるやうに  
して、臺所の前で、背向きに坐つちまつて、(澤山よ。)とある御意だと思へ。

其の肩を揺ぶつて、拗ねたといふ工合なんてものはなかつた。まるでお姫様だから下郎、ね  
え、ねえ、としりごみだ。

言を返すも恐れ多いやうな氣がして、意氣地はねえ、其のま、引返したが、隣家へは、癩だ  
から聲を懸けず。

田圃路へか、つても、をかしいやうな、擦つたいやうな、馬鹿々々しいやうな、然うかと思ふ  
と嬉しいやうな、難有いやうな、變な心持がして、獨りでにニヤリ〜、何時か足取も遅くなつ







にねえだよ。」

「そんなら可いが、申戯はよして不用心よ。餘計なお世話だが、ねえ、姐え。」

「知らないよ。」

「それから升で遣りながら、鱈を十五の話をするよ、お爺さんは大笑ひ、お婆さんまでがほくほくもので、可愛い娘ぢや、お前さんには氣の毒だツて足りず前を、賣溜の中からばら錢で出しなさら。飛んでもねえ、不足を言つたんぢや夢さらねえんで、實に世帯氣が出なすつて、おめでたい事ですと、平にあやまると、此方も祝の氣で進ぜるツてな、去年、田地田畑を賣ンなすつたが、何うして未だ御大氣なもんだ、其の足りずまへを下すつた上に、焼酎一合先方さまで御馳走よ。」

筑松はづいと立つて、背後から一ツ魚屋の背中を撲はし、

「可い加減にしねえか、それぢや代濟だものを、然も御馳走になつた上に、先刻の御祝儀は何うだ、三重取にせしめてやあがる、太え奴！」

「酷いことねえ。」

彦次は落着き拂ひ、

「其處は私だ、唯取にするもんか。ちやんと心得があるんだい。先づ、御祝儀とあるから、仔細は言はねえで、難有く頂いたと、魚は總了ひとなつたから、今夜一番、八幡様まで、見物に出か

けるといふ胸算だ。

處で、新家は路だから、行きがけに寄るつもりよ。其處で見ねえ、向うの土間に梨と一所に馬に積んで持つた來た、本場の南瓜が、お膝送りといふ身で、いかいことおはします。

數夫さんが、梨を袂へ入た時、姐さんが、南瓜も買つて行きませうツて、そんなに持てるものかと、叱られたのを御存じだらう。」

十九

「彦さんが氣前を見せて、お土産に持つて行くだ。萬事此の通り氣がつく男だからね、何うも世帯が持てません。一言もあるめえ。」

と鷹揚にすらりと一同の顔を睨めまはし、北叟笑をして得意顔。

お縫が、

「だつて月ヶ岡邊にはいくらも可いのがありさうなもんだね、お饅頭にでもすると可いよ。」

「いんね、魚屋さんの思ひつきが可かんべいよ。村方にや、いくらもあるだし、第一正左衛門様の畑に出來ただ。すつかり田畑を賣りなすつたで、去年の今年でがす、近處から、おすそ分けしたうても、何かハア面あてがましいで持つていく次第にならねえだ。又向う様でも賣つてくンる



とは言ひ悪かんべい、其だで、丁ど可いでがすよ。」  
「ソレ見ねえ、お誂へ通りに行かあ、さあ、然う事が極つたら、徐々出掛けるとするだ、時にも  
何時だらう。」

母親が踵をめぐらし、雇女が凭り掛つて睡つて居る、柱時計を及腰に視めたが、  
「まだ十時打つたばかりさ。」

「夜が長くなつたこと。」お縫も立つ。

「丁度可からう。」

と彦次は仰つけに反るやうにして、顔を出したが、軒下から空を見ると、

「お、曇つた、眞白になつたぜ。」

「お星さまが餘りキラ／＼なさると思つた、降りか不知、」

「大したことはなからうが、どツと來りや素裸だ。」

「私も同士に行きますべい。」

「それぢや阿母、南瓜を。」

筑松唐突に横合から、

「幾つだ。」

「え、」

「唯つた一ツか。」

「……………二ツよ。」

「彦さん、三ツにおし、然うすると一錢まけて上るから、丁ど御祝儀だけ、帳面づらが可いよ。」  
と娘が人の悪いこと。

「何よ、そりやな、何よ、私だつて天秤を擔いで行くんぢやなし、然うは持てねえ。」

「手傳つて下げて遣るだあよ。」

ぐツとも云はず、天窓を撫でた。

「思ひ切つて然んなら然うか、結へて下げるやうにして呉んねえよ。」

「こうれ、然う兩手では草臥れるで、お前さあ一ツ持たつせえ、私が二ツ持つてやるべい。」

唯見る沙悟淨の髑髏にあらず、神女の瓔珞にあらず、狂人の笹にあらず、南瓜を結んで振分け  
にした繩からげの眞中へ、鼻毛の長い顔を出した。

「いよ、どツこいしよと、恚うするだ。」

「似合つた、似合つた。」

「はあ、似合つたツべい、一番此の思ひつきで、八幡様で踊るかい、あら、どツコイサノサ、ド



ツコイサ。」

作男は腰を捻つて、ひよいと、チン／＼の手つきをする。喝采々々。

すぐ其の腰を左右に振つて、トントン／＼と出て、一足退ると、ぱつさり、両手を柳に流して、

「チヨツクラチヨイト、あら、ドツコイサノサードツコイサ、」と踊る。

ウタ／＼朝に咲き、夕にしをる、朝顔さへも、思ひ／＼の色を持つ。

「思ひ／＼のネ、思ひ／＼の、ちよつくらちよいと色を持つ……はア今晚は、」と摺違つて暗を行く。

五丁駈を、半ば月ヶ岡の方に越した處で、

「誰？ 敷さん。」

停車場前から歸りがけ、二人ならんで、お静が手に、鯉の鰓灰赤う、提灯を提げたのは敷夫である。

二十

「近村の者だらう。」

「ぢや、大方、八幡様へ行くんでせう、知つてる人でないのに可笑いよ。」

「此處りでは路で行違ふと夜なんざなほのこと、皆聲をかけるんだよ、此方でも挨拶をして遣らないと、澄ましてるとか、權高だとか言ふんです。お前なんざ婦人だから餘計に氣をつけて、はい、今晚は、位なことを云つて置かないと憎まれます。」

「アイ。」といつて傍目も觸らず、裳はら／＼見えがくれ、蹴出の水色涼しさう、提灯のあかりに搦んで、ほの／＼とある一條路。山と山とが葦のやうに海濱へ擴がつて、月ヶ岡の方に狭くなる、左右は稻田、前後に人も見えず、前途に茫乎と亘んだは、村の取着なる瓦を焼く大竈で、黒い坊主が坐つた形。

「大分足早になつた、恐いのかい。」

フト砂道で、音のせぬ下駄を留め、

「敷さん、提灯と取かへて下さいな。お魚を、狐が欲しがると厭だから。」

「可し。」

お静は寄り添ひ、

「さあ、急ぎませう、お晝が晩かつたから、未だお腹は空かないけれど、お魚が食べたくなつた。三枚におろして、中落を煮て、あとは醬油に漬けてさ、片身は刺身にしませうね、庖丁の手際を見せますよ、旨いものよ。」

文誓起



黙つて居る。

「阿母さんも、阿父も、今夜はお留守なんです、いけないねえ、歸らないつて云つておいでなすつたつけ、あの、荒物屋の方でお泊りなの、」

「否、玄武寺といふのに講があつて、お詣りなすつたんだが、晩くなるからお泊りだよ。方丈とも懇意だから、」

「お寺は何處なんです。」

數夫は左を指して、提げたものを持直し、

「向うの山中さ、お前、然う提灯を差上げちや見えやしない。」

お静は提灯を背後へ廻した、海を去ること十町餘、町に遠く、山に包まれた、燉の盡きんとする處、頸の白い、洗髪、浴衣の色も鮮やかに描かれた。

透かすと池子山朦朧たり。

「彼處なの、大變だわねえ、まるで雲の中ぢやありませんか。おや、ぼんやり眞白になつて来た、まあ、曇つたわ、あら、山の裾の方が雪が降つたやうになつたよ、一寸、」

數夫も振仰ぐと、星が隠れて、路は却つて見る目に明るく、恰も銀河が下りて来て、野中へ擴がつたやうである。

「夕立か。」

いふ時、轟々といふ響、稲葉が揺れて翻つて、墨のやうな水田の根から、振ひ出すかと螢がばらばら、消ゆると颯と風の音。——思はず男の手を緊乎と取つて、お静は露で冷い手に力を籠め、

「雷よこまよ!」

「何、汽車の音か、」

聞き澄して、

「海が鳴るんだ。」

「あ、然う、然ういや先刻、地引を見て居た時分も、浪が荒かつたわねえ。一寸、一寸。」

「忙しいね、何だ。」

「山の裾の白いのがむら／＼と動いて居ますよ、浪が這つて来たんぢやなくツて、」

「雲が出たんだよ、」

「そんなら可いけれど、彼處へ浪が来ようものなら、阿父さんも阿母さんも歸られなくなつて了ふよ、何だか氣味が悪いねえ。急に夜があけたやうぢやありませんか、二十六夜だのに、未だ月の明ぢやないんですもの、」

「白浪が映るんです、此の邊はね、時々空が海の色と同一になるよ。」



「あゝ、吃驚した、私、」

「一々何の事だね、黙つてお歩き、見つともない、掴まつてりや澤山です。」

「だつて、だつたつて私は、」とお静は呼吸をはずませながら、物好に振向いた。

「恐いから一生懸命に歩行してるのに、いけすかない畜生だよ。」

「犬も何にも歩行きやしない。」

と齊しく見向くと、莞爾して、

「否、此の瓦を焼く竈ですよ。何時でも何時でも、人を、威かすんだもの、知つても吃驚する

わ。ぬうと目の前へ突立つててさ、癩に障るツちやない、厭な入道だよ。ヤイ、」と提灯の柄を逆

に取つて、此の邊一むら茂つた薄越に、手の届かない處を突かうとすると、ひやりとした一雫は、

葉末の露の散つたのではない。

「何を詰らない眞似をして居るんだ、見たが可い、降つて来た、」

「可くツてよ、濡れたつて浴衣ですよ、ひやツこくツて可い心持だわ。」

故と落着いて、悠々と歩を移す。

「困るな、何も依怙地になることはない。最う一呼吸だ、急げといふのに。」

「厭よ、」と打遣つたやうに云ふ。

「草臥れたか。酷く降つて来ても、お前駈けることは出来ないだらう。」

「卯の年ですもの、飛びますよ。」

「勝手にするが可い。」と振りもぎりさうにすると、入交ひに後れた姿を、慌しく縋りついて、

「不可ません！」

「それ御覽。」

「おや、人が恐がると思つて大層威張るわね、一寸。」

「何だ。」

「こんなことをして歩行くのは、はじめてだわ、滅多にないことなんですよ。」

「滅多にあつた日にや色狂氣だね。」

「ですからさ、雨はふるし、人通りはなし、丁ど土手つたひのやうな路だし、お誂へ通りぢやあ

りませんか、雲脚早き雨空も、ツン、ツル、ツ、ンツ、ツン、テツ、トン、チン、ン、テン、思

ひがけなく吹き霽れて……一ツ打つけて貰ひたいねえ。」

「何がお誂へなものか、それ見な。」といひかけて竈の前を折曲り、薄を抜けて、村の入口、又一



丁場、吹曝へ出たトタン面を洗つて横激がさつとかゝる。

お静はさすが婦人の身、髪が濡れるのを厭つたか、頸を雨に打たれながら、横ざまに袖を翳すと、敷夫は手疾く藁藁の紐を解くより、衝と手に持った、が我にもあらず婦人の肩に差かけた。

「だから言はないこつちやない、お前手拭は持たないのか。」

「可ござんすよ、もつと降れ、此間の、あの螢が澤山飛込んだ時のやうに、大雨になれば可いよ。」

と些と激しく云つた。

「え。」

「然うすりや、又あなたの蚊帳へ入るもの。」

「今晚は。」と唐突に、向うから来て通り過ぎた者がある。

稲葉摺に右左、二人は颯と路を開いて、お静が透さず、

「今晚は、」

「はい、お休みなさいやし。」と生ぬるい野良調子、降にもかまはず、のツさり行過ぎたと思ふと、早や靄に包まれて姿は見えず、中音で、

「あら、どっこいさのサ、どっこいサ、」

「暢氣だことねえ。」

「何方が暢氣だか分りやしない、恚う降つて来ちや、義理にも駈け出さなくつちや形が悪いよ。」

さあ、「奮發遣つけよう。」

「迎も、」

「置いて行よ、」

「可ござんすとも、」といふ口の下から、ばたくと駈け出して、

「厭よう！ 敷さん。」

二十二

文誓起

月ヶ岡へ入らうとする稍手前、秋草山の麓に迫つた處が、岸破と缺けて、五六間が間古い一帯の壁の趣がある。並べて横に細長い小家をかけた、唯竹の柱に茅の屋根ばかりなのは、少し離れた前途の、椿の古木の根を潜つて、路を横ぎつて田圃に注ぐ用水の流れに沿うて、山の根を十五六間、こゝに石段を築いた上なる、觀世音の御堂大破につき、再建の用材を入れてあるので、纔に廂の出た下へ、若い同士は花やかに駈け込んだ。

「お、切ない。しどいことね、何うも餘程苦しくつてよ、少し休まして下さいな、あなた、濡



れましたか。」

片手で海水帽の雫を切つた、數夫は清らかな腕まくりで、これは脊が高いから、低い廂に背屈をしたが、右手には、鯉を結へて提げて居るから、肩のあたり、胸のあたり、單衣の上へ、頬摺して、

「何大したことはない、お前、何うだ。」

「平氣なものよ、浴衣だから。」

「憚りながら私だつて、着ものを庇ふのではないんです。二人でびしょ／＼ぢや、外聞が悪いからのことだよ。」

「何うも相済みません。」とあでやかに笑つて横を向くと、數夫は憎いと思つたやうすで、

「何しろ此の鯉が荷になつて仕やうがない、此處へ置いて行かうぢやないか。」

お靜は向き直つて、涼しい目をまんじりと顔を見ながら、

「止して下さいよ、勿體ない、あなた串戯ではありません。」

「急に降つて来た工合といひ、何うやら此の魚を狐めが見込んだやうだ。」

「厭ねえ、と身を震はすと、ぱつたり取落す、提灯は口を開いて、蠟燭がちよろりと出る。……消えては大變と、早速に拾ひあげた數夫の手に、ぶら下るやうにして、袂に取着く、黒髪がはら

はらと。

「お、冷い、そらお見、恐しく濡れたぢやないか。」

「雫が垂つて氣味が悪いの、」

「其上そんなに恐がりの癖に、何だつて負けない口を利くだらう。最う可し、可し、何の狐なんぞが居て堪るもんか。尤も此邊に澤山居たにや居ただけれど、横須賀へ行く汽車の音だの、鐵砲の音が聞えるやうになつてから以來は、見ようたつて見られやしない、臆病ツちやありやしな

いや。」

「だつて驚かされると、出るやうに思ふんですもの、さあ、提灯を持ちませう。」と仰向けに亂れ

髪を颯と振つた。

「又大變に降つて来たよ。」

「其の割にや身體にかゝらないが、待ちな、向うが芋畑であらうも知れぬ。」と、ずつと雨の中へ灯を向けて、唯見ると、百姓家の外圍、路より少々高い位、二坪ばかりの夕顔棚、雨は其處にのみ篠突く如し。

「成るほど。」

「光秀が出る處よ。」



數夫はこれには答へないで、今夕顏棚を透かさうとして、廂から半身を出したまゝ、一足外へ出て、四邊を睜して、背を捻ぢるやうにして、小屋の屋根越に觀音堂の方を見た。

「さあ、お寄越しなさいよ。」と手を差伸べると、心すともなく背後へ廻して、お靜を暗うしなかつた、情らしい提灯を、此方へ取ると、忘れたやうに、黙つて放して、何としたか、一所に持つて居た海水帽さへ、ハタと雨の中へ落したのである。

「何うせ内へ行つて絞るんですもの、貴方が着ておいでなさいな。」  
尙ほものも云はないで、イんで空を仰いで居た。

### 蟹の怪

#### 二十三

お靜は何の氣も着かず、

「何うしたんです、だらしがいいわねえ、ヨ」

といふ大人びた、快活な、老實やかな、其の癖焦つたさうな懸聲で、腰を雨溜の地に低うして、やがて、片端を取つて其の半ばを引揚げながら、

「紐が泥だらけぢやありませんか。」

と何心なくフと提灯の灯に透かすと、帽子の下に伏せられて、右行せず且つ左行せず、濡色の美しい蟹が一個。

「お、。」と背後へしさりざまに、お靜は反るやうにして衝と立つ。

恚うと期して威してさへ、其の恐れ方に、驚くやう馴らされた數夫は、これにハツとして、心付いて面を合せる、二人の中を、蟹は其の鐵小實の脛當をサソクに横に引いて暗い方へ颯と隠れた。

惟ふにこれは、恚る雨夜を、しのび歩行きの葉武者であらう。

一體彼の觀世音の御堂の下なる古椿が、些細小川に根を洗はれて、土の中に黒く朽目を顯した洞の中に、鎧の袖を揺り合せて、二ツ、三ツ、時に四ツばかり、待伏をするのは斥候で、それより前途、月ヶ岡の方まで、まだ先鋒を進めぬけれども、下の方、五丁畷へ斷續して、五騎、七騎、此處彼處、地の窪める處、水の淺き處、縛を揃へて、陣を張る。此の單陣は縱横の陣に次いで、一陣は町の方へ、一陣は海の方へ、末廣がりに數を増して、五里、三里、七里にはびこる大網颯と打つたる如く、然も軍勢手戈を揃へて、其の數網の目よりも多く、秋草(山名)池子(山名)を捲き落す秋の木の葉に異ならず。萌黄、緋緘、雜鎧、黒革絨着たるもあり、鋭き兩股の方天戟を



中天に振つて、八足の進退自在なるが、いづれも其丈五寸に満たず、小さきは山蟻に如かずと雖も、蛇を斬り、蛙を追ひ、百足を殺し、毛蟲を打つ。時には寺の厨を襲うて古猫を驚かし、軒下をおびやかして別荘の門に犬を馳らす。出沒の極まりなきや、梁を渡り、井戸に潛み、石に化し、砂に化し、水に化し、寸隙を潛るかと思へば、大廣間に駈けて出る。

渠等は、恚くして水を奪ひ、渠等は恚くして陸を奪ひ、山を領し、川を領し、樹を擒にし、草を従へ、年々侵略の域を開いて、果は何をするか分らない。

けれども人はこれを恐れぬのである。學生も恐れなければ、婦女子も恐れず、お静も亦はじめは敢てこれを恐れては居なかつたので。

未だ松蟲の聲も聞かない前、黄昏の濱邊の地引を見ようと、數夫と連立つて月ヶ岡を出で、椿を横ぎり、觀世音を拜み、此の小屋の前を通つて、瓦焼く竈を横に折れると、池子、秋草、右左五丁畷から遙に見ゆる延命寺の石碑について、小橋を渡ると、鎮守の松の森の下は、ハヤ潮風が身に染むばかり。海へ行くのは、停車場の前を横ぎつて、兩側別荘の間を抜け、葭蘆の繁き小川の橋を、最う一つ渡るの、それからの路、しばらく、夜は松蟲の名所となる。……丁ど其の砂地であつた。

お静が蒼白いと語つた海濱の西洋館の土堀の際から、其の爪先を横切つたのは、一騎、花やか

に鋸うたる緋緘の若武者にて。

二十四

初陣なるべし、其の紅蟹、戦に馴れずと覺しく、

「まあ、美しい、と言ふあどけない聲の下に、はらりと手巾で壓へられた。

直ぐにお静は、其の時自分が翳し持つて、夕陽の名残を遮つて居た、手なる海浴の帽を取つて、裏がへしにすると、若き敵將の囚を入れて、其ま、手巾を蔽にして、兩手で昇きながら、嬉しさうに、俯向き見つ。

濱へ出ると、數夫は最初から恚る他愛のない道草に與せず、先達て早や波打際に影を長く、背姿でゐんで、傍に近き地曳網、都人の一團立集ふ前後に、見えつ、隠れつ、幼子がさきに、婦人が次に、壯俊が殿し、脊の高い親仁も交つて、曳哉！曳哉！沖の小島に足を踏張り、暮れ行く空の秋草山に枕するかの姿して、後退りに曳くかと思れば、呼吸をもつかず、すたくくと、入亂れながら足を揃へ、誰彼の鍵繩兩方より、一イニウ三イ四ウ入違ひに、綾とり、投げかけ、引からめて、綱も弛めず働く状を、餘念なげに視て居た。

人目繁ければ傍には寄らずに、お静は隔たつて後なる方、件の西洋館の堀外に、持舟と見えて



引揚げてあつた、白塗の端艇の舳に腰を休めて、數夫の姿と、地引の狀、打寄する浪、かへる浪、岬を漕ぐ船、沖の雲、畫を見るやうに視めて居たが、内證の樂をといふ顔色、手巾の端を擡げて、一人中を差覗くと、むくくと爪を上げた。

遁してなるかといふ風して、下へ丁と引くとするりと入る、覗けば、乗り出すので、又振り下すと、入るのを、窺ふと、のツさり這ひ上る。

「え、憎らしい。」と箕を振るやうに、邪険に、ばさくと揺り落して、其ま、小走に駈け出した、波打際で呼吸を切つて、

「數夫さん、些ともいふことを聞かないんだもの。打棄つてやれ、畜生！」と、突然逆に取りつて帽を返すと、紅蟹は、しばらく鍰の端に留つたが、熟柿のやうにほたりと落ちた。

其のまゝに遁げ去らず、爪を上げて向かつたので、お静は丁ど筒を抜いて銀煙管を取つて居た、雁首にかけて向うへ飛ばすと、はずみに二つばかり、ころくと轉けた處へ、波がしらがざぶりと來た。白泡のなかに、其の一片の紅、翻へつて隠れたが、ざつと巻いて返るとともに、一際色濃く甲を見せて、忽ち、兩爪を上げて、じり、とお靜に差向けると、此方もつかつかと前へ進んで、

「生意氣な」と再び海面へ撥ね飛ばす、見事に轉けたが遠くは去らず、又浪の口が銜へたけれど

も、砂に八ツの足を支へて、二たび方天戟を構へたのである。

三たび目の時は、疾や海の色薄墨を染めたる如く、地曳も黒い影になつて、忙しく燈籠の畫の廻るやう、白く堆き浪打際で、しばらく蟹を見詰めたが、急に弱々しくなつて、黙つて見て居る數夫の背中へ、袖屏風して身をかくして震へて救ひを求めたのである。お静はこれあるがために、

いたく同類の戦士が、復仇を恐れるやうになつたので。  
さればやがて、自分が嘗てなつかしさの思ひに煩ひ、檜物町の抱主さへ、憐んで年を負け、朋輩の手前は落人にして寄越してくれた、數夫と分れねばならぬやうになつたのも、お静は、一度、蟹の怨みゆるぞと思つたのであつた。

## 二十五

「詰らないことをいふもんぢやない、そりや一寸の蟲にも五分の魂、酷い目に逢はせれば、小さな蟲だつて腹を立てます。近頃聞きや螢の彼の美しい光が、つかまへると、最う一倍明るくなつて見えるのも、腹を立つんだつて言ふぢやないか。

先刻お前が捕へようといつて大騒ぎをした松蟲も、あんな優しい、可愛い蟲だけれど、籠へ入れられて鬚を動かす時は、怒つてるのかも分らない。人間にはそれこそ向つたつてかなはないが、



蟲同士、魚同士、鳥同士ぢや、喧嘩もしたり戦もしたりさ、人が思ふやうに、一概に蟲けらとばかりいふやうなものぢやないよ。

それだもの、それ相應に手手が自分の身を守る道具を備へて居て、身體が大切さには、手向ひをしようけれども、そりや最うほんの其の當座ばかりのことで、一寸と遠退きや、其切、何が何だか分るものかね。親子も兄弟もないのを見たツて知れたコツた、怨を殘すの、祟をするのツてことは決して無いんです。

お前は何か、私が唐突に四五年別れるつもりで、奮發をして、餘所へ行くといひ出したのを、蟹の思ひだの、今夜の空模様と同一で、氣が變つたのといふけれど、何の今更當世らしい、心變だの、浮氣だなんて、そんな暢氣らしい事があるものか。

思ひだの祟だのといふよりも、却つて彼の蟹は、私を教へてくれた恩人だと思ふ。い、え、蟹よりはお前が善智識だと思ふんです。

先刻、あ、やつて、二度も三度も煙管で引掛けて撥飛ばすなんて、亂暴なことをして、あとで恐がって震へるから、何故そんな邪険なことをすると云つて聞いた時、靜さん。」

いひかけて、石壇の上なる、觀世音の御堂の縁に腰をかけた、數夫は、傍に差うつ向き、喫まうともせず煙管を持った手を膝に置いて居る、お靜の方に向直つて、

「お前、何と云つた、東京から来て月ヶ岡へ一所になつてからは、張も意地もなくなつて、ぢやまぢやまの江戸ッ兒だのに、餘り自分でも筋が抜けたやうだから、と云つたらう。

どんなに胸へこたへたと思ふ、何！張と意地、男は猶更の事だと、思つて、お前は恐くなつて震へたけれど、私はぞつとするほど身に染みたよ。」と語るだに今もおのづから、數夫は肅然として身を緊むる。

お靜は顔を上げたが、

「氣に障つたら堪忍して下さいな、あなた大丈夫、これから屹と氣をつけて、あんな邪険らしいことはしませんから。い、え、屹とまた我まゝな氣でも出して、お父さんやお母さんに、粗相でもしてはと思ふんでせう。私は最う久しく煩つてから、ほんたうですよ、自分でも生れかはずたやうに氣が弱くなつて、踊の稽古を仕込むたツて、下地ツ子を叱る元氣もなくなつて居たんですもの。

何もあなたへお勤めに、音無しくして居るんぢやないんです。前なら、あんな厭な奴、御祝儀に水引をかけて、御紋着で畏つたツて、口も利くんぢやないけれど、最う堅氣だと思ひますから、お隣の髻だつて、内へ來りや大事にするし、奥さんだつて、此方から機嫌を取るやうにして居るぢやありませんか。此間ツからの約束ですから、私やこれから歸つて、お飯が濟んだら、八幡



様の屋臺へ行つて、あの若い衆に、曾我の顔を拵へて上げるつもりですよ、あなた。」  
屹と云つたが、打萎れて、  
「私や何うしてそんな氣になつたんです。」と愁然として項を垂れた。

### 岩井靜馬

#### 二十六

聲を強うして、  
「何うだらう、まあ、澤庵に握飯さ。ばら／＼蚤が跳ぶ樂屋へ入つて、改良劍舞だか源氏節だか、こんな片田舎のお茶番の後見でもしようといふ氣に、何うしてなつたんだか、御存じ？」と又瞻つた目の裡に、怨あり、涙あり、しかもいふべからざる位があつた。  
故あるかな、涼傘さして當流の大師匠にながしが、横町の舞臺へ通ふ、夕暮の其の七ツ八ツの頃ほひより、踊には天稟の妙を得て、年紀十七の時疾く流儀の免許を得た。岩井靜馬といふ名を其のまゝ、お酌の時から押通して、いかなる座敷を勤むるにも、唯紅燈に蝶の影、綠酒に花の姿のみ、一度も三絢を手に取りなかつたのであるけれども、檜物町の檢番の札、長く三番の下に落

ちず、就中、名題深山櫻及兼樹振、保名の物狂ひに神を會して、紺泥に銀で秋草の亂れ咲を畫いたる舞扇、衝と疊について片膝を立つる時は、席にあるもの襟を正して、地に立つたるは、いかなる上手も、音々に汗を握りしとかや。

からかひ半分土地のもの、客までも聞覚えて、お師匠さん／＼と渾名に呼んだのが誠となり、同一桔梗家の暖簾下なる、下地子、お酌どもが、姐さん、おさらひをと言ふのが最初で、五人七人弟子が殖えると、花は姿、蝶は影、翠帳に宿らず、紅圍に留まらず、堅いが評判であつたから、お店の内儀たちが最良にしたので、町家の娘も次第に加はり、扇子を胸に裾短な、お洒落な涼傘連、朝は四ツ五ツ打續いて、横町の露地から桔梗家の裏木戸を開け、お師匠さん今日は。母屋から中庭一ツ、お靜が居間は離座敷、暖簾を飾らうとて、抱主が別扱ひで、戶外へは出さず堀の内へ、別に岩井靜馬とし、御神燈を提げさせてあつた。

此の座敷で煩らひついて、氷囊に括り枕、紫陽花の影次第に薄く、風鈴の風に弱々と呼吸こそ通へ、やがて石燈籠に月の影さして、蟋蟀の鳴く頃はと、醫者も頭を傾けた時、抱主の姐さんが、人を遠ざけて、膝に抱いて、誰も居ないから親だと思つて、胸にあることを聞かしておくれ。

随分身上のためになつて、小さいが藏も立てたお前のこと、思ひ切つて相談しようよと、こゝではじめて知つて、おや／＼、姿もいつか亂髪と云ふのかい、今時古風な何んのこつた、しかも去



年の櫻時から、然う、そして此頃は旅の空で、そんなら、お前も追つかけて草を敷寝にするが可い。江の島へも行つたもの、裏木戸は自由なり、新橋は直き其處だし、遁げ出しても濟むものを、意地も張もありながら、年期があるから義理が悪いと、それほど主人を思ふなら、何故打明けて云つてはくれぬ。唄の文句はい、けれど、眞個にそんなやうすでは、氣でもふれたら何うおしだ。こがれ死をさせるまでも、お前のからだだで儲けるやうな、情無い私だと、思はれたのが怨めしい、これだつて江戸ッ兒だ。したが他のものの手前がある、私が支度を手傳ふから、氣の向いた時、何時でも可いから、そこを明けて遁げておくれ。但し土産も小使も、目立たぬやうに持たして上げる。やがて龍口寺様のお會式に參詣る次手、内證で寄つて顔を見ようが、女世帯なり、抱妓は大勢。もしか、内があげられぬと、これでしばらく逢はれまい。久しくお前の踊も見ぬ。静ぢやん一ツお名残に、おはこの保名を立たないか。——茶種の畑に狂ふ蝶、翼交して羨しいねえ。直ぐに枕を上げたので、……

實や數夫とは二世の縁、幼い時から、伯父さん伯母さんと、お靜が馴染んで遊びに行つた、隣町に指物屋の名人がある、其が數夫の縁續きで、二階に下宿して居ただけだつたに。

### 若木の橋

#### 二十七

元來、數夫は、月岡正左衛門、老夫婦の實子ではないのである。

其の月ヶ岡の隣村、沼田の豪農、鳴澤なにかしの二男で、世にいふ四十二の二ツ兒であつた。

物語にも此のこゝとあり、一たび棄てて人に拾はせ、やがて取戻せば不忌といふ、相生寺の隠居、其の頃は未だ當住であつた、説に従ひ、さて棄兒にするのに右から左、譬ひ儀式にせよ、拾ひ人が昨日祝を持つて來た村内の者ではをかし、土地は狭いこと、殊に大百姓、雛鶴も一聲や、瓜番の小屋の親仁まで、初産の屋根を仰いだれば、とわざ／＼隣村まで親仁どのが抱いて出かけ、去ぬる丙羊の年。二百十日の大あれで、方丈を吹き飛ばし、本堂も損じたが、未だ其の頃は堂守が居た、此の月ヶ岡の觀世音の縁に据ゑて、式の如く小隠れると、此處へ、嬰兒を亡くして泣きに來たのが、これも小村ながら月ヶ岡の長者と呼ばれた、正左衛門の女房で。

一目見るより、わあ！活返つたと半狂亂、すぐに抱き取つて引返す、石段を下までは下させず、もし／＼と父親が呼び留め、坂の中程で早や取返さうとすると、頭を振つて肯せず、喧嘩をすれ



ば、袖の珠の碎けん恐れに、已むを得ず婦人の云ふがまゝに、あとについて、兎も角、其の住居。まだ新家を設けぬ時分、秋草山の麓なる、丘の上に、一軒家ながら大構で、(近頃は駒田が住居) 慇懃なる接待あり。

返せ戻さぬと、女房と、棄子の親。涙出づるまで争つた三鼎、正左衛門真中にどツかと坐し、目を瞑つて是非がござらぬ、コレヨ、尋常にお返し申せ。さりながら今度を御縁に以來は御懇に頼み存する。仰せにや及ぶべき、御許に差置く分には参らねど、お拾ひ下されし御内儀は、俸のためには命の親。一旦棄てたものなれば、固より手前どもの息子ではなし、正左衛門殿、御夫婦より更めて和子様頂戴いたすと、子の可愛さは知つた同士。父親も心を察して、泣く泣く取戻して歸つたが、縁なれば、正左衛門を、名づけ親に頼んだので、子寶多く設けたらば、養子にくれる事もあらうと、心に念じて數夫とつけた。

實の母は、敢て其の四十二の云々に心づかひをしたと言ふでもないが、産後の肥立抄々しからず、殊に乳の出が薄かつた。

七夜の祝に月ヶ岡から夫婦來合せ、此の由を聞くと手を拍つて、憚り多いが、もつきの幸ひ、此方は年取つてからの初産なり、親の身さへ憂慮なりしに、肥立は固より、乳の道もよくついて、背戸へ棄つるが流る、ばかり、世帯は鎌倉なる雪の下に、若後家を立てて居る、妹に打まかせて、

お乳母になりと上りたいと、胸を壓して歎いたので、數夫の兩親、顔を見合せ、貰ひ涙にくれたのが、屏風の内外で、打合せで、然らば預け参らすべし。

夫婦は恰も夢心地、田圃道を交る、手から手へ抱いて歸つた。

やがて母も本復したが、其まゝ連れ戻すも氣の毒らしく、日が経ち月が経ち、年がかはつて、つい五歳の春まで過ぎた。固より其の間、風なく、雨なく、おだやかなる日さへあれば、缺かさず抱いて來て顔を見せもし、三日に上げず見にも行く。近い里に遣つた風で過ぎたのであるが、さてあるべきにあらざれば、再び數夫は實家に歸つた。

三年過ぎて妹が一人出來た。和子二人切の時はともかくも、お三方あれば數夫をと、名も呼捨てにするくらの、我兒を取戻す劍幕で、夫婦再三出向いたけれども、鳴澤にてはうべなはず、斷つてと強ふる力もなく、其まゝ、再び泣寝入。

たゞ沼田村の空ばかり、二度目の種痘をする時も、醫者の手を引張つて、正衛が自分に出かけたのである。

二十八

五年目に又一人末の弟が出來た、數夫が十三の時であつた。



此度は退ツ引させず、此方も最早や情に迫つて断り切れなくなつたのであるが、其でも未練のあつたのは可愛いばかりでない。此の數夫、うまれつき、美人の聞えの高かつた母親に肖て、なほそれより、蒲容柳質の小公子、所謂身替にならざる首、三太長松の亞流でない。嘗て棄てられたのが月ヶ岡で、觀世音にあやかつたと、人も口々にいつた。目に品あり、道を行く人の親も、振返つて見るばかり。同一年紀頃の腕白どもも、東土産の錦繪は、汚さぬことと合點して、綺麗なものを買はず、蟲が飛んでも柄になつて、皆が數夫を庇つたので。兩親が惜むほど、堪へ難き思ひのなほ募るは、月ヶ岡の長者夫婦。果は相生寺へ日通ひをして、隱居和尚に泣きしみづくと、後に荒物屋の亭主になつて、焼酎を賣らうといふ、頓生屋菩提兵衛とも云つべき變りもの。らつきようの様な坊主首を賭けものにして、下腹へぐツと飲込み、巻り手に數珠をかけて、元氣は可いが御老體、よぼくと下山あり。鳴澤の奥の間に、金銀鏤ばめたる伽藍のやうな佛壇を背負つて、聞説く昔天竺にと、故事やら、引事やら、方便の大嘘やら。會者定離の因縁を説いて、前世の約束とあきらめさせ、漸く兩親を納得させた。

これより前、數夫は物心を覺えてからも、月ヶ岡で月の内の半ば以上を寢泊りして、藁の上より育てられた長者の家に馴れ睦み、我儘も餘計に謂つて、仔細を知らぬ人の目には、却つて月ヶ岡の兒のやうな、そればかりを、實の親は飽かず思ふ位であつたが、膝許に引寄せて、あらためて養子にする由言ひ合めると、然ばかり馴染んだやうに思はれたのも、唯遠慮のない、甘やかす、餘所の叔母さんに過ぎなかつたものと見え、固よりものの道理は分るし、大人しやかな幼児とて、冠を振ることはしなかつたが、悄然とした心の裡、數夫は、兩親に棄てられたやうに思つたのであらう。

いよ／＼月岡の姓を名乗ると、老夫婦のいつくしみは、一人兒の上に、なほ、強ひて移し植ゑた若木の橋、御領主の御祕藏を拜領などしたるやう、乳母が主人に事ふるばかり。

然るにても、人の子の、實の親の懐しさに、道のり一里とは隔たらず、花も同じ時、月も同じ時、軒端にかゝる片時雨も、棟を分たぬばかりだけれど、二日見ねば堪へられず、沼田の沼に釣すといひ、池子に小鳥を狩るといひ、椿が咲いたと、枝ながら、瓜が生つた、と蔓ながら、袂に添へ、手籠に提げて、鳴澤の家に音信るゝを、唯道すがらを案ずるのみ、蝮にさゝれな、漆にかぶれな、勿濡れそと思ふ露ばかりも、養家の夫婦に僻む氣はなかつたけれども、さあ、恚うなると實の母、男勝りの義理正しく、禪を取つて袖に抱かず、もつれ毛を拂つて頬すりせず、使に來たのか、宜しくよと、果ては門から歸さるゝ。

幼馴染の柳に泣き、垣に取付き、松に縋り、しよんぼりと裏の藪にイむことさへ度々あつた、



一時秋の日疾く暮れた、養家へ歸る田圃道、黍穀に月の射す中を、後へ三足、前に二足、我にもあらず辿つたが、餘りのことに世を果敢なみ、十三の幼心、今は慙うと思ひけん、途中から小川を涉り、樹立を抜け、池子の山路をとぼくと、萩薄、遠近の蟲の聲に誘はれて、やがて山深み梟の一ツ鳴いたる森の中、切立の岩の形、朦朧とあるを知邊に、小さき拳ほとくと、美童相生寺の門を敲く。

### 火焰山

#### 二十九

やがて大學孟子など、數夫は今もよく書く手習の草紙の師、件の隱居の膝に絶つて、其の媒妁を怨みながら、世に恩愛の悲しきこと、慈悲の情の辛きこと、苦痛、鬼神の責苦に過ぎたり。浮世を思ひ切りました、養家への義理も立つ、實の親の戀しさも些とは忘れられませう。新發意に遊ばしてお寺に置いて下さりましと、一心に伏拜むと、頓生屋の菩提兵衛、齒のない大口を開いて呵々と打笑ひ、馬鹿野郎、山へ入つて坊主になるより水あがきして河童になれ。重ねてそんな不料簡を出すと、十人百人に珍しい結構な身を棄てて、出家沙門にならうと申す、因果なものは

此の兒でございと、延命寺のお開帳に、見世ものに叩き出すと、天窓から大囀したが。

寺男をつけて養家へ返して、しかし世が世なら弟子にして、天下の名僧にしようものを、と寺を譲つた住職に語つて、默然として歎息し、かまへて人に洩らす可からず、可祕可祕、とあつて法衣の袖を搔合せた。

日ならず、またよぼくと下山あり、養家の父を實家に招いて膝組の内談、喃、それが可からう、可うござりませう。いかにもと事一決。

東京へ出すに極まると、恰も可し、養家の母の妹が縁着いた先方、今は亡き夫の弟、日本橋檜物町に指物屋を營み、職人ながら屹とした暮と、數夫を託する次第になつたのであつた。

村で尋常科を卒へるとともに、高等科は上京して、常盤とやらむ小學校、土地ッ兒も同じで、數夫は二十三の去年まで。

靜馬が抱へられた桔梗屋とは、隣町ながら、背中合せ、指物屋の水口と、踊子達が涼傘を疊む、お師匠さんの裏木戸とは、彼の狭い露地一つ。手拭を伸しても、縁の結ばるくらるな中、悉は略之。

此間絶えず一月に二度、二月に三度など、養父母へ顔を見せに、歸るのが身の勤め、やがて志すことをなし遂げて、二人を東京に迎ふるまでも、田舎に住み果てようとは思はなかつた數



夫が、去年の夏から、突然都門を辭し去つて、長く相州の僻地に埋れ木にならうとしたのには、別に仔細のあつた事で。

こゝに數夫に兄がある。兄弟四人の總領で、名は正三郎。氣性數夫とはがらりと違ひ、幼い時より書を読まず、字を習はず、博奕を好み、相撲に耽り、長ずるに従つて、海道筋に名の聞えた、沼田の正とて大兄哥。

然も豪家に生れたれば、鋭きながらも鷹揚で、金づかひ綺麗に氣位高く、酒とは寢ても、婦人を抱かず、強きを挫いて弱きを助くる、所謂江戸の俠客の概あり。

思へらく、一石の米幾粒ぞ、田地千石を耕して、我天下に何をかなすと。

即ち林を伐つて柱となし、山を崩して庭となし、畠を賣つて塀を築き、田を棄てて屋を起し、蒸氣器械を鐵道で驚擱みに引寄せて、二棟の製絲場、煙突高く天に沖して、池子の頂に黒雲を立てたるが、使ふものには言ふも更なり、繭を買ふにも、絲を賣るにも、我がためよかれとばかりはせず、其の俠氣が先に立てば、然せる社會に立交つて、損多く徳少なく、家産稍傾きたる上、二年續けて二度の失火、人には微傷もなかりしのみ、繭も、絲も、工場も、次なる炎に母屋さへ、唯一擱の燼となんぬ。

這般！ 火に負ければこそ焼けもすれ、おのれ一番正兄哥が、雲をも凌ぐ炎の山を、掌に握つ

て見せうと、此の思ひつきが突飛であつた。

嘗て、繭玉の買出しに、信濃のあたりを經めぐつて、小田原合羽に切草鞋、一文字の笠、脚絆がけ、血氣に路を貪つて、うら枯の頃なりし、焼野が原を通りし事あり。

名にし負ふ淺間の山、野末に黒き衾をかけて、迦俱土の神の閨、物凄まじくも寂として、煙も立たぬ夕まぐれ。

三十

焼石は左右に崩れ、焼灰深く凹んだ中を、唯見ると黄なる流があつたが、硫黄の匂芬々として、面を打つに心付いて、袂なる早附木を探り、試に點じて衝と落すと、水の中に消ゆるが如く、二度ばかり音がしたと思ふと、プス〜といふ響き。

いかさま燃ゆるでえず、と片頬笑して、平氣で一飛に躍越して、其ま、行過ぎようとしたが、心得ず背がほてるに、振返つて見ると這は何處。

早や五六町さきなる方に、ひら〜と炎立つたり、とかういふ間もあらばこそ、いきなり笠を取つて投げ、小田原合羽をかなぐり脱いで、暴風に芭蕉の揉まる、ばかり、十里渺々として一草一木なき、焼野ヶ原の只中に、身を翻して働いたが、一打煽消すことに一間さきへ燃え上つて、



ちよろ／＼と這ひ進むに、茫然として立つて見れば、目も遙に、薄く紫の煙湧き出でて、藍よりも蒼き炎、暮れ行く空の雲深く、浅間を包んで舞ひ下り、野中に颯と擴がる中へ、果しもあらず燃え込んだ、あまりの物の凄じさに、正三郎は空恐しく、我を忘れて、ヒヨイと飛ぶと、踵をめぐらし、里ある方へ一目散。

此處もハヤ火の粉の中かと、膽を冷したが、宿は事なく、小雨が寂しく降つて居た。お泊りなさいまし、おつかれ様で、と出女に袖を引かれながら、正三郎、浅間の方を振り返つて、氣拔けのしたやうにイむ處へ、旅の者三五人、打連れてどや／＼と、酷い火だ、大變だ、三途の川より恐しいと、口々に行過ぐる。

ともかくも旅籠を取つたが、好きな酒も咽喉へ通らず、姐や飯にする、と箸を取つた、平の蓋も開けたまゝで膳を突出し、ごろりと横になると、次の室へ今着いたのが、立ちながら野火の風説。村方に損じもあらば、名乗つて出ようと疲れて寝た。其の火、なにかしの里の人口で、村の者が總出で留めて、幸ひ一本の松をも害せず、但、野の斜めに燃ゆること、一晝夜、約三里。

人に損はかけねえから、其のまゝで黙つたが、恐ろくは天の罰か、一體それから思ひついて、硫黄の採掘にかゝつたのが、間違であつたも知れず、北海道で引請けたのが、死山でまるで。工場は二度の火災なり、のツても反つても最う叶はぬ、御両親もお年紀の上、今度ばかりは愚

癡をおつしやる、男でなくば死ぬものを、腹を切つても肺甲斐はない。資本さへ都合が出来ると、最う一度穿つて見る、活山一ツ別なるは、己が身を憐んで、然る工學士の先生が見込みをつけて下さつた、自分も手心覺えたり、間違ひは無えが、金子だてな。

外に工面のつけやうなし、月ヶ岡へも今までに汝にかくして度々の借用、己の口から最う云はれぬ、弟、一生のお願だ、き様から頼んでくれと、指物屋の二階にたづねて、面瘦のした正三郎が數夫の優しい手を取つて、押頂いて言つたので。

一議に及ばず、歸つて月ヶ岡へ由を語ると、顔を見て嬉しげに、何うしてやつても他人あつかひ、拾一枚ねだらぬを、怨めしいと思つたに、よく金子を貸せと言つてくれたと、涙を流して喜んだが、しかしそれがために田地を賣つた、奉公人にも暇を出して、老夫婦が世を侘しい、さしむかひの住居となる。

然までとは思はなかつた數夫はこれに驚いて、死もなほ足らずと詫び入ると、いや粥を啜つても大事なが、願がある、聞いてくれ。朝夕お前の顔を見て、せめて半年居て死たいと、膝と背に取繼られ、我を忘れて泣き伏したが、直ちに下宿を引拂つて、月ヶ岡へ歸つたので、夫婦の喜び一方ならず、舊家は人に貸し、東京風の別荘づくり、三間ばかりな新家を建てて、やがて親子が引移つた。寥しく嬉しく懐しく、秋春をこゝに暮らして、數夫は月も見ず、花も見ず、唯都の



空を見る時は、池子の山の蜀魂、血を吐く思ひはおんなじで、静馬のお静があるにもあらねず、枕についたが、抱へ主の情に因つて、一所に成つたのであるものを。

神童

三十一

「否、それはよく分つて居る、鐵拐な口も利くけれど、優しいのは知つて居るんです。先刻も濱から歸りがけに、松蟲の音を聞いて、お前が暫時聞惚れて居て、眞個に優しい聲だ、意地はなくツても婦人は大事なと云つたつけ。何、私は、お前が蟲の聲より優しいのを知つてるよ。

またそれを知らないで、いつもいふ通りあの大切な年寄つた二方を、預けて行くことが出来るものか。最う阿父さんや阿母さんは、私にも見かへるほど、お前が氣に入つたやうすだし、申戯でも口へまで出してお云ひだから、お前さへ、優しく留守をしてくれれば、遁れられない義理はあるが、構はずしばらく居なくつても可からうと思ふから、打明けて頼むんだがね。

恚ういふと、大層奮發氣があつて、立派な男のやうに聞えるけれど、それも、皆お前のお庇さ。何うしてこれが、前であつて御覽なさい。よしんばお前に働かがない、些と稼ぎにでも出かけ

なさいと、突出されても意氣地やない、ぼんやり坐つて居る情ない人なんです。

殊にお前が深切に、こんな者でも見棄てないで、一所になつてくれたから、親達の義理ばかりで、引込んで居る時のやうな、唯寂しい氣ぢやない。お前も身體が強くはなし、いつまでも田舎に暮さうといふものだから、金輪際、世の中に出ようなどと、氣は揉むまい。出家でもしたつもりで、果敢ないながら、心易く、此の月ヶ岡で暮さうと、一旦心を極めたんだ。

そりや私だつて何だから、随分、願も望みもあつた、大なことは望めないでも、せめて此の村から數といふものが出たと、人にも知らせたし、自分の名は出さないでも、村の名、親の名を知らせたい位なことは忘れないうで居たんだが、一年なり、半年なり、此の烈しい世の中で、學校にはおくれるし、友達には忘れられる、あとの者には追ひ越されるといふ譯だから、氣も滅入つて、もう何うなるものかと思つた處。

丁どお前が尋ねてくれて、あの地藏様の前であつた日さ。

相生寺の山門の邊を、ぼんやり歩行いて歸つて來ると、路傍の畦に木槿とね、それから早咲の萩が咲いて居て、餘り綺麗だから、一枝折つて、それから歸りがけに、兩側が藪で、それに梶の大木が岸におツ冠さつて、薄暗い中を、沼田の沼から流れて來る、小川が通つて、丸木橋が懸つて居る處があるがね。



流の些と深い處へ盥を浮かして、竹で漕いで遊んで居た、九ツばかりの色の白い、くりツと肥つた、腕白さうなのが丸裸さ。

田舎ぢや珍しくもないことだから、それに心は留めなかつたけれど、あゝ、此の橋を渡つて、月夜にお山へ行つて、坊さんにならうと思つたこともあつたつけ、と流の源もなつかしいし、石を拂つて腰をかけてさ、手帳があつたから、描くともなしに其處の景色を鉛筆のさきで引いて居ると、盥に乗つて居た腕白が、ざぶ／＼と泳いで来て、ひよいとお前、橋へ上ると傍へ来て、慥う、膝に手を構へて及腰になつて覗くんです。

人肌がするほど傍へは来ず、ものも云はないで、目を圓くして瞪めて居たが、やがてもう止さうとすると、(をぢさん上手え喃。)ツてお前、其の繪をくれろと言ふんだ。

小兒にだつてやれるんぢやない。其よりも之を上げようかと、萩の花を見せるとね、何、そんなものはいくらでも家に咲いてると、然ういふから、何處だと聞くと驚いた、道で折つたのが其の小兒の内のだつたが。あゝ、然うか、悪いことをした、堪忍しなツてあやまると、其ンばかり構やしない。内には澤山花が咲く、大な椿があつたけれど其は暴風雨に吹折られた、まだ、牡丹櫻の綺麗な樹がある、それが濟むと霧島つゝじといふのが咲くし、菖蒲もある、桔梗もある、最う些と經つと菊が咲く、それからお腹の痛む時お粥に入れて煮て食べると、直に治る花もあると、

話しながら、又、ぼちや／＼と水を分けて、盥へ入ると、背むきになつたがね。」

三十二

「靜さん、お前がこれだけ聞いても、そこいらを驚のやうな聲を出して、ぎやあ／＼駈け廻つて近所の百姓の小兒とは、宛然腹が違つた伶俐なものだと思ふだらう。

力味があつて、可愛くツて、人見知をしないで、ぞんざいでない、そしてね、其の目の品の可さつたら、氣の所爲か、口を利くのに訛も少なくツて、聲さへが清しい。私は神童、何、人間並すぐれた佳い兒だと思つたよ。

左様ならと、分れて歸る路々、氣恥しいやうでもあり、懐しいやうでもあり、頼母しいやうにも思つて、先づ此の月ヶ岡も彼の兒のために、世間に聞えるやうにならう、後には天下の指折のものになるやうに考へられた。

自分は自分で見限つたし、其處へお前が来てくれたものだから、最う／＼望はなくなつたが、餘り生れて来た効がない、待て／＼、あの小兒のために、後の榮を祈つてやらう。

相生寺の先のお上人は、私が小兒の折には、何んなにか行末を頼母しがつて下すつたか、それは私が及ばなかつた、何うぞ出世をしますやう、あの兒が名を天下に上げて、私が望んだ志、月



ケ岡といふ村の名の、津々浦々にまで聞えますやう、他に身替のない田舎、我が身にかへても念じ上げる。私はいつまでも此處で氣樂に世を送つて、ならば其の兒に讀書の世話でもしよう、と、

……

今考へりや恥かしいが、此の御堂の觀世音は、私が生れると襦袢の内から御恩になつた佛だから、一心になつて、斯うやつて、お前が寝るとは起きて出て、三晩ばかりかゝつてこしらへた、爰にあるのが、其の、心を籠めた誓文です。」

數夫は右手に一折の、短冊形の起誓文を、もの靜に持つて居た。

「そして人に知れないやうに、あの先刻出して來た、額のうしろへ納めたんです。御覽、心變の何のツて云ふけれど、これにも私の名とならべて、お前も連判狀の一人だよ、とさらさら〜と解いて兩手を添へ、片端を斜めに落して、お靜の固く引緊めた膝へかけて、仄な明を差向けると、婦人は瞳を動かしたるのみ。

清らかな頸も、耳許も、髮の亂に曇りを帯びて、岩井靜馬が倅は更なり、打見には三十路ばかりと、人もいふほど世帯染みた、病後の寢れ今の中に、又傷ましきまで、頬もこけて、風が染むか、肩もさみしく、力なげに左手で壓へた、胸のあたりの膨らかなるも、石女のあはれが見える。

つい今しがたまで、思ふ男と、二人づれの嬉しさに、野路の雨もものならず、氣も冴え、聲も

高く、珍しさに重きも忘れて、丸く肥えた鰹を下げて、口三味線できめいたとは、生れかはつたやうである。

引添ふ數夫も物寂しく、丘の薄ものもの淋しく、大空の星の光も淋しい。たゞ御堂の縁の、朽ちた欄干に引かけた提灯の明が射す、むら薄の葉に包まれ、莖にかゝつて轉がった、一尾の魚のみ、露に活きて、草の葉よりも蒼く、二人の顔の色よりも白い。

これより前、此の御堂にのぼる時、彼の材木小屋を出でて椿あり、ついて小流に沿うて行けば、觀世音おはします、其處へ行つて雨宿を、と數夫は心有つて拵へたのであるけれども、お靜は唯興に乗じて、新家の近いのも小降になつたのも怪まず、まるで道行だね、意氣で可いと、一つは蟹に恐れたれば、佛の御名も頼母しく、浮か〜と坂を攀ぢて、威勢よく伏拜み、御免下さいましなどと薩陀に挨拶をする浮かれ加減。雨は其折から上つたのであつたが、大空に雲の名残の無きさへ、お靜は疾より夢心地。

たとへ鰹を提げて、二人づれ、同一お靜と數夫とが、手を引き合つて丘の下を口三味線で通る姿を、別にあり〜と此處から見ても、驚きも怪みもしないであらう。

文誓起

其の時數夫は身を開いて、其處ともなく星の色を仰ぎながら、

「最う此の誓文を上げてからは、日も月も年も長くつてくれるとばかりで、他に何にも思はなか



つたが、いつかお前と、矢張り此處へあそびに來た時だつた。」

三十三

「ねえ、桔梗だの女郎花、薄だの、藤袴はい、けれど、水引の花まで、珍しさに抱へ切れぬほど両手で抱いて、帷を下りる時、蛇が恐いといふから、私が先へ立つて持つて居た桑の枝を折つたのに捉まりながら、鬼薔の葉を見つけて取らうといふから、咲いて居ないのにお止しと云つたら、(あの、お父さんもお優しいし、お母さんもお優しい、あなたも優しいし、私も優しい、御覽なさい、桔梗が優しいのに、女郎花が優しいでせう、薄も然うなら藤袴も優しい花、又優しいものばかりぢや、何だか心細いやうな気がするから、鬼薔を交ませせう。)とお前が然う云つた時から、最う、私は少し考へついて居ただけけれど、意氣地はないが、どちらとも心が決まらないで居たんだから、何も今日思ひ立つた譯でもないが、先刻の蟹の時、何うしても奮發せずにや居ないと極めた。

なるほど氣がつけば段々に張も無くなりや、意地も無くなる、何うやら聲まで低くなつて、お互に是ぢや何の事はない、人間のおも湯のやうな、しつこしのないものが出來つたふ。

だから靜さん、よく思つて御覽、何も悲しいことも、情ないこともないんです、思ふやうにな

りさへすりや——またしないで置かうか。それだもの、祝つてくれたつて可いわけた、唯頼みた

いのはお二方で、今夜彼處に在らつしやる、と少し伸上つて池子の方。

お靜も夢見るやうな顔を上げた。

丘の下で、

「朝に咲き、夕にしをる、朝顔さへも、あら、どっこいさのサ、どっこいさ、」

と幽に聞えて、通るものがあるので、數夫は衝と身を以つて提灯の灯を秘した。

「數夫さん。」

「何。」

「そして何時行きます。」

「直ぐ。」

「え！」

「何も今ツからと言ふわけぢやないが、實は反故にする氣で居たけれど、慙うなれば大切な私を眞眞にして呉れる人の手紙が來て居る、其人と一所に行つて、志を立てるには、最う然う悠々と

はして居られぬ。思ひ立つたが吉日だから、明日にも出かけようよ。考へて見りや氣恥かしい…

…此の誓文は何のこつた、第一佛様にだつて申譯がないんです、と、笑さへ浮べた其の顔、眠の

文誓起